大正十年 新年號 第九巻

うきよ

第百十記念號

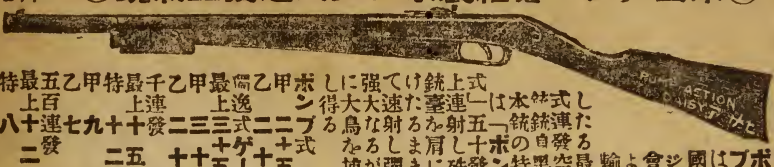
ASIAN COLLECTION
JAPANESE
NE
1310
U35
vol.9
no.1

東京
樂文社

此廣告に依り御註文の方は『うきよ』の廣告に依る旨御附記を乞ふ

米國デージー會社製ボンプ式連發空氣銃

彈丸二袋進呈



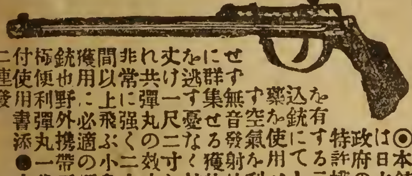
ボンプ式は米國デージー會社より輸入したる最新式連發空氣銃にして本銃の特色は黑色ボンプ以上連發「ボン十五」射臺に付殊に肩射るまた速てけ強力に彈ましろ鳥な大得るが捕獲

ボンプ式 甲二十五圓 乙二十圓 獨逸式ゲーム 最上三十五圓 甲三十圓 乙二十圓 千連發 最上十五圓 特十二圓 甲九圓 乙七圓 五百連發 最上十二圓 特八圓 甲六圓 乙五圓 單發 最上七圓半 特四圓半 甲四圓 無敵式三圓 送料各五十錢

元込十二連發小鳥獵短銃

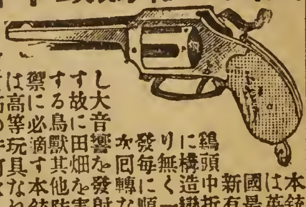
專賣特許第二三八二三三號

特價一圓五十錢 送料



◎本銃は日本政府の特許を機械的に利用して火藥を使はず空氣の作用にて發射する故音無く且つ一發二十發連續して射つ事が出來る一尺五寸の效力が有る〔以下不鮮明〕 ●一帶の小鳥を獲るに最も適當なる銃にて二十連發用 ●附屬品 彈丸十袋 使用書添

英國式有鷄頭中折五連發短銃

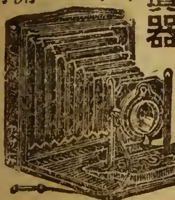


本銃は英國最新中折有鷄頭構造にて一發毎に回轉して射つ無類の銃なり田畑に響き其音大に鳥獸を驚かすは勿論其他野獸の害を防ぐ玩具にして高等の筋は許可を要す隨意に使用出來る也 購入の際は其筋の許可を得て使用する事

特製五圓 甲四圓 サック付 乙三圓 使用書添 送料各廿錢 並二本筒壹圓廿錢 並製單發壹圓

キネン寫眞器

リリース開閉



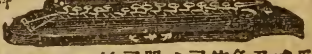
腕形折疊自由而枠使用藥品三脚臺付 手札形特十八圓上十三圓甲五圓乙三圓 名刺形特十八圓上七圓甲四圓乙二圓丙六圓 送料四十錢 名刺形 十圓 送料三十錢

○本機は寫眞機のキャビネ能たる鏡玉とシャッター選に特別最良品を用ゐ器械組立完全にして鮮明なる寫眞を撮る事が出來る如何なる素人にも直に撮影出來る様特に長所ある機械 リリース開閉機付 獨習案内書傳授付 術一撮影

ポケット用寫眞器

引出せば圖の如く疊めばポケットに入れられる小形にして携帶便利 影確實蛇腹形クロース張 シャッター付取枠付 ズックカバン付 最優等品 甲二圓 乙一圓五十錢 リース付 甲二圓半 乙一圓二十錢 名刺形甲二圓半 乙一圓 練習用 使用具藥品進呈寫眞獨案內附 送料二十錢

新式弓爪兩用大正琴



爪を以て彈ずれば三味線の音及陽琴等の音を發し弓を使用すれば胡弓の音色を發す美妙なる特長也 器は弓爪兩用の絶妙なる音色 絲付獨習書添 一號二圓十錢 二號三圓 三號三圓五十錢 四號五圓 五號特製 送料各五十錢

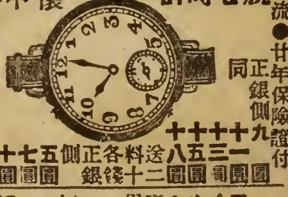
腕卷時計

實價流 ●廿年保險證付

正銀側 九圓 十一圓 十三圓 十五圓 十八圓 送料各二十錢 正銀側 五圓 十七圓 十二圓 十五圓

懷中時計

實流



英國式活動寫眞

◎本品は器械完全映畫の鮮明なる活動敏活なる本器の特長は容易に少年兒童にても使用す●附屬品全部付 ●フイルム六本及バック畫六枚共進呈 ●興行用と同品の長尺フイルム壹(尺十錢)戰爭滑稽舊劇新劇御望の品御註文を乞ふ

一號三圓 二號四圓 三號五圓 四號七圓 五號九圓 六號十二圓 七號十五圓 乙號廿圓 甲號廿五圓 (送料各五十錢)

愉快衣

原名ルーデサック 男子用 特製一本入六十錢 二本入壹圓十錢 四本入貳圓 送料十五錢

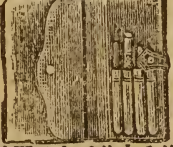
眞正いもりの黑燒

男女和合の礎 秘密藥使用書付 特製貳圓 別製壹圓 並製五十錢 送料十五錢

最新式高級萬年筆

本品は品質佳良體裁優美で書き工合良き事は本品の特長也十四金ペン先付特七圓 甲五圓 乙三圓半 丙貳圓丁壹圓半 次壹圓廿錢 送料十錢 並ペン先付特壹圓 甲七十錢 乙五十錢 丙卅錢

新形シース



本品は本皮製にして高尚優美堅牢なれば永久に使用に堪へポケット懷中に入るゝに至極輕便開けば中央に手帳兩側に文具錢入れ其他日用品插入の裝置有り 二ツ折三ツ折同値段○特製 六圓一號 四圓二號 三圓三號 二圓五十錢四號 二圓三十五錢五號 一圓六十錢六號 一圓七號 送料二十錢

電氣幻燈器

フイルム應用

本器は一ツの器械にて幻燈映寫、寫生、實體鏡實物映寫の四種に應用出來る實に輕便なる嶄新發明品也 鏡板スリ硝子使用書 フイルム廿四枚付 甲九十五錢 乙八十五錢(送料廿五錢) フイルム五十枚五十錢

大阪市東區玉造黑門町 振替口座大阪四五七二番 木村雜貨店 定價表二錢封入要 切手代用一割增

お正月の

お化粧には

晴々した色艶を現す―肌アレ止めの

ホーカー液

ホーカー化粧品本舗

東京神田和泉橋際

堀越嘉太郎商店

電話神田 一四三 一四四 一四五

振替東京 一五六

お出掛には

美しい白さに塗く

ホーカー白粉

BRIGHAM YOUNG UNIVERSITY

3 1197 23593 1083

THE LIBRARY

BRIGHAM YOUNG UNIVERSITY

PROVO, UTAH

日本一の襲たれ先生……九

閨怨秘話銃聲三發……一四

若き私生兒の死……一八

家出して口入屋に欺かれた私の告白……二三

阿波の正月裸踊り……三〇

裁判哀話夫を殺した女……三四

生臭坊主の策略……三八

女優募集の家へ行く……四三

大正十年豫言 浮世菩薩御筆先……二

記者乞食樣を尾行する……五〇

屑屋さんの打明け話を聽く……六〇

表紙 吉岡鳥平繪

お年玉口繪

危險（原色版）

手紙（寫眞版）

ポタリ（寫眞版）

死の前（寫眞版）

天の耳（寫眞版）

懸賞讀者文藝

どゝ一（正月）…柳 春吉選

川柳（初鶏）…島山汀果選

俳句（書初）…井上啞々選

懸賞判じ文……表紙の三

第百十記念號

淺草公園を歩くこと……………七三

□蠻俠おでんや……三八
□怪憎河合大示……六四
□神主の娘と士官……六六
□大東京に化物騷……七〇
□俵藤太の孫貞子……六一
□聲色屋の苦心談……五三
□三角戀愛……八〇
□新年大演藝會……八四
□演藝樂屋話……八四
□花柳珍語……八八
□活動街の獲物……九〇
□米國ベンネット君……九四
□白山藝妓評判……九六

娘行狀記（本誌婦人記者上野附近の娘さんを苦心探訪す）

寫眞判斷（下關田中家米香　新橋淺田家園治　白山金山喜小とし）

淺草の女（又左郎に戀した濱田靜江　玉突美濃屋のお德）

町内評判　自百十二至百二十三
（片假名のルビ、葵館と電氣館、電氣館マーベル
一條久子の死、神山仙子の死、旦夕に迫る大本教
人語を發する鰻、明治神宮拜觀雜觀、不思議な蠶の祟
賀松之助、困つた警官、横着な愛活家、淺草名題三馬鹿
活動辯士の奮慨、江尻滸の師匠、通夜物語、はたやお照さん）

女曲馬師に捧げた學生の戀……茨木紫光作……九八

■■■次目號月正年十正大■■■

昔も
今も
大阪高津表門筋・
効能
逆上を引下便通をよくし
梅毒其他諸毒を下す
藥價
半週分 丸貳拾五錢 煎貳拾五錢
壹週分 丸五拾錢 煎五拾錢
參週分 藥壹圓三拾錢 藥壹圓三拾錢
五週分 藥貳圓 藥貳圓
送料 ▲内地十二錢 ▲臺、樺、鮮、支四十五錢
効能で賣れる
七ふく
ひゑぐすり
本家七ふく伊藤長兵衛
振替阪九七三・電南七二九

危險

危險は障子の中へ迫つてゐる 怪しの男が窺つて居るではないか。障子の中には誰か居るか。此危險が何う開展するか知りたい人は本文「銃聲三發」を讀んで更に想像をめぐらしてもらふ必要がある。

▶此廣告に依り御註文の方は『うきよ』の廣告に依る旨御申添を乞ふ◀

美容新劑 やせる藥

(改正藥價)壹劑四圓廿錢、貳劑七圓七拾錢、特別製分拵壹圓貳拾錢

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徵したる唯一の瘦身劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特效藥なり故に彼の見苦しくふとりたる諸君は速に本劑を用ひ其卓絕偉大なる奇效を知られよ。醫學士大森柳二氏は博文館發行雜誌女學世界誌上「肥える法とやせる法」と題せる項目中「やせる藥」に就て說明して曰く「新聞紙上にやせる藥の廣告が出て居るが絕對的に信用することは出來ない。現今西洋で行はれて居る信用のあるやせる藥と云へば。ヨードチリンである』云々と本劑は卽ち大森醫學士の所謂『ヨードチリン』を主劑として調製せしものなれば其效力の確實なる敢て喋々辯明を要せざる所なり。

毛髮速生 毛はへ藥

本劑(藥名ヘアーグロース)は多年研究實驗の結果發見したる毛髮速生藥なり卽ち男女共禿頭病の人各種の病氣にて脫毛する人頭髮及はえぎわの薄き人まゆげ口ひげの薄き人やけど及腫物の痕毛なき人其他總て毛のあるべき所に毛なき人用ゆれば毛髮蒼々と速生する特效あり本劑は世にありふれたる種々雜多の毛はへ藥とは其效大に異なるに付幸に玉瓦混同視することなく速に試み偉大なる卓效を知られよ。價小劑壹圓卅錢中劑二圓卅錢大劑五圓卅錢特別製分拾圓卅錢着金卽刻送藥す郵券代用必ず二割增し。

最新發見靈藥 腋臭わきが

本劑(藥名腋臭必治劑)は最近發見の特效藥物を主劑とし百方苦心研鑽の結果完成せしワキガ症靈藥にて本劑の作用により腋臭の病原たる汗腺及皮脂腺を根底より變質せしむるを以て難症腋臭も完全に治癒す故に從來他藥無效にて全治せざる患者は速に試み其病原を去り苦惱を永久に脫せよ但し本劑は類似藥と異り頗る高貴藥原料を以て調製せるに付藥價從つて不廉なるも效驗は確實顯著なること疑なし。

(改正藥價)小劑貳圓拾錢輕症用參圓拾錢重症用六圓拾錢頑固慢性症用特別製分拾壹圓拾錢。

血塊月やくおろし 通經劑

本劑は最近發見の優秀なる流經專門藥にて胃腸を害せず子宮に作用し月やく止り月やく不通及び血塊を迅速に快通流經し且つ月經閉止より起る子宮病血の道を治癒し惡血古血毒血を一掃す本劑は當館多年研鑽の結果完成せし靈藥にて創製以來旣に參拾年に達し頗る大多數の患者へ實驗せしものなれば其靈效確實なること遙に他の類似藥に優越し不思議の效果を奏す故に從來他藥無效にて煩悶せる方は彼れ是れ迷はず速に試み苦惱を去られよ(改正藥價)壹圓六拾錢貳圓九拾五錢六圓拾五錢頑固症用特別製分拾圓拾五錢著金卽刻密封送藥す。

以上四藥專賣

東京北品川町百五十四番地及貳百卅六番地

電話高輪七九六番
振替參貳壹貳貳番

日新館製劑部

明けましてお芽出たうございます
本年も相變らず御引立を願ひます

淺草
分喜久よし
喜の字　でん助　きん子
豆奴　ゆめ次　琵琶子　お多福
〔淺草千束町・電話下谷二六八二〕

下谷
音羽家
おえん　花子
〔本郷同朋町・電話下谷五五七七〕

牛込
金新仲
松子（露國人）　里千代　その子　榮美子　茂千代
照葉　久千代　源太　一二　久鶴　なの葉
〔牛込神樂町・電話番町 三〇一五／三五一九〕

赤坂
一芳川
渡邊一二一
〔赤坂田町・電話芝 七四三／三三五六〕

（中付二）

明けましてお芽出度うございます
本年も相變りませず御贔屓の程を

白山
金やまき
小とし
若千代
君代
豆千代
久美助

〔小石川指ヶ谷町電話小石川八八二〕

待合
仲よし
白山・電話小石川二三二一番

お正月を心安くお遊びにならうと思しめしの方はどうぞ手前共へお越し下さい

新橋
福の家
つや栄
うた菊
つや葉
つや福

〔京橋宗十郎町・電話銀座二九二八〕

待合
龜鶴
白山・電話小石川一二二八番
小林きた

靜かな座敷と親切な女中が皆樣をお待ちして居ります

講談世界

新年號出來　出世くらべ　一冊五拾錢

■燈籠竹（講談）……田邊南龍
■黑田騷動（講談）……桃川桂玉
■塚原左門（講談）……昇龍齋貞丈
■狂歌羅宇屋（落語）……春風亭柳枝
■燒餅八藏（講談）……山野芋作

三大讀物

大笑講談　變人三幅對……神田伯山
武士氣質　秩父の狸……桃川若燕
奇怪小說　細胞學者……堀兵衛

■猿の肝（童話）……春野草人
■酒場の女（小說）……小生夢坊
■佐倉宗五郎（講談）……秦天涯
■天晴銀次郎（講談）……銀次郎
■仙子の死（小品）奈良八重子

▼松の内（表紙）……佐藤素洲
▼社頭曙（口繪）……近藤紫雲
▼美人、釋師、落語家（寫眞）
▼竹本團華……提灯家
▼說經節演奏會……
▼新內節小史……靜彌
▼大阪芝居話……忠義

▽刑事の失敗……寢野一泊
▽キネマ閑話……野呂金生
▽投書家新番附發表……

東京神田ハタゴ町一の二三
文光堂發兌

(中付四)

天の耳

—(坊主の策略な見よ)—

『僅か千や二千の金の爲めに自分で自分の身體を切るとは……』と女房の聲、緣の下には九太夫ならぬ刑事が隠れて耳をすまして居る。

死の前

—(夫を殺した女を見よ)—

女が障子の外から窺がつて居る。手には露垂る刃を握つて居る。終に惨殺の悲劇が演ぜられたのである。

ポタリ —(日本一の糞垂先生を見よ)—

下宿屋のお内儀が寐て居て、ふと氣がつくと天井からポタリと雫が自分の顔へ落ちた。何だらう。これから意外な發見となる。

手紙

—(銃聲三發を見よ)—

元警察署長の許へ手紙を持參した靑年がある。銃聲轟く事件はこれから初まる。

新年のお遊び場所は此所

□□□□□□□□□□□□□□□□

淺草公園

日本館

館主　櫻井春光

本館の特徴は

内容充實
新派劇の優秀
舊派劇の奇拔
西洋映畫の卓越
女給仕の親切
十數名の辯士

映畫封切場

帝國キネマ演藝株式會社

謹賀新年

東京京橋南傳馬町

星製藥株式會社

電話京橋　四一七、一七八五、二八五八
三〇二〇、四〇一七

うきよ百十號を記念して

樂文社は其雜誌うきよ百十號を重ぬるにいたりました。で、發展を記念して右三先生の肉筆短册を頒布する光榮を有しました。

揮毫先生

巖谷小波先生
永井荷風先生
井上啞々先生

今さら申すまでもなく、三先生の名聲は永久に輝くべき大家であり其肉筆は容易に得難いものであります。諸君は此好機會を逸することなく斯かる低廉な會費を以て一家の實物を得させ給はんことを切にお勸めします。

申込の方法

三先生の作品の中から、諸君のお望みのだけを明記して會費と共に樂文社代理部短册會宛に申込めばよろしい、會費は必ず爲替でないといけません。

頒布の方法

申込みの前金が屆けば直に受取りを差し上げます。そして作品は一箇月以內にお屆けします。荷造りは贅澤に致しますから、什麼遠い地方でも毀損する虞はありません。

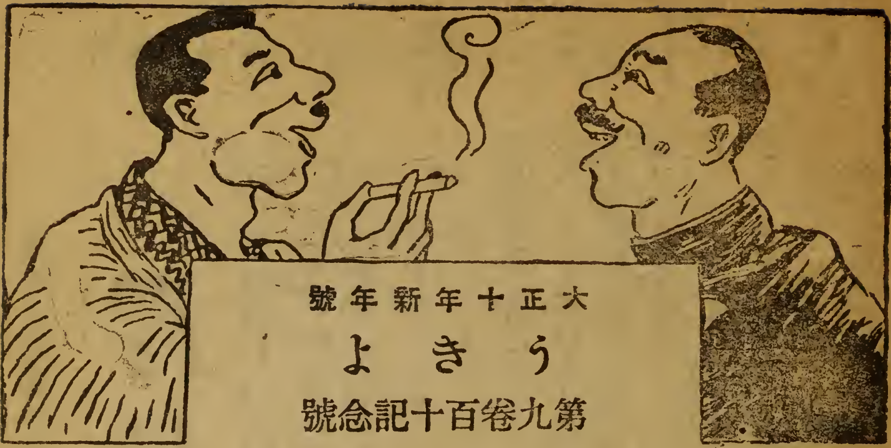
永井荷風 巖谷小波 井上啞々 先生肉筆短册頒布會

巖谷小波先生	一枚	金三圓	五圓（畫とも）
永井荷風先生	一枚	金三圓	五圓（畫とも）
井上啞々先生	一枚	金三圓	五圓（畫とも）

申込所

東京市京橋區大鋸町十一番地

樂文社代理部



大正十年新年號

うきよ

第九巻百十記念號

●大正十年の皆さんは斯ういふ運勢です

運勢	年齢
本年貴方の運勢は、鬼門に當りますから何事も愼まなければ間違ひがあります、が短氣口論を謹めば出世する年です、爭事は必つと負けます。	四、十三、廿二、三十一、四十、四十九
貴方は申分のない善い年です、一家心を合はせて努力すれば望みは叶ひます、殊に十月から尙ほ盛んになります、商賣を替ても損はありません。	五、十四、廿三、卅二、四十一、五十
貴方は、何となく思ひが叶ひさうに思へて居て、實際さうはいかない年です、職業上に迷ひが生じますが其はいけません、事業は割に損です。	六、十五、廿四、卅三、四十二、五十一
貴方は苦勞の年です、相談事調ひ難く、長女又は老人に禍ひがあります緣談はなるたけ控目にした方がよいです、兎に角靜にして居なさい。	七、十六、廿五、卅四、四十三、五十二
貴方には無事な年です、商業上に利益を得ます、けれども虛榮心の爲めに少しく失敗もあります、口の禍もありますから愼みなさい。	八、十七、廿六、卅五、四十四、五十三
貴方には申分の無い年です、何事も勇往邁進するがよい、唯餘り强情を通して後悔することがあります、笑つて進めば成功疑無し。	九、十八、廿七、卅六、四十五、五十四
貴方は八方塞がりですが其麽に惡い年ではありません、金も儲かる病氣も治ります、然し借金して業務の擴張はいけません。	十、十九、廿八、卅七、四十六、五十五
貴方には善い年です、唯兄弟の爭ひを愼しみなさい、緣談金談は遲く調ひます、色情の爲めに身を誤ることがあります、然し大禍ありません。	十一、廿、廿九、卅八、四十七、五十六
貴方には惡いと云ふ程の年ではありませんが、決して好運とは云へません、爭へば勝ちますが損をします、九月頃から幸福が多くなります。	十二、廿一、卅九、四十八

●委細は寫眞を添へて年齢を書いて申込めば答へます

大正十年の豫言をし給ふ

浮世菩薩御筆先

■■■■■■うきよ愛讀者の外讀むべからず■■■■■■

〔はしがき〕

お直婆さんのお筆先、大本教のお婆託に依ると『大正九年の八月には東京へ飛行機が飛んで來て爆彈を落し木つ葉微塵にするぞよ』と宣つたが、別段木つ葉微塵にもならなかつたぞよ。『鎭魂歸心は許さぬぞよ。神諭火の巻は押收するぞよ』と宣つた内務省は本當に神諭火の巻を押收したが、其際、『今年中に大水が出て、警視廳と内務省が流れるぞよ』と仰せられた、御婆託はスカシッ屁に了つて遂々流れずに濟んだぞよ。『内務省の役人は解らぬ。今に解る時が來るぞよ』と言ひなまんしても、何時までも解る時は來ぬぞよ。不景氣の聲に暮れた大正九年は、實際に、平隱無事であつた。不逞の鮮人が捉はれたり、暴風雨の大被害があつたり、世界日曜學校が開かれたり、國勢調査をやつたり、或は、失業救濟運動が起るなど、チヨイ〳〵變つた事はあつたが、ドレもコレも、屁のおならで砂と小石を吹き分けたに過ぎなかつたぞよ。

元正詐を啓き、萬象咸な新、四山霞を帶び、枯木春を含み、

浮世菩薩新しく出現して

新年の光景、恁麼に歴々たる初夢、篳篥の神々しく、枕元に御靈現遊ばした浮世菩薩――尤も此觀世音は、『チヨイト貴郎、さう濟してゐないで、一トツお惚けなさいよ』などと言ふ人達に似た此頃新しく出現された神樣です。

ギイー（扉の開く音）

『あゝら善哉々々、汝うきよ記者汀果坊、昔臘は屁を垂れ鳴らした功に依つて、今汝に一巻を授く。必ず夢と思はず今自らの言ふ事を、一々頭に入れてたべ。汝と同じ惡友に柳春吉といふのがあらう。アレは古今稀なる色男で、自らも多少思召しがあるぞよ。併し浮氣をする性分故我れ陰身に附き添ひ、、、イカもの喰ひをすると必ず鼻を貰ふぞよ。鼻が無と鼻クタになるぞよ次は吉岡鳥平の番だ

アレもいゝ年をして若い娘さへ見れば目の色を變へる。別に自らは思召しもないが、餘り尻を嗅ぐと狂犬病を貰れるぞよ。島田弔雨にもよく言つて置け、アレは又後家を好いて困る。茂木血勝は、女房と疊の新らしいのと一緒にする癖がある。親のある中に直して置くがよい。樂太郎は今年中に大成金になるぞよ。但金玉が狸程になるのかも知れない。啞々には壽命を百十一年一月一日午前一時一分一秒まで伸せて遣る成金と謂へばうきよ讀者は、今年中に、ソレはゝ素晴しい大成金になるぞよ。結婚は纒るぞよ。待人來るぞよ。紛失物は出るぞよ。病氣は治るぞよ。家相も人相もよくなるぞよ。思ひ事叶ふぞよ。開店大吉だぞよ。移轉もよいぞよ。身體が肥るぞよ。女は惚れるぞよ。心中するぞよ。オットこれは取消し。、、、、ちアによつて福々圓滿、そこ

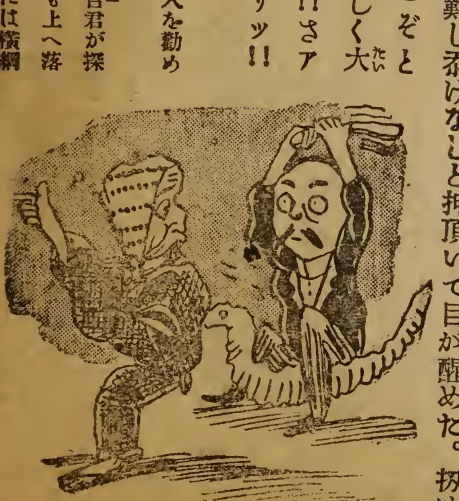
で福を分る爲めに、八さんも、熊さんも、隱居さんも、後家さんも、姫さんも、お妾さんも、美イちやんも、君ちやんも、姐ちやんも、女將さんも、半玉も、女學生も、久米仙も、乞食も、前の家も、隣の家も、落語家も、俳優も、下女も、女郎も、二階の人も、下の人も皆々一同打揃つて。うきよを購讀なさる。遠い處は汽車汽船電信電話の便を以てお誘ひ合せの上永當々々猫も杓子もチヤン〳〵坊主に至る迄陸續とお買取、御吹聽あらん事を偏に乞ひ願ひ奉つりまアす。其處で樂文社は大繁昌、屹度今年は大々的の大發展、世界一の大出版所は請合の水瓜、と、かう浮世菩薩は宣はく。さア解つたか汀果坊、自は、もう歸るぞよ。必ず夢と思はず、今自らの言ひ殘す文句を書け』(ギイー)

かやうに仰せられたかと思ふと、お柳さんぢやアないが姿は消えて、後に殘つた原稿數葉、ハハヽヽッ有難し忝けなしと押頂いて目が醒めた。扨は夢とも現とも、言ひしは眞實でありけるか。何とて連れなくやるべきぞと思つたが後の祭り、それにしても何を言ひ殘したのかと見ると、正しく大正十年の豫言、コレも日頃屁をひるお蔭と一層大噴發して、ハヽヽ、ブスッ!!さア鬼が出るか蛇が出るか、浮世菩薩のお筆先を見逃すまいぞよ。(ブスリッ!!ブウ)

(一月)

熊襲が手下を大勢連れて、若水美登里を迎へに來る。が行くと命が無い。何でも日本武尊に騙された腹癒せをすると内々相談してゐたから。今懲したつと日置默仙禪師が弟子入を勸めに來る。それまで待つてゐるがいゝ。

十二階から鬼火が出る飛行家後藤勇吉君が探撿する。併し夜間だから墜落する。尤も上へ落ちるさうだから命に別條なし。候補者には橫綱



大錦君が居るから大丈夫、大錦引退島成園と結婚、自分は飛行家となり、其名跡は竹の家主人にお鉢が廻る。主人緊褌一番千葉ケ崎と四つに組んで、大抵は吊り出して了ふ。但ドチラがドチラだか解らない。

矢島揖子刀自が、揖奴といふ藝名で柳橋から披露目をする。下谷の榮姐ちやんが、紺のカシミヤを穿いて、頭を切り下げ髪に結び、聖書片手に、床次内相を訪ひ、廢娼の辯舌を揮ふ。

(二月)

州崎の沖に大火がある。水が一面の火柱となつて帝都は大騒ぎ、併し熱くないから大丈夫。谷崎潤一郎と、正宗白鳥が巡査になると、田山花袋と島崎藤村が消防手になつて、アラアラツ、と州崎へかけつける。途中で、馬の糞に蹴躓づく。

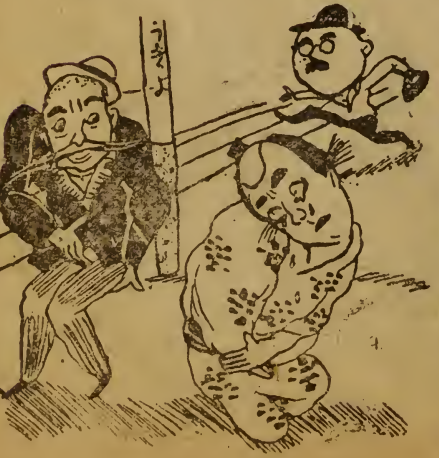
實業界の巨頭澁澤榮一氏が、四國遍路になつて『南無阿彌陀佛』を唱へ乍ら廻る中、澤庵和尚と道連れになつて、東京に舞ひ戻り養育院に收容せらる。公園の五九郎が電車の車掌になつて不平を起し、一念發揮して陸軍大將になる。田中陸相感心して公園の喜劇役者となるがコレは餘り面白くない。

赤阪の馬鹿トロンコ君帝劇の森律子と夫婦になつたが、律子の出臍を發見して嫌になり山王樣の森で首を縊る。羽左と浪子が、坊主と尼になり赤城山に入つて、仙人に化し、これが菩提を葬ふ。

(三月)

神田川へ鯨の一群が泛んで、見物殺倒死人續出する。貞山典山芦州の三名が、鯨に飛乘つて、長サ五十尺、周圍十五尺の奴を一匹づゝ指先で抓んで引上げる言行一致だと言つてマカロフ將軍が賞與を呉れる。

ニコライ堂が貸家に出る。一番先に警視廳の橋檢閲係長が申込をする。ニコライ堂の地下室が馬場になつて田尻市長を曲馬師に雇ひに來る市長赤い襯衣を著て汗馬に鞭を當て、ハイヨーすると、見物に來た奈良の大佛がポロ〳〵と涙



たこぼす。可愛相なものだと言ふと、大庭柯公が、尻の穴に蠟燭を立てゝ、屁で吹き消す。同じく、韋代理公使が四ツン這ひになつて、天狗の面を被り、共に大佛の機嫌をとる。築地待合とんぼの女將が姙娠する。何でも河童天王の申子とかいふが出來た上で親しく首實見をして見よう。河合澄子が、小生夢坊に殺される。そして生き代つて、山中靜彌君と枕つ引きをする。

（四月）

教育家下田歌子女史は今月の二十日、向島へ花見に行つて迷ひ兒になる。そこへ圖らず來かかつた六代目の爲めに拾はれて、子守になるぞよ。決して疑るまいぞ。

今月は八方塞がりで、東京には手毬大の霰が降るぞよ。すると大本教の淺野和三郎が現はれて、越中褌一トツで霰の曲取をやるぞよ。併し曲取の手が狂つて、梅坊主のクリ〳〵頭を摑むので、互ひに臍の穴から鎗を取り出し決闘に及ぶ。まアまア待つた、待たしやんせと、バール、ホワイト孃が飛出して來るぞよ。すると森宮城縣知事が、彌次郎兵衛と牛若丸を連れて檢視に來るぞよ。トヽ、ヒリツピン群島に一同引立てられ、大杉榮の取調を受け、鬼ケ島へ流罪になる折好く日本太郎に助けられるから恩を忘れてはならぬぞよ。

（五月）

尾崎行雄君が、蚯蚓の背に跨がり、心太を大上段に振冠つて警視廳に暴込みやす。すると山縣老公が豆絞りの手拭で頬冠りをして、都々逸

（六）

か何か唄ひながらやつて來て、『コレサさう野暮を言はずに新宿へでも行きやせう』と來る。それがよからうと序でに渡邊霞亭を誘ふて新宿摩天樓に登樓、岡田八千代、川端龍子、三遊亭圓子の三名を擧げて一泊。その中八千代の對方、老公だけはモテたが後の二人は何ういふ譯か持てなかつたゲナ。

明けの鴉が鳴く頃を、表に車を廻したクロポトキンとゴールキー、『旦那何處へ』『何さ、唐

へやつて來れ『はいようがす』で一足飛に、やつて來たが、その後の消息は聞かず。
讀賣の瓦版號外に據れば、宮本武藏、和氣の淸麿、紫式部、玉藻前、坂田八段、加納治五郎、杉山按摩の守、エホバ、クレオパトラ、青柳有美等が現はれて打殺したゲナ。

（六　月）

今月は、當世好色人種大會が日比谷公園で開催される。各代表者を列記すると、大伴の黒主對岡警視總監、弓削の道鏡對釜田太郎冠者、平の淸盛對林田雲梯居士、山椒太夫對福澤桃助、當麻の蹴速對高橋是清、法界坊對三井八郎次郎、武藏坊辨慶對佐々木安五郎、矢口の頓兵衞對永井荷風、摩耶山の天明太郎對出羽海谷右衞門、松永大膳對大倉喜七郎、キタリヤ喜多八對小室翠雲、鷺阪伴内對松崎天民、番場の忠太對阿部府知事、女流では、小野小町對神近市子、淀君對村田喜久子、油屋のお染對吉岡彌生、但馬屋の娘お夏對伊藤野枝（以下略）

此會は非常なる盛會にて、メリーピックホード來り、嘉悅孝子來り、中村歌扇來り、三升家千代壽來り、三宅花圃女史來り、三浦環來り紅紫とり〳〵、好事者をして垂涎タラ〳〵。猫八君と橫目家助平君は爲めに卒倒する。

（七　月）

法學博士吉野作造氏は木場で材木屋を開業する。其處で人夫募集のビラを出すと、最っ先に飛込んで來たのが尾上松之助と大内青巒の幽靈である。次は長岡外史將軍が櫛引弓人を連れて、申込んで來た『何うだ力はあるか』といふので、谷風梶之助、エルモ、リンカン、雷電爲右衞門とエディポロー等を試驗官として力量檢査を行つた結果、一同落第、伊藤みはる君の家へ故障を申込んだか撥れつけられ、それぢア馬の脚にでもならうと、大口屋曉雨の紹介で淺草萬世館へ行く途中、外史君下痢をして閉口すると、突然松之助の蟲がカブツて赤ン坊を

産む、友愛會から産婆鈴木文治が駈けつけて、浮市に下痢の後始末を頼み、松之助はベルサイユの宮殿に運んで、介抱する。雷が其子を貰ひに來ると、其後から直ぐにカチ／＼山の狸が來て、イヤ俺が貰ふと力む、遂々伊藤痴遊の仲裁で誰にも遣らず。

（八月）

此月は武者修業が非常に流行する。第一番に、福光浮子孃が、玉織姫と一緒に金のワランヂを穿き、武力の上下を着けて、書寫山へ上る亞いで近藤飴ン坊が三百七十貫の鐵の棒を杖にヒマラヤ山へ天狗退治に行く、途中に於て出逢つたは高サ一千呎の大入道飴ン坊、何糞と馬力をかけて天狗を宙にブラ下げる。其處へ、ロビンソンクルソーが、現はれて、忍術較べを始める。ロビンソンの勝となる。何をと屁つぴり與三が飛込んで、グイ／＼と銀座まで引つ張つて來て江浮春霞とパウリスタへ這入る。眞田の陰武士、嘘つき獅次郎が神田松鯉、近松秋江と共に乘込んで來て悟道軒圓玉を見張に置き將棋を差す。春霞覚に線香で叩き殺される。これを遠方から眺めた孫悟空と前田珍男子己れ憎くき圓玉奴と市村みの吉を伴に此場に急行して先づ秋江に仕合を申込む。勝負は來月――

（九月）

扨も先月の續き、勝負如何と見てあれば、珍男子松鯉の爲め蕎麥で縛られ、嘔吐を吐く。みの吉右の手を切り落され、三河萬歳となつて鶴ケ岡八幡宮に蒙塵する。

（八）

話は別れて浮子孃の一行、書寫山に赴く途中兎と龜に出合ひ向ふの山の麓まで、駈け競べを挑まれる。龜は一番に駈けつけると、小山の麓で居眠りをする者あり、誰ぞと見れば阪本紅蓮洞、緋の腰巻で寢てゐるのを偶かり金玉を踏む紅蓮洞怒つて、龜を丸呑みにする。其時百雷の一時に落つるが如く大音聲に呼はつたる者あり誰ぞと見れば、氣象臺の岡田博士、何を小癪と、立廻る最中、丹稻子現はれて、博士に打つてかゝる。處へ左甚五郎と、土屋松濤が來掛りだんまりとなる。だんまりの中に何時の間に紛れ込んだか河内山宗俊あり、ウイルソンの手を曳いて花道に出で六法を踏む、これからが面白い。

これから震天動地の活劇となるんだが、十月、十一月、十二月は、第三十七頁へ飛んで掲載。記事が古今東西を飛び廻るから掲載方も飛ぶ。

コレハコレハトバカリ
ユゲタツクソノヤマ

日本一の糞垂れ先生

信州産浅草勘平

一、

横綱に『日本一』あり、新聞に『日本一』あり、俳優にもあり、易者にあり、更に黍團子にあり『屁つぴり』にあり浪花節にあり『大蛇』にもあるとすれば、必ずや『糞ッ垂れ』にも『日本一』が無ければならぬ。信州の産で、さる會社の事務員を勤めてゐる男に、淺倉勘平といふ男がある。此男は、月に三回は必ず居所を變るので、何か譯があるのでは無からうかと、勤め先の赤阪溜池　某自動車××所に、同人の同輩を尋ねた結果意外の事實を發見する事が出來た。

二、發端

それで無くてさへ、貸家貸間拂底の今日、月に三回も居住を變へるやうぢア大變だらうと訊くと、同輩曰く大變も大變、大々變サ、既に引つ越すと共に市内を彷徨いて貸間貸家を捜して歩く。無論會社へは毎日出勤するが貸家捜しも毎日缺かした事は無い。雨が降うが槍が降らうが、駒下駄が草履のやうになるまで、根氣よく捜して歩くといふのである。

住宅難は、日一日と甚だしくなつて、其處にも此處にも、此方の脅威を犇々と感じてゐる。此間に家賃の釣上げをやる。惡紹介業が殖える。人は足を棒にして貸家を捜す。

加之も、如何に貸家捜しが熱心でも、年が年中、毎日のやうに實地

に貸家を搜す者は、殆んど此男を措いて他にはあるまいと思ふ。

一體『道樂』か、人には隨分色んな道樂があつて、轉居々々で、先から先へ住み心地のいゝ處を選んで居所を變へる者もあるが、これは又餘りにも極端である。寧そ、その熱心を利用すれば、市の社會局の貸家貸間紹介の雇員にもなれるし、又普通の紹介屋に雇はれる事も出來る。假令又、會社の事務員が本業とすれば貸家搜しを副業にやつてもいゝ。是非さうしては何うであらう。君から一トツ勸めて見ては何うです。と持かけた。處が、記者が同輩君を動かすよりも、既に同輩君が、淺倉君に此旨を申出でて、大失敗をしてゐるのである。淺倉君は、徹頭徹尾眞面目であり眞劍である。俺の貸間貸家搜しは、俺自身の必要に迫られてゐるので、人の世話までは燒けないと恐ろしく啖呵を切つたさうだ。

それにしても、其迫られた必要にも大抵、程度がある。現に棲む家があり、現在棲んでゐるのだから、さう〱居所を變へなくてもいゝだらうと言ふと、淺倉君はたつた一ト言『大きなお世話』だと言つたさうだ。

其處で、淺倉の同輩の思ふらく、彼には何か祕密があるのだらうと思つて、或日、彼の居宅を襲ふた序に其處の神さんを捉へて『二階の男は何うかしてゐるんですか、一生懸命に貸間を搜してゐますよ』と訊くと神さんの曰くサ。（此處で祕密が露見する）

三、屋根へビチ糞

『淺倉さんですか、アノ人は一週間ばかり前に越して來たので、最初は大變に優しい人だと思つてゐたのです。するとネエ貴郎、』

お神は低聲になつて次のやうな奇談を吐いた。

最初の夜は別に氣もつかなかつたが、翌朝淺倉の勤めに出た後で二階に上つて見ると、何だか嫌な臭いがする。それは小便のやうな糞のやうな臭いである。其處で、全體何處に糞があるのだらうと搜してゐると、屋根の瓦に、堆高く、ビチ糞を垂れかけてある。流石事に馴れた神さんも、これには駭いて、淺倉君が歸ると同時に、嚴談に及んだ。處が淺倉君、大いに恥ち入るかと思ひの外、かうした嚴談には馴れてゐると見えて、一向平氣で『いや濟みません』と濟し込んでゐた。

處がその翌朝である。今日こそと思つて二階を檢分すると、臭い仍且臭い。加之も寢間が敷つ放しである。神さんも閉口して例の通り、屋根を調べると、別段屋根へは垂れてゐな

い、昨日の分は綺麗に掃除されてゐる。其處で念の爲め、夜具を捲つて見ると、驚くべし、寢卷に包んだ糞が、温か味もさめず、夜具の奥深く所在してゐるのである。神さんも愈々愛想を盡かした。そして淺倉君の歸りを待つて、此不潔を責め、糞が出たきア下に便所がある夜分でも隨意に下りて來てひつて貰ひたいと疊みかけた。

（搔い卷を上げて吃驚糞の山）

四、二階から小便

これ丈け、言はれりア今夜こそ便所に行くであらうと思つて、氣をつけてゐると、一向さういふ氣配もない。今に下りて來るか〳〵と思つて居たが依然として寂閑としてゐる。その中、お神も、お神の亭主も、グッスリ寢込んで了つた。

不圖目が醒めて見ると、お主婦の鼻柱へポツンと落ちたものがある。ハッと思ふと、今度は口の中へポツンと落ちた。果て何であらうイヤに生温かい嫌な臭ひのする滴だと思つてツラ〳〵と天井を見上げた。スルと天井を傳ふ雨垂れのやうなのが、ポツン、ポタ〳〵と落ちて、傍に鼾をかいて寢てゐる亭主の頰ぺたへもポタ〳〵落ちてゐる。『鼠の小便か知

ら』と、神さん二階へ上つて來て、見ると、淺倉先生、これ又グウ〳〵、と鼾をかいて御座る。扨は可笑いと矢庭に叩き起して見ると、遲かりし淺倉先生の夜具の中には糞と小便がウヅ〳〵と垂れられてゐる。かうなると、夜中とは言へ神さんも承知しない、亭主諸共起きて來て散々淺倉君を小ヅキ廻し、さアタッタ今出て行けと騷いだが、要するに無理な事なので、兎に角明日まで待つて貰ひたいと、平謝罪に謝まつた。

翌朝、敷布に殘つた糞は敷布の儘便所に拋り込まれて、夜具は小便の儘、天日に干されてゐた。

以上は神さんの談、扨こそ、貸家貸間捜しの魂膽が暴露た譯、寧そ、貸家が目つかれば、或程度まで、立退きの壽命も保てるのだが、因果と腰辨の淺倉君にお誂へ向きの家は見當らない。

『その後は何うです』と訊くと、『二回ばかり新聞紙に包んで朝捨てたやうですが、敷布を乾す事は毎日です』との事。

斯て、上京後恰四ヶ年は毎日の如く貸家を捜してゐると、同輩君は語つた。嘘のやうな事實談である。

五、床の間へ糞の置物

行く先々で糞を垂れる淺倉君は、其後、會社の當直室に收容されたが仍且、糞の一件でお拂ひ箱となつたそして今猶貸間を捜してゐる。或時の如きは、東京驛で夜明しをして、以來、非常にいゝ寢場所と思つたのか、兩國、上野、飯田橋、等各驛々に泊つたが糞を垂れ流して、注意人物となり、再三再四、警察の厄介となつた。警察でも留置室に糞を垂れられるので閉口してゐる。

此淺倉君、根が馬鹿で無い男だが酒の爲めに、かうした醜態が已まない。

昨年末新富町の某待合で泊つたが翌朝大變な忘れ物をして來たと、同輩に話すのでソレぢア取りに行けばいゝぢアないかといふと、イヤ取りに行けないと言ふ。ぢア持つて來させればいゝぢア無いかといふと、それも困るといふ。ぢア何うすればいいんだと言ふと仕方がない打棄つて置かうといふ。一體ものは何だいと訊いても言はない。後でソレとなく待合へ訊き合せると、女將はプンプンして、惡戯にも事に依ります。人の家の床の間へ、置ものもあらうにウンコを紙に包んで、その上風呂敷にくるんで置いてあつた。皆が怒つてゐる、といふのであつた。

六、留置場へ糞

淺倉は、王子、板橋兩警察の注意

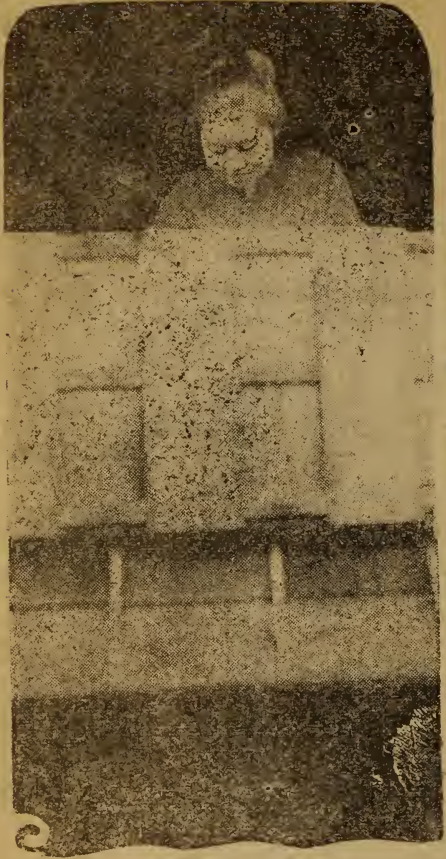
人物である。何處でもいゝ市中で、酒に醉ふと、キヨロリ／＼と往來を歩き乍ら荷馬車を捜す。尤もこれは大抵夜で、晝は、勤めと貸間捜しで酒を飲むひまがない。

　で、荷車が目につくと必ず後から忍び寄つて、其上に乗る。馬子が氣が注かねばいゝが往來の者が笑ふので屹度氣が注いて怒る。そして下りて呉れと言ふ。併し口で言つた位ゐでは下りない。仕方がないから摑んで下ろす。それでも、荷馬車が動きかけると忽ち後から行つて、乗る。馬子は益々怒つて、溝に叩き込む。それでも動けば後ろから行つて乗る馬子も愛想が盡きてそのまゝ曳いて行く。そして、王子とか板橋などの邊りまで來て、愈々馬子それ自身の家が近くなると仕方がないから交番で下す。その時には、糞をうんと荷車の上に垂れてゐる。巡査はこれを交番の中に入れると、直ちに交番の中へ小便を垂れる。最後に本署に送ると、本署内の留置場へ糞を垂れる。警察でも又來たか位ゐに思つて豫じめ、糞の豫防をする位ゐである。

　斯の如くして、警察で泊る日は、貸間をしてゐる家が助かり、貸間をした家の助かる日は何處かの荷馬車併に警察が困つてゐる。而して警察や荷馬車の助かつた日は、貸間をした家の人が糞の臭ひを嗅いで居る。

　會社でも、本人には困つて居るがよく働くし、正直だし、殊に糞垂れは病だから同情して使つて居る。

　生物は皆糞を垂れるが、糞の垂れ合なら、牛にも豚にも又馬にも負けないであらう。今でもせつせと貸家を捜して居る。（登久郎）



（二階から見れば矢張り糞の山）

魔女に呪はれた青年の末路

銃聲三發

閨怨秘話　戀より罪へ

はしがき

本篇は明治三十九年秋頃から四十一年の秋頃迄、凡そ二ケ年の間に起つた、凄艷悲壯な事實物語である。而して本文中に現はれる人物は悉く實在の人々である

(一)事實は小説よりも奇なり

頃は明治三十九年秋の中旬であつた。東京の郊外、春の櫻、秋の月で思ひ出さるゝ隅田の川にそふた向島の中川の家を訪ねて來たものがあつた、蒼ざめた顏色に、どことなく男らしいきゝりッとした、苦みばしつた小作りな學生風の二十二三或は四にもならうと思はれる青年が、取次の壯士風の美髯を貯へた男に一通の手紙を渡した。表書には、「中川三郎君」として裏を返しみれば、中川の親友馬詰靜人からであつた。「久潤待つて」と男は奥に入つて行つた。

この家の主人中川三郎の前身は、各地の警察署に奉職して警察署長をしてゐたが、日露間の講和の成立後間もなく、職を辭して、向島に家屋を建築して、壯士の親分のやうなことをしてゐたのであつた。

「やあ馬詰からか、何んだなあ」彼は丸々と肥つた福神腹をゆするやうにして、手紙を讀みはじめた。「手紙を持つて來た男は」「はい玄關にゐます」「これへつれて來い」

男は待たしておいた男を中川の部屋に案內して來た。

「やあ　君が板倉君つて言ふかね、今馬詰からの手紙で凡そ內容は分つたが、」

「はい私が板倉で御座います。」板倉はおづ〱と座について答へた。

庭先には、赤蜻蛉がなよ〱と翼を光らせて、枯れかけた菊の邊りをめぐつてゐた。白帆が堤をこして走つてゆく、

板倉は次の如く來意を中川の前に語つた。

(二)性は善なり

板倉の生れ故郷は越後の國であつた。彼は上京する以前に父に先だゝれて、母と共に細々とその日〱を小學教師として暮してゐた。しかし

―(板倉が林家の女將を看護する光景)―

學問好きな彼れは、何處を見渡しても山又山、他界の知識を得るには二日に一度、三日に一回配達されて來る新聞をたよりにする程のものであつた。男と生れて、かうした地に朽木のやうに埋れて終ふ將來を思ふと自づから涙が流れた。同じ男と生れた以上都會の檜舞臺に立つて、一芝居やつてみたい。さうした青雲の志が絶えず彼の胸を顫してゐた。遠天を流れる雲、渡鳥の影を見、春の陽の惠のふかく嚴く凍つた雪消のせゝらぎを聞いても、思ふは都のことであつた。

かうして幾度か春が來、秋がめぐつて、年を經た、明治三十八年の春であつた。敎子の誰れ彼に、又杖をたよる程迄に衰へた母親に送られて、川一すぢ青う流るゝ故郷の空をあとに、心は遠く都の空に、はた又なつかしき故郷に成功を待つ母の上に又知人の誰彼の上に、走せながら懷しい我家に別れを告げた。踏むは雪消のやはらかき路であつた。彼の未來を祝福するごとく草も青く萠えかけてゐた。かくて彼は二十三年も住みなれた、產湯の地をあとに都をさして上つたのである。

都會に着た彼れは親によつて學資を得るのでは

なし、漸く都會の土を踏むだまでゞある、早速彼れは食につかなければならなかつた。第一刻をも空しく過すことを許さない、社會は彼を追ふやうに口入屋にひき入れた。椋鳥と見た口入屋は彼をして中澁谷の林家といふ藝妓屋の飯焚男にした。

四邊の世界が急に明るく華やかなものに變つた板倉は『何時かは學校にも行ける。』さうした希望を抱へて明け暮してゐた。

花が散つて、青葉の頃が深くなつていつた。然かし、彼の仕事こそ增せ學校に通ひ得る日はめぐつては來なかつた。女將や藝妓や半玉などゝ女ばかりの家に、彼は小ひさくなつてゐた。

秋が來た、空は高く蒼くなつていつた。

その頃からどつと林家の主婦は床についてしまつた、女達は家を外にする商賣柄あまり病人を看護が出來なかつたので、醫者から何にまでみな板倉の仕事になつて一增忙しくなつていつた。しかし女將の病は程なく全快して床を離れた。

この頃から主婦の板倉に對する取扱が家の者にも目だつてやさしく變つていつた。

かうしてゐるうちに漸次に板倉の心から學問などゝいふことは消え去つて、それはかりではなく、何時かは林家の女將の情けに、ふみ迷ふ戀のやみ路に、露知らず身體ばかりか心までしつぽり濡れて夢うつゝ、夢にさへ見た故鄕の母の姿に代るものは、艶麗美玉の如き女將であつた。が何時迄も同じ家にゐては世間の手前もある事故と女將の世話で或る呉服屋の番頭に住み込むことになつたのである。

林家の女將のあと押しで相當の商賣をしてゐて、店の受けもよかつたが、人目しのんで林家の女將とあひびくその金にこまつた揚句精根までくさらぬ心もいつしらず悪いと知りつゝ戀故に、一反二反の貸といひ店をごまかし、賣拂ひ時には入る七つ屋の店も時には赤ら顏、さりとて戀に炎ゆる身の罪の深間に落ちてゆく末も思はず、浮々と間がなすきがな外にでゝやつた仕事の罪造り、何時かは知れて、警察の繩のうき目も誰れ故に、戀にまよつた板倉の、苦しいつとめの半年も過ぎて世に出て、こつそりと林家に行けば、あれ程に二世をちぎつておきながら、鼻をあしらふ木の棒のごとくすてゝ情なし

「中川さん、どうぞ何んとか林家の方へ談合して私の身の立つやうにして下さいまし。」

「うんさうか、それぢやこれから澁谷へ行かうか、君は住居もなから

――（中川さん何卒林家へ談合して私の身の立つやうにして下さい）――

から、家にゐたが可い。」それからすぐ中川は手下の一人を連れて澁谷へ向つた。

中川等の通されたのは林家の奥の間である。細骨障子の立てまはされて、南に向つた部屋は開け放されて、すぐ廊下をへだてゝ庭があつた、黒板塀の見えぬ程植込があつて、塀と植込との間が一尺程の空地と見える。池には金魚などがゐて小ひさな橋がかけてあつたりして、しき石づたいに柴垣から裏へめぐられるやうになつてゐた、床の間には、誰れのものか分明ではないが、どう踏むでも五千圓以上に見える軸物がかけてあつた。

「どうも御待ちどう樣、私がこの家の女將で御座います。」と何處となしに高尚な山の手式な奥樣風で人を引きつけないではおかないやうな氣品を保つてゐた。「あの美江ちやん、何にかをね」抱への方へ聲をかけて中川の方へ「遠いところを御苦勞樣でした。」と言つて話は次に進むでゐた「實は今日板倉が來て賴むだものぢやで。」中川は尊大に切りだしていつた。

「まあ板倉がお宅へ」と云つて彼女は澁るところなく身の上を語つた。（次號で終る）

若き私生子の死

民法謂ふ私生子及び庶子は法の上からも社會上の取扱からも嫡出子と何等異るところはない。たゞ相續權の順位が嫡出子の次位にあるだけだ。然るに親の罪惡の責を子供に負せて、親自身も一般世間も私生子といふ文字に對して一種特別の感を抱き、又私生子それも同樣に自然偏狹に陷るとは生活上、思想上、何んといふ痛ましい事であらう。目下民法改正委員會では周章して私生子庶子の名稱を廢止すべしと絶叫してゐるが、それとても單に父の子、母の子の區別に改稱するに過ぎない。——斯くして私生子の悲劇は依然として續演されて行く。

一　鬼の眼に涙

これは大正九年十月十五日の新聞記事であつた。相變らず民衆脅かしの二段拔標題で、「鬱蒼たる栗林中の

本篇の女主人公北濱こう子さんが命を失つた栗林です、向つて右は其林の入口、左は中です。

若き女の絞殺死體」なる不快な報導が載つてゐた。然し、私も、否凡ての讀者も、きつと『はゝあ、またか』と普遍的の眉をひそめた位ゐが落であつた事は、寧ろ事實だ、ほどに「船底の女死體」も「アカジが原の女死骸」も、最初の新聞報導と、其後の新聞記事とに、かなりの神經過敏さがあつて、肝心の亡者より、生きてゐる讀者の方がより以上に迷ふ滑稽に懲りてゐるからであつた。ところが其の夜、私は或事件で警視廳のY刑事に會ふと、日頃は赤鬼のやうなY刑事が妙に悄氣てゐるので『おいYさん、今夜は馬鹿に穩順でゐらつしやるね、雷さんが太鼓を下界へ落とした形だね』と揶揄ふと、Y刑事急に眞顏になつて『おい、俺は今夜こそは鬼の眼にも涙だ』と沈んで云ふので『へえ、そいつあ初耳ぢやない、初見かね、はゝゝ、どれ、その涙を拜見しようぢやないか』と私は態と近づくと、『冗、冗談云つちや不可ねえ、お芝居の辨慶の涙たあ譯が違ふんだ、何にしろ、俺らこの職業を彼是十七年勤てゐるが、昨夜は泣かされたよ、實際私生子てえものは可哀想なもんさ』Y刑事は鼻を啜つて云つた。『そ、それは一體何事だ、え、何んだね、如何したのだ』私は思はず緊張すると、『ふん、俄に本氣になるぢ

やねえか、はゝゝ、また幾らかの原稿料にするつもりだらう、おい原稿料で遊ぶのは好いが、素人女を云々するなよ、詰り俺が悲しいと思ふのはそれだ、さうして出來た子供だ、その私生子だ、おい今日の新聞の栗林中の絞殺死體な、あれは私生子だ、可哀想な娘さんだ、何んてえ慘酷な親だらう、俺は全く泣かされたよ鬼の眼にも涙のネタはそれさ』『えつ、そんなら他殺ぢやないんだね』『うむ、さうだとも、あれは立派な、いや確實に自殺さ』『へえ、すると如何した譯だ、ね、賴む、僕に聞かして呉れ給へ、僕も其鬼の涙の仲間に入らうぢやないか』『ふゝう、君のは蚊の涙だらう、まあ好いや、とにかく話さう、これも其娘さんの功德になるかも知れないからな、はゝゝ』とY刑事は寂しく笑つて腰をおろした。

以下、Y刑事の談話――

二　若き女の死體

十月十四日午後二時頃の事であつた、陸軍衞生材料廠裏手なる東京府下上大崎町長者ヶ原と芝白金臺町二丁目（元白金火藥庫跡）との境界の鬱蒼たる栗林中の溝の中に、年齡十七八歲位の女の死體が、大部分は腐敗し、臭氣を放つて横つてゐるのを、栗拾ひに行つた附近の者が發見して、腰を拔かさんばかりに驚き青くなつて最寄の派出所へ屆出でたので、直に其派出所から所轄の高輪署へ急報して、菅野署長村松警部以下數名出張し檢視の結果、死後二十日間位を經過し居り木綿竪縞の單衣にメリンス友仙の丸帶を締め、頸に白木綿の細紐が絡り、傍には茶色の洋傘が置いてあつて一見何處かの小間使ひ風であつた。そして猶警視廳よりは小泉捜査係長中村警部、東京地方裁判所よりは金澤檢事出張し假豫審を開いて、更に嚴密に死體の模樣及び周圍を探査の上、死體は他殺ではなく自殺の推定を下された、といふのは外でもなく、死體の下に『猫イラズ』の嚥みかけが落ちてゐたのであつた。と同時に死體は早速大學病院に送つて解剖に附する運びを取り、一方高輪署員並に警視廳刑事達は身許其他に付きあわたゞしく大活動を開始し始めた。

三　眼光が光る男泣き

翌日の晝頃（新聞掲載當日）商人體の分別男が警視

處を訪ねて、其女の死體を一應見せて呉れとて、さも心當りがあるやうなので、立會の警官や刑事がさてはと胸を躍らして、先づ念の爲めに死體の人相、服裝と其商人體の照會の人相、服裝とを照合するに殆んど符合し、且つ參考のために切取つて置いた着衣の一部を示せるに、其男はあつと仰天し、玆に死體を見るまでもなく、女の死體は九月二十七日午後十時頃家出をして行方搜索中の、芝區三島町四番地伊勢屋質店金井庄兵衛方雇人で、石川縣生れ北濱てう(十七)と判明し、其處で其男は取るものも取り敢えず、女の親戚なる芝區濱松町の電氣器具商齋田又太郎に通知し、急ぎ同人來署の上同行、大學へ女の死體を見にと出かけ、玆に愈愈『北濱てう』の死體なる事は確實に承認されたが、其時に於ける、親戚と稱する齋田又太郎の吃驚悲嘆は恰然實父の如く取亂したものであつたので、はしなくも同行のY刑事の眼は鋭く光つた。

それからのY刑事の言語、眼光は極めて神祕的に働いて、遂に齋田又太郎は一もなく女の死體――北濱てうの實父なることを告白し、郷里石川縣にある實父吉太郎は、實は養父と判つた、斯う實父の名乘りをあげて了ふと、齋田又太郎は忽ち聲を擧げて泣き出した。さうして涙ながらに斯う語つた。

四　死の前夜

哀れなる北濱てうは、齋田又太郎が主人の威光で女中の肉體を虐げた、淺ましい情慾の犧牲兒であつたが彼は所謂家庭並に世間へ對する卑怯から、彼女の生後間もないうちに現在の父吉太郎の許に遣して、吉太郎の實子として披露し、關係者は何喰はぬ顔で濟ましてはゐたが、其實てうが上京して現在の奉公先にゐる間間に親戚と思つて齋田方を訪づれる時には、齋田又太郎の腹底は引きちぎられるやうに苦しく、また淚の出るほどに可愛いものであつた。要するに齋田又太郎は今更に可憐しい「てう」を見る每に、人間としての或る罪惡から消す事の出來ない苛責に脅かされるのであつたのだ。だから誠親子でありながら、他人眼にも「てう」の眼にも、眞實の親である如く齋田又太郎から何かにつけて柔しい言葉、嬉しい心付をされて暮してゐたが、齋田又太郎は取る歳になほも「てう」の行末を哀れと思つてか、それとも「てう」をそれとなく精神生活から復活させるつもりでか、自分の甥なる――

聯隊附歩兵中尉春田吉雄に嫁がせる事を計つて「こう」と春田中尉と婚約の仲の樂い雰圍氣に浸す事にした。春田中尉は男らしい青年將校であつた。「こう」は愛くるしい娘さんであつた、男女は晴れの日を夢に見ながら待つてゐたが、呪はれた齋田又太郎と、廢れ者の「こう」の幸福は徹底されよう筈がなく、悲しくも「こう」は叔父齋田又太郎の不義の子、私生子だといふ事が春田中尉の耳に入る事になつたからたまらない、何しろ軍人肌の一酷とて斯うなると國家の干城主義から、軍人のやうな單純な男には愛なんぞ自分の生活には何時でも砲煙と同じく取扱はれてゐる故、斯うしたお目出度い縁談は譯もなく破談になり、春田中尉は大軍を叱咤する怒號で叔父を詰問する權幕であつた。――それから數日經つて「こう」は家出をした。十七日間を過ぎて新聞記事へ死體となつて現はれた。

玆まで語つて、齋田又太郎はまたも泣き崩れた。

『全く可哀想な事をさせました、これといふのも私が惡いからです、私の罪です。ああ、あの、あの晩娘が死ぬ前の晩です、私へ他事ながら暇乞ひに來た晩です、私は娘に娘の大好きな『しる粉』を喰べさしてやりました、そ、それも蟲が知らしたのでせう。私は、私は我子とこそ打明けませんが、娘は隨分可愛がつてやりました、ですから私は思殘りもありませんし、また娘もきつと恨んではゐないと思ひますが、そ、それにしても可哀想でなりません、私が惡いのです、娘は、娘は浮かんで呉れるでせうか』

齋田又太郎はおろ〳〵いふのであつた。

五　快樂の罪の子

Y刑事は眼を瞬いて『ねえ君、實際齋田又太郎は悲しいだらうよ、僕は貰ひ泣きをしずにはゐられなかつた、が、それより娘の小さい胸の内を察して見たまへ實に言葉や文章では云へない悲しみだ、君、僕は繰返へして云ふかも知れないが、是まで扱つて來た他殺又は自殺の女の中で、是程氣の毒にも哀れな女はなかつたよ、ね、解つたらう、鬼の眼にも涙は之だ、君、私生子を作へる親々親だが私生子程世の中に悲慘な者はないよ。私生子、その呼名を早く如何かしてやらなければ私生子は一生浮む瀨はないからねえ、弱き者よ汝の名は女でなくて、私生子だよ、親の快樂の罪惡が、不幸な報酬に生きるのだからねえとY刑事は聲を呑んだ。

私の感情は如何したのか冷たく顫て來た。（東大路）

家出して口入屋に欺かれた私の告白

—(世の若き青年男女の為に)—

證明書の事

今年の夏の事であります。私は友人二人と私と三人連れで、皆自分々々の家を抜け出ましたのです。私等は家を抜け出て船員になる積で新世界の或る口入屋に行きました。處が口入屋の云ふのには外國航路に乘り組まれるなれば一人前十二圓づゝいる、又内國航路に乘組なれば五圓五十錢と云ふ事でありました。そこで私は、口入屋に向つて『何故外國航路に乘ると、そのやうに高いのですか』と、問うと、

『外國航路は保證金が十圓入りまして、又私方の手數料が二圓入りますからです』と云ふので、私等三人は口を揃へて、

『夫れではどうか外國航路にお頼致します』

と、口入屋へ頼んだのです。すると口入屋は各々の原籍地、現在住所等を問ふて、其れを帳面に附けて了まつて、十二圓の金を先に受取り軈て其所の店員が附き添うて市電に乘り、船津橋で下り、三島海員部に這入つたのです。

内へ這入ると三島の店員が出て來て、三人を前に列べて

『貴下等がどう云ふ希望で海員になられますか』と問きました。

『我々は海員となつて成功し、一生涯船員で暮す積りです』

『あ、さういふ希望を持つて居られたらよろしいが、併し三人共、身元保證と印鑑證明、戸籍謄

本、及び親の承諾證が取れますか』と、云はれて私等三人は思はず顔を見合はしたのです。それと云ふのも三人共、親の家を拔け出たからであります。

初め口入屋へ行つた時は棚からぼた餅が出る、木に金がなると云ふやうに、中々上手な口實を述べて、魔の手に乘せるのである、おぼこい私等は其の口實に、まんまと乘り、口入屋の店員の電車賃迄出して、連れて來て貰つたのであります、三島海員部へ來て見ると口入屋の云つた事と大變に違つて居るのです。

夫れは、最初口入屋で今の四證明が取れますかと問したので、私等三人は取れませんと答へたのです。其時口入屋は身元保證印鑑證明戶籍謄本は、會社の方で取つてくれますから、又親の承諾證は無くとも船に乘れます故、船に乘つてたら親も承知されるでしようと。中々うまい事を云つたのであります。

金を返せ

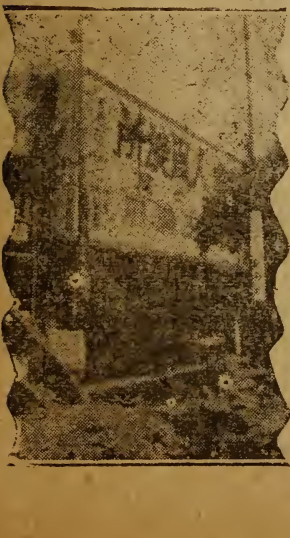
それで私等は行つて見たのですが來て見ると中々親の承諾證無き者は乘れないのです、乘れても假雇で、船員手帳と云ふものが貰はれないのです。

其の海員手帳の無い者は何時解雇されるか判ら無いと云ふのです。そして時によると會社が承知せぬかも判らんと云ふ事です。

こゝに於て三人の希望は破られ第一の目論見も空しく棄てねばならなかつたのでした。其の時は私しは口入屋に欺かれたかと殘念でなりませんでした。又其の店員を毆つて遣らうかと迄憎らしかつたが、迫きくる胸を撫下して堪忍して居ましたが、外へ出て店員に言葉を掛けた時は、必ず角が立つて荒々しかつたと思ひます。其の時、私はどのやうな事を云ふたかさえ腹立の餘り記憶して居ませんが何でも該店員に向つて（先刻出した十二圓の金を拂つてくれ）と云つた事です。處が口入屋の店員の云ふには

『其の金は私は持つて居ませんからどうぞ店迄來て下さい、さうすれば屹度拂ひます』

と云ふのです。家を拔け出た三人には其のやうな餘裕がありませんから『貴下の店迄行けばよろしいが、私



（人の周旋する口入屋）

等少し急ぎますから貴店の手數料として一人前一圓づゝ出します故殘り十一圓づゝ返して下さい、』

と私等が云ふと店員は閉口したらしく暫く思考して居たが軈て口を開き

『今私は其れだけの金を持つて居ませんから店へ來て下さい、さうすれば全部支拂ひ致します』

『そんな事を云はないでこゝで出して下さい』と、三人は泣附くやうに彼に頼んだのでありました。處が彼は用意に出さないので私は云ひ過ぎと思ひましたが、

『貴下金が無いと云つたつて、私等の保證金を持つて居られましよう。そして私は無理な事は云はないから十一圓づゝ返して下さい。それとも此の話しがうまく行つて、三人が海員となる事が出來ましたなら、二圓でも三圓でも差上げますが、私等の希望は破られ、又貴下に欺むかれたのですからね』

『と否や欺むいたのではありません私は承諾無しで乘れると思つて居たのです。こゝ一月程迄は承諾書無して行けたのですから、其のやうに思つて居たのです』

『それでは詮方無いから貴下の手數料だけ上げますから殘り十圓づゝ返して下さい』と彼の店員に頼んだのです。店員は、此時薄笑ひして十圓づゝ返してくれました。只だ夫だけより記憶して居りません。

今度は神戸へ

三人は其の金を持つて阪神野田驛より電車に乘り神戸に來たのです。三の宮で電車を下りて一番に目に入つたのは口入屋の看板であります。大阪のやうな失敗をせぬやうに注意して行けば大丈夫と思つて三人は其の看板によつて口入屋へ行きました。

其の口入屋は停車場を少し南へ行き一寸西へ這入つた二軒目の家でありました。口入屋へ這入ると直ぐに

『私等三人何所かよい奉公口はありませんか』

と、尋ねました。口入屋は、大阪と同じやうに今迄何をして居たかを第一に問はれましたので三人は己れの今迄して居た事を述べたのです。すると口入屋は

『神戸に來られたら保證人無しで奉公は一寸むづかしいですから、川崎造船所へ行かれないですか』

『造船所で何をするのですか』

『何と云ふ事は無いのですが、まア人夫ですな——』

『人夫でどのやうな働きをするのですか』

『それは判りません、兎に角樂で金儲が多いから澤山行きます』

大阪でだまされた私等は、こんど

は欺むかれまいと端から端迄尋ねたのでありますが、口入屋は其れを云ふと金儲が無いので、一寸祕密を云ひません。其時私は、口入屋を疑つて居りましたが口入屋は帳を取出して五六日前からの處を三人に見せて

『どうです。此通り毎四五人は連れて行きます』

と、彼は一々其れを三人に見せてくれますので私等は又々欺かるれのでは無いかと半信半疑でありましたが今は寢る處もなく宿屋へ宿るに金は無く詮方無いので

『それではどうぞ連れて行つて下さい』

と彼に賴んで、口入屋の手數料七十錢づゝ支拂つて、店員附き添への上電車に乘り、相生橋を過ぎて電車は止まりました。そこで四人は下車し店員が氷を食べたいと云ふので、それをおごつて遣り、其處を出て二町餘り行つて横へ曲つて又十間餘行つた處で清一組と外燈に書いた大きな家へ這入つたのです。家へ入つて見ると洋服を着た三十五六の青年が二人、其の家の主人と思はしき人より色々の話を聞いて居る、其の間は三人靜かに待ち受けて居たのです。前の二人の男を見ると、どうも自分等と同じ運命の人らしかつたのです稍暫くして二人の話が濟んで次に私等三人の番となりました。

又も保證金を

『三人共此方へ御出なさい』

『はい御免下さい』

と奥の間へ通りました。

『熱いから肌脫をしなさい』

と丁寧に云つてくれるので、私等はどのやうに氣樂な家かと思ひました口入屋の店員は主人らしき人に挨拶をした後私等の方を向いて、

『私はもう歸りますから』

と、云つて彼は歸つて了ひました。其の後で、筋骨逞しい主人らしき人は、三人を前に揃へて、

『私は此家の主人です。私は此の神戸市内の第二消防組の小頭を勤めて居りまして、こゝに上げてあるのは縣知事市長殿等の賞狀であります』

と、彼は四方八方に掛けたる額を指差しました。

私等三人は只『はい〳〵』と答へてじつと其の額を見廻しました。主人は言葉を續けて

『貴下等三人共兩親がありますか』

『はい三人共兩方揃つて居ります』

『皆其の親の家へ紹介してもよろしいですか』

と、問れて三人は顏見合して居たが私は

『イヽエ紹介されぬ方がよろしゆう御座います』

『それでは紹介をせずとおかう、併し貴下等に明日からして貰う仕事と云ふのはトロに或鐵板を積み、それを彼方此方と、引き歩くのであります、それも澤山の人數でするのだから力を入れるやうに見せて力を入れ無くともよいのです、さうして聲だけ大きく出して「ヨイコジア」と云ひながらぶら〱と引いて居たらよいのです。

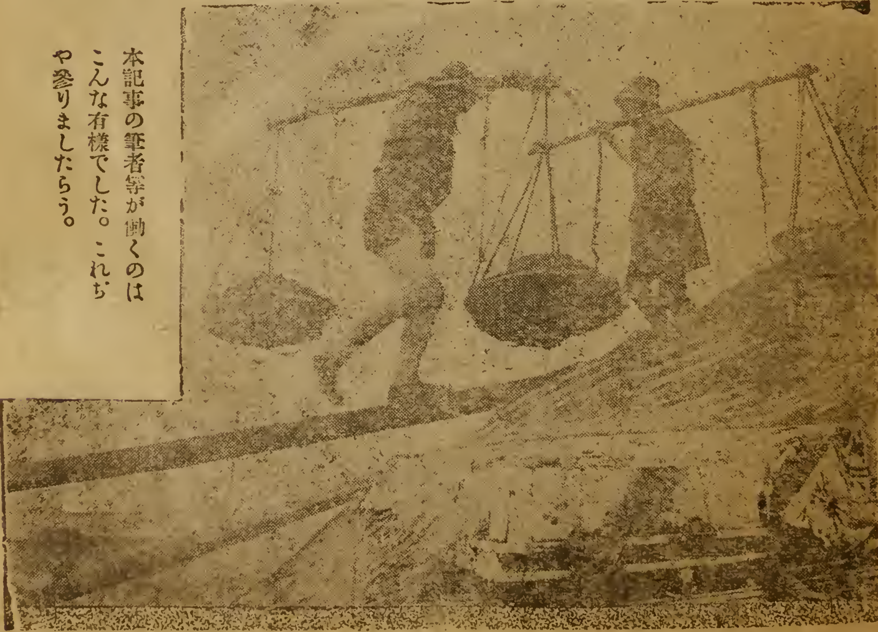
『そして日給は初一圓五十錢二圓でありますが、四五日の內には本雇と云ふのになります、本雇になれば夜業が出來て、其の夜をすると日中の一時間分を三十分で儲けられます又夜通する事もあります、夜通すれば二日分の日給と其の日の日給と三日分貰へるのです』

其の時三人は喜悦の色を頰に漂はして

『どうぞよろしく御願致します』

と云つたのです。主は猶も語り續けて

『それから、私の家の規則として一圓五十錢づゝ戴きます、これは貴下等が一箇月働いて居られたら御返致します。此の一圓五十錢戴くと云ふのも、近頃うまい事を云つて、夕食と宿り料をロハで翌朝何處へか逃げて了まう者が多いので、保證金として受け取つて置きます。さうせなくては私の方は口入屋の手數料と夕食宿り賃など損をしなくてはなりませんからね――』



本記事の筆者等が働くのはこんな有樣でした。これぢや參りましたらう。

造船所へ

斯う云はれたので三人は一圓五十錢づゝ出しました。さうして其の日夕食をたべたのであります。食べ物の事を云ふと穢いやうに思はれるかも知れませんが、これも皆讀者諸君の後學の爲と思つて書いて置きます米は支那米で、菜はサバの味噌のやうに半分腐りかけたやうな物を附けてありました。

御飯はハクライ米だけでバラ／＼で臭くて、迚も私等には食べられません、そのやうな御飯を一杯だけ食べて湊川新開地の方へ遊びに行きました。その時は腐りかけた氣も大分元氣附いて來ました。

新開地を此方彼方と見物して十一時頃歸りましたのです、家に歸つて寢ようと思つて二階へ上ると、臭氣鼻をつくが如く人の臭でムットするやうであります。

三人はそれもこらへて床に附きましたが、蒸し熱くて、とても眠れません床に附いて一時間餘りすると、厭な／＼南京蟲がゾロ／＼と出て來ました、今まで只の一度も南京蟲に嚙まれた事のない私等は、南京蟲を見ると、ゾッとして身の毛も彌立つ思ひを致しました。

其の夜は一睡もせずに夜を明かしました。朝六時頃になると、二十二三の子分らしき者が

『おうい皆起きよう――』

と、大聲を張上げたかと思ふと、今迄白河夜船と寢込んで居た澤山の人夫は目を覺まし、下へ下りて行きます、三人も同じ樣に下へ下へ下りて洗面所で顔を洗つて食事を致しました。

昨日は、まだ湯氣が上つて居ましたので食べよかつたが朝は冷えて船來米の正體現はして全然米の樣であります。

腹は空いて居ても中々食られませんでした。朝飯が濟むと澤山揃つて川崎造船所へ行つたのであります。

造船所でどのやうな事をするかと云ひますと、大きな百貫も二百貫もある大鐵板を此方へトロで運んだり彼方へ運んだり天秤棒を擔いだりするのです。

夫れを三回餘りすると十二時を知らす氣笛がピイーと鳴渡ると晝飯を食べるのであります。晝飯の辨當は朝家を出る時に持つて出るのであります。夫れは竹の皮に包んであるのです。

夕飯も朝飯もロク／＼食べて居ないので腹が空いて／＼閉口して居るのですが、辨當を開けると飯と梅干とで御茶も無いのですもの食べられようはずはありません。

夫れも少しばかり食べて後は全部

棄てゝしまひました。恰度其の頃は燒附く如き夏の炎天故仕事をして居ると目が廻りさうになりますから、私のごとき者ではたうてい、其のやうな事が出來ません、其日一日もよう働かず匙を投げました。

矢張り家へ

さうして淸一組の家へ歸つて來て
『もうとてもあのやうな炎天で仕事は出來ませんから』と云ふと彼は
『夫れでは勘定書を貰つて來られましたか』
『私等は何も知りませんから貰つて來なせなかつたんです』
『さうですか、夫れでは今日働いた分は日給がありません、それから又私の方の勘定をします。』
と彼の主人は三人を前に置き、算盤をパチパチやつて居りましたが軈て私等の方を向いて
『夕べの御飯代と宿賃朝晝の御飯とを戴きます』
と云はれたので、私は
『昨日御渡し致しました一圓五十錢から御引下さい』と云つたのです、處が主人は
『昨日の一圓五十錢は一箇月居られぬ方には御返し出來ません。三人で六圓戴きます』と云はれ詮方無く六圓を支拂つて、出て行きました。途中で昨日買つた、古服を賣つたのです。買ふ時には、三圓も出した服が賣る時には、五十錢より賣れませんでした。其の時初めて親の恩を知りました。親と云ふ者はありがたいものと思ひました。

もう此の上は行く處も無く、詮方無いので下宿屋に宿つて、名々の親元へ海員になる承諾書を送つて貰うやうに云つて遣つたのです。

恰度手紙を出して三日目の事でした。私の兄が、わざ〱神戸迄迎ひに來て呉れました。そこで、三人共兄に連れられ又元の大阪へ歸りました。

このやうな事を私が書いては己れの恥とは思ひましたが、廣い世の中故、かゝる運命に弄遊ばるゝ人の爲にそのやうな運命に陷らんとする人達を警告する爲に、恥を忍んで筆を取つたのであります、この全部を讀れたら、さぞや大馬鹿者奴と御笑ひでせう。實に面目なき次第であります。

―(永井信太郎)―

時は秋深き十一月十五日、鹽原は明賀屋旅館の一室に、人目忍んで滯在せる客あり一人は金のありさうな老人、一人は花も恥らう女優風の美女。宿の女中は「湯たんぽ代用ですよ」と云ふ。其理由を明かにせずと雖も、親類でもなし、親子では尙はなし。これ即ち天下の女優森律子ならんとは。

滑稽珍々風俗□□□□阿波の正月

スッタカ坊主が飛び込んだ

一、狂人踊り、犬神、乞食

阿波には狂人踊りと稱ふのがある。又犬神もある。阿波乞食と謂つて、乞食も隨分多い。但し盗人は餘り無い。

狂人踊つて一體什麼ものだ。知つてる者もあらう、曾て、芝三田の蜂須賀侯邸の園遊會で、本場から藝者を呼び、所謂貴族階級に屬する方々のお目に此踊りをブラ下げた位ゐで、まア、原首相さんの郷里の金山踊り程に有名なものサ。それちア什麼風に踊るんだと聽かれた處で、こればかりは實際に踊つて見せなきア解らない。唯狂人染みた踊りだから狂人踊サ。

さう言つた處て、狂人染みた丈けちア物足りない。『踊り』はドンナ踊りだつて狂人染みてゐる。踊りといふから平氣で眺めるものゝ『踊り』の名がなかつたら、ドレだつて狂人染みるよ。畢竟、阿波の『狂人踊り』は往來を踊つて歩いたり、専ら庭内等で踊り、座敷でヤル事は稀だからさうつけたものであらう歟、尤も座敷で踊つても『雨ショボ』だとか『淺い川』だとか、詮じ格を上げて、『かつぽれ』『深川』大阪の『ヤツチヨロマカセ』『オッペケペ』なんかになると隨分狂人染みてゐる。桂小南の『飛行機踊り』や『逢ひたさに』等は純然たる狂人踊りサ。

大體狂人踊りなンてのは孰れも他國人のつけた名詞で、本場ちアこれを盆踊りと申しやす。唄の文句の一例を擧げるとかうだ。オヤ屁が出たい。先づ一發ひつてから一トつ唸つてみようか。

〽洗ひ立ての米ちア無けれーどオー（チヤカチヤン、チヤカチヤン）飯（儘）にイーなアるウまアでヱ木（氣）を燃やアすウ（ホーラ、イケ、ハツ、イケサツサ、イケサツサ、ムカフニ、マケナヨ、アツ、ホラ、ア、ホツホツと、かう唄ふのサ。變な野郎が唄つたんちア引き立たないが、女が唄ふと、一寸乙でげすよ。服裝は、緋縮緬の長襦袢の上に、縮緬の浴衣。それを片肌脱いで、三味を抱へ、編笠を冠つて、赤い紐をタラリとお頸で垂れる早い話が鳥追ひといふ體裁でゲスなア。白足袋に、突つかけ草履、それが六七名も横隊に列んで、騒々しく彈

いて來る。その前を、男女の踊り子が踊つてゆく。
その踊り子も、上品な處では隨分意氣なものだが、惡洒落の酷いのになると、宛然百鬼夜行の體たらくだ。顔に鍋墨を塗る腰に炭俵の空き殼を結びける。赤ン坊を背負つた奴、尻へ喇叭を裝置してゴム管傳ひに、口で屁の音を吹いて行く。貼つ子の犬を引ずつてゆく。これもまア荒川邊りのお花見と見れば大した相違はない。兎に角歩調を揃へて踊つて歩く丈けが厄介ものサ。昔は踊り子の中に混ろ男も大抵娘に變裝したが何分往來だけに、今ぢア巡査が喧ましい。

二　裸體坊主の來る時

犬神は何時か報導した。乞食、は、コレは先祖の『お鶴』さんが餘り有名だから出たことで、別段阿波の人間に乞の多い譯ではない。『四國八十八ケ所』の靈所巡拜を兼れての落魄の人々が、養育院代用と言つた形で全國から集注する。それを阿波の人を始め、土佐、伊豫、讃岐の人々が共同で養つてゐるので、「成程乞食は多いに違ひないが、四國の國者は極尠ない。就中阿波の國柄が良い譯でもなからうが、阿波一國に集注する乞食が多いので、お鶴さんと一緒に此名も出た。
此の如く『狂人踊り』や『乞食』や乃至は『犬神』等の副産物を生んだ阿波には、必ずや他國と又趣きを大いに異にした正月の奇習がある筈だ。何時も云ふ通り阿波の人間は筆無性なのか餘り此奇習を全國に紹介しない。殊に正月の奇行珍習など、只の一回も紹介された事はない。一トツ、書初めの筆下ろしに、此奇習に手を附けて見よう。
『ホラ、スツタカ、モンダカ、スチヤランポコラ、スツタカ坊主ノ、クルトキハ、コラ、世ノ中ヨウテ世ガヨウテ……』
かう言た丈けぢア何の事か解るまい。これが阿波の正月に來る物貰ひ、『萬歳』と言つた調子の者が唄ふ唄である。これを『裸坊主』とも言ひ又『スツタカ坊主』とも言ふ。語原は共に『裸の坊主』からと、『スツタカモンダカ』と唄ふところから出てゐる。阿波でも主として南の方に流行する。今でも却々盛んだ。
『スツタカ坊主』は非人の類が稼ぎに出る。貰ひ物は、普通『金』と『餅』である『金持』を緣起附けた譯だらうが、肝腎の遣る方にとつては却つて不緣起の名だから面白い。
『スツタカ坊主』は裸で來る從つて裸坊主の名もあるのだが、これを當然に考へて何う思ひやす。正月と言へば嚴寒でげせう、その寒中に裸も裸、素つ裸で來るのだから變つてるゲセウ一組四人位ゐ、四人共素つ裸で、赤褌唯の一枚腰の周圍に注連繩を張つて、手に三番叟の持つやうな鈴を振つて、飛び込んで來る。斷わらうが何うしようが、聞くものぢアない。假令何と言はう共踊つて終はなきア承知をしない。書き後れたが坊主は名の通り剃り立ての青坊主、頭にも注連繩を張つてゐる。一人の坊主は『ドンゴロス』の袋を背負つてゐる。彼等は平常犬殺し等を業としてゐるので、其袋は殺した犬を入れるものに使ふやつである。それへ貰つた餅を

入れるのだから味噌も糞も一緒クタだ。その一隊が『御免』とも何とも言はないで飛込んで來る。來るや否や、『ドンゴロス』を先に立て、『アー、ホラ（掛聲）探つたか、探つたか、揉んだかスチヤランポこら探つたか坊主の來る時は、コラツ（掛聲）世の中よくて世がようて、こら（掛聲）お家も繁昌大繁昌、家が繁昌する時にア、こらツ（掛聲）目出たい〳〵なア、』プスツ。最後のプスツは『おまけ』である。屁の音である。膝栗毛では『馬のひる屁の音ブウブウ』なんかと、隨分細かい處まで注意してゐるがうきよ記者は精々屁の音位ゐしきア注意が行き屆かない。兎に角プスツである。

三　寒いから急ぐ

要するに彼等の踊りと言つても別段説明の價値ある踊りではない。諸君は活動寫眞で南洋邊りの土人の裸踊りを見るであらう。槍を持つて、「地團太」を踏む要領で、グル〳〵廻つてゐる。詰りアレの進化したものと看做して差閊えない。背中を丸くして鈴を頭の上で振り乍ら、前記の唄を唄ひ乍ら、急ぎ足若くは跛け足で廻るのである、兎に角忙はしい踊り――否地團太踏みである。一體なぜ、ソンナに忙がしいのかとアル識者に聞いて見ると、識者の曰くサ。

「何、スツタカ坊主の踊りだつて、さう忙はしいモノぢアない。彼等も人間である限り、綿入の重ね着をしても寒い正月に、素つ裸ぢア迚も耐つたものぢアない。南洋のやうに溫かく、印度のやうに熱い國なれば兎に角、日本の正月だから堪らない。ダカラなるべく往來を無駄に歩かぬやうに、歩いて感冒をひかぬやうに、行當りばつたりにドノ家にでも飛込む。そして風を除けて踊るのだが、その踊りも悠乎ぢア寒いから、一生懸命になる。一生懸命に地團太を踏み、それでも未だ寒いから、猫背になる。そして一生懸命に鈴を振つて唄を唄ふ。結局、金でも餅でも貰ふと、其儘、驀直に飛出して向ふ側の家に飛込む。實際、考へたものサ、隨分能率が上るよ。ダツテ考へて御覽、背水の陣の布いた形サ、寒いから稼ぐ、寒いから行當りばつたりに飛込む。そして踊る。無闇に踊る踊るから金になると言ふ風だ。世間には寒いから稼げないと言ふ例は幾らもあるが、コレは寒いから稼ぎ得るのだから面白いぢア無いかつてネ」

四　恵方から若恵比寿

名物「裸坊主」の唄に大抵極つてゐやす。中には這麼のがあります。

『七五さんかへ、五五三かへ、コリヤ五五三七五と舞ひ伸びて』

何の事か一向解らん。解らん處が値打かも知れない。

阿波の南部では、正月に、寶來山といふのを樹てる。寶來山と謂つても山ではない。卽ち松竹梅、注連飾等の拂ひ下げを、海岸に運び幾十丈といふ程に積み上げて、その上に、寶來山といふ幟を揷す。そして火を放つのである。コレが却々面白い。又戸自に薪、炭等を子供等が貰ひ集め、仍且海濱に小屋を作つて、有りつ丈の木を燃す。そして、その殘つた火は、翌早朝、各戸自に配られる。別に有難い火ではないが、この火に焙り、此火て、お汁粉でも煮ると、壽命が伸びるといふのである。

元朝、末町に『恵方から若恵比寿の福の神』と言ふ呼聲が、街の其處此處に起る。これは、土地の氏神から御守を賣りに來るのである。

記者は、前の裸體踊りを、一番東京でやつて見たいと思つてゐる。

『ひとつとやア、、ひイとや明くれば賑やかに、コリヤ賑やかに、イ、松竹樹てタリ注連飾りイイ注連飾り』といふ唄は玄關の足音にかり三ケ日、等の句と共に、元日の氣分が、年末にも起る位嬉しいが、一番『七五三かい五五三かいコリヤ五五三七五と舞ひ伸びて』と『スツタカ坊主』を處嫌はず飛び込ませては何うか。

ブルツ!!ブルツ!!ブルブル ツ!!ブスツ!!ブスブスツ!!ブウーウブスツ!!　（喜久坊）

スツタカ坊主が飛び込んだ!

松木みどりの其の後

〇松木みどり戀の前科の其の後はといへば相變らずの發展ぶり。平田芳郎にはお玩具扱ひにされて再びといふわけにも行かず、ペラゴロとも大いに仲直しになり、手紙をやつてはありがた涙をこぼさしてゐる。然し何時まで空家でもしようがないと見え、今度たうとう水野といふ藥師と正式に結婚したんですつて。女もこれ位になると澤庵のおしこれから又新らしい夢に生きる位にはなるさうだ。

裁判哀話

同情ある検事の論告は此重大犯人に執行猶豫を求刑した理由。

夫を殺した女

藤本直江子の冷い涙熱い涙

主人に見出されて娘の養子となつた

河内屋――それは島の内でも有名な古着屋であつた――主人彌平には直江と呼ぶ十八歳になつた島之内小町と評判の娘と弟の貞一とで去年天王寺中學校に入學したばかりの男の兒と三人の、極めて少ない家内であつた、妻は先年逝つて外に番頭で小僧時分から河内屋の暖簾を潛つてゐる捨吉（三）と安吉（二）小僧の兵吉（一六）の使用人が居た――事件は是から展開されて行くのである。◯

今年の春市内の〇〇女學校を卒業した直江は八方から結婚の申込みがあつた、けれど父親の彌平は、どれ一ツとして話に乘らうともしなかつた、無論直江も心向かずにゐる事を察してであらう、所が其の年の秋亡妻の縁者から是非にと望まれて斷り兼ねた彌平は詮方なく娘直江に話して、彼の意中を聞いて見た、直江は一言の下に斷つて終つた、けれど親戚の申譯けに『直江には許嫁の男があるからと云ふ名の下に斷つた、然うなつて見ると、今迄小供の樣に思つて居た直江が、早や年頃の娘であり、色々な世間の話には五月蠅く思はれたので、或夜直江を呼んで、結婚を進めた直江の配偶者――それは正直者、勤勉者として信用の厚い番頭の捨吉であつた――父の口より捨吉との縁談を話された時直江は薄化粧の美しい頬を直赤に染めて俯向いた、それもその筈――娘と思つてゐた直江は父の眼の停かぬ所を覗ひ、捨吉と戀を囁いてゐたのであつた――父知らぬ娘の胸には淡い戀の光が、明け行く毎に濃厚に染めて行くのであつた。デリケートな灯の道頓堀を、若い捨吉と直江が澄み切つた心に明るい望を宿して、幾夜かそゞろ歩きの樂しさを辿つてゐた。

中秋十月の夜半、捨吉と直江は、父知らぬ固い握りの手を、父の前に公然と握り合ふを許された、二人は目出度く結婚をした。

以前に變る夫の身持 直江は泣いて暮した

それから間もなく、南區八幡筋の中の角に新し

く出來た、古河屋河内屋支店は、戀に勝ち得た捨吉と直江の住居であつた。幾等商賣に馴れた捨吉であつても、手元を離れて見れば——それに可愛い娘の婿の家——彌平は日に一度は表を覗くのであつた。

秋も行き、木枯の夕べも去つて、梅の香の正月は來た。或夜、同業者の新年宴會に招かれて、天王寺南洋館に遊んで來た捨吉はそれから、スツカリ變り切つた直江の夫となつた——三日にあげず家を外にして行く夫の身持には、何處迄も信じてゐる直江は決して疑ふ樣な心は持たなかつた、とある日の朝、昨日も歸つて來ぬ夫捨吉から電話がかゝつて來た、それは中筋（難波新地）の泉屋まで金を五十圓持つて來いと云ふのであつた、直江は五十圓の金を持つて中筋の角を曲つた時、不思議な程、恥しさと、恐しさが胸に迫つた。來た事のない、廓の街、行き來ふ人は皆廓の女、直江は兎も角も泉屋の格子を開けた

『御免ん下さい』と恐る／＼這入つた。

『ハイー』と出て來た女は、仲居らしい年増の女であつた。

事情を話して五十圓を其女に渡したそして『夫に一度逢して下さい』と云つたがそれは駄目であつた。口美味い廓の女に何うして勝てよう、直江は寂しい胸を抱いて格子を閉めたその時中で『まアあんな美しいお内儀ありながらヤーさんも罪な人やな』と云つた女の獨言が何んなに直江には悲しく聞えたであらう。

——（父に逢ひは逢ひながら）——

正直であつた夫捨吉には新年宴會以來一人の女娼妓が出來たのである。

この事が父彌平の耳に入つた、彌平の立腹は一通でなかつた、直ちに直江を引取つて終つたそれでも捨吉の心は直り相にもなかつた、父の家に夫を思ふ直江は幾度か決心して、ソツト或夜家を出て、夫の家に走つた、そして夫の膝に泣き崩れて『私は今家を抜けて來たのです、どうか私が可愛相だと思つたら眞面目になつて下さい、そしたらお父さんも、資金位は出して下さいますから――え、きつと資金を出して戴きます』と泣いて云へば、

『よしそれなら心を入れ換へようその變りお父さんに云つて三千圓丈け出して貰つて呉れ』と捨吉は云つた。

『三千圓、二千圓、』と娘に泣き着かれた彌平はその度に金を出した、けれど捨吉の心は直り相にもなかつた、その內に人の話には、日出松と云ふ女が、捨吉に身請されて今は難波新川邊に圍はれてゐる事を聞いた時、彌平憤怒の餘り捨吉の家を訪れて、娘を連れて歸へる樣に進めたが、直江は聞かなかつた、遂に彌平は勘當を云ひ渡して歸つた。

覺悟の刄

直江は身の不運と諦めてゐるもの、あまりと云へばあまりの夫の仕打に、捨吉の歸りを持つて、心を決めた意見をしようと考へた。

それから三日後の夜酒に醉ひ崩れた夫捨吉は歸へつて來た。姿を見るや意見しようとしたが流石に云ひ兼れて心好く迎へた、けれど妻の心盡しも捨吉には憎らしく見えた。

『貴樣の樣な女の面を見ると胸の蟲がムカ〳〵するわ』と云つて無理難題を云つては、直江を撲つた――。

遂に直江に夫の情婦を殺さうと決心をした

夫の不如意から店は閉めなければならなかつた、父に捨てられ、夫には冷たい扱ひをされた薄倖の直江は此上何うして生きて行かれよう。泪も枯れた――死に死なれぬ直江は或夜密かに父の家を訪れた。寂し想な父の影が障子に寫る夜半、裏口より父に別れをしに來たのであつた『お父さん〳〵』と呼んだ、ハツト思つてか障子を明けた、彌平は一目直江の亂れた姿を見て『直江か、お前には用はない筈だ』と云つて障子を閉めた、明るかつた部屋は眞暗となつた。今は仕方なく直江は父の方に雨手を合はしてソツと家を出た。

右手には月の光に鋭利な白刃が閃めいてゐた

直江は夫の女日出松を殺害して自分は自殺し夫を元の心に改めさせ様と考へたのであつた。

幾度か行きつ戻りつ考へた直江は遂に決心をして、一旦家に歸るべく裏口の戸を明くれば、奥の座敷に人聲がした、ハット思つてチット様子窺へば、それは夫捨吉と情婦日出松と二人であつた、この姿を見た時、直江は意識ある女ではなかつた、矢庭に座敷へ跳り込んだ。

丸髷の女日出松へ一刀浴せた、『キヤツ』と悲鳴を擧げて倒れたは日出松でなく夫捨吉であつた逃げんとする日出松をも後より斬付けた。遂に温順な直江は慘忍性の女と化つた。鮮血に染まつて倒れた、捨吉と日出松を見た時、直江は凄い瞳を据ゑて心持好げに微笑んだ。

四月二十一日午前九時大阪地方裁判所に於て公判は開廷された、保検事は同情の涙で、其罪は重きも、犯罪を犯すに至つたのは被害者に罪あれば情を酌量されて輕き刑を持つて處分されん事を望む云々で懲役二年三年間執行猶豫を求め、遂に此の論告通りになつた。

――(司法記者寺川紫紅)――

(十月)(十一月)(十二月)

天竺浪人ワルデック之にありと叫で、お臺場に天下つたる一武者、何をと向つた蘆原將軍、互ひに鎬を削つて上段下段、此時、顔から稲光りして割つて這入つた村上龍平、ブスリッ!!と屁をひつて取つて投げられる。村上の仇思ひ知れと飛込んだは百日鬘の日蓮上人、續いて來つた中山安兵衛、川尻清潭、孫逸仙、福田徳三、大島伯鶴、巴家寅子、法性寺入道前關白太政大臣藤原朝臣、高島米峰、久米の平内、煙草屋喜八、戀日の家の戀香に有島生馬、與謝野晶子、越路太夫に間貫一、孰れも卍巴と斬り結ぶ。(ハラドツコイドツコイ)

大地がゴソリと音がして脱ける。すると、手にパルチザンの首領らしい者の生首を下げて、芳川鎌子が現はれる。運惡く其處へ出會すのが關羽、孔子と基督を股に挾んで鎌子待つたと組付いて來る。關羽は股倉の二人が氣になつて遂々鎌子に組敷かれ將に首を刎ねられんとする時空に聲あり、白裝束の佐々木信綱、村井吉兵衛、頭山滿、中平文子に巴御前加藤高明、菅秀才、馬越恭平、西鶴、日蓮上人に、ナイチンゲール、酒顛童子、野依秀一、紀の國屋文左衛門、清水の頑鐵、梅島昇、ルーデサックに小夜衣、カイゼルに山本權兵衛、平山蘆江、レーニンにフロックコート、夏目漱石、永井柳太郎に平福百穗、市川箱登羅、曾我廼家一滿、ニイチエに常の花共に一騎當千の猛者揃ひ、鎌子を取卷いて蹴落。

さア、かう名流が飛出しちア引つ込みがつくまいと思ふだらうがさうぢアない。自來也と、圓右が、犬に乘つて鎭定に來るといふ寸法である。

何うだ解つたかと觀世音菩薩、解りましたと汀果坊、何だか變な心持ちだが、まア豈夫間違ひぢアあるまい。若し此豫言が外れたらカチ〳〵山の文福に訴へる。そして山本農相を陪審にして、木村長門と談判し、萬里の長城の明渡しを申込む。若し肯かずんば生塚の婆か宇治龍子を喚んで來て、國技館で、一大海戰をする。その時は大久保百人町で、土左衛門と首つ引で、小便をひる猶松澤村の病院から迎へに來る知らせがあるので、寧つそ病院へ行くより、藍染川で宙返りでもしよう。

(ヤレ、メデタシメデタシ)

岩崎善右衛門の事

蠻俠『おでんや』

■人力車夫の親方

毎度新聞や雑誌の材料にされて御座る名物男のことだから或ひは讀者諸君に於かれても先刻御承知の助であられるかも知れない。といふ程左樣に天が下の名物男である我が岩崎善右衛門が近頃感ずるところあり『おでんや』を開業した。といふことが東京夕刊に依つて報道された。それから雑誌『新社會評論』にも紹介されて居た。新社會評論と云へば社會主義者中での大親玉枯川堺利彦老の主宰するところの雑誌なのだが、その本の上に『我黨の名物男おでんやを開業す』と歴々しく提灯持たれたのだから岩崎も決してタダの鼠ではない。が一體岩崎とは什麼男か？と云ふと、彼の住居は京橋區築地管理局前の、藝妓家の軒を並べた小路に巣うた『髪結いわさき』なのである。勿論髪結は女の職業に定つて居る。昔ならイナセな男も職業として居たが、それは昔の話である。で『いわさき』は彼が最愛の女房君が手仕事である事は明かである。花柳界を中心として居る丈けに頗る二人は安定のある生活を續けて居る譯だが、岩崎の性格といふのが甚だ豪傑で且つ同情心の強い男であるんだから、妻君の稼いだ金を目的にノランクランと遊んで懷中手して居ることは、天帝に對しても相すまぬ儀であると思つて居るのだ。で、去年迄では汗水流して人力を引いて働らいて居つたのだ。人力車夫としての彼の名は可成り評判の高いものであつた。死んだ人力車夫の總取締とも云ふべき野澤重吉は彼の先輩であつた。野澤老人は晩年には甘酒屋になつて市中の隅々を歩いて居たが、貧民窟の子供達にはロハで甘酒を吞まして、その親達には平民思想を說敎したものだ。片山潜だの堺利彦だの片腕とも云ふべき氣持ちの好い爺さんであつたが遂ひに死んで了つた。その野澤老人の惠み深い感化を受けて人間に成つたのが我が岩崎善右衛門である。

■戀のロマンス

今の妻君と生活を共にするやうになつた抑々の原因といふのが、人力車が取り持つたのである。或る夏の日、日本橋を伸引いて通ると橋の畔で、さまで美くしい女でもないが、どことなく意氣な藝妓とも思へる女が、ウンウン苦しんで居るので、親切氣の人一倍に濃い岩崎は其の儘默つて其處を素通りすることが出來なかつた。色々と優しく訊くと、何んでも心臟かで非常に危險狀態に這入つて居たのらしい。さア大變だ、人間一匹殺すことは我輩の到底しのびないところであるのである。といふ觀念から、自分の俥に乘せて知り合ひの病院へ連れて行つたものだ。藝妓の家といふのが築地だつたので其の後も夫れが緣で度々、自分の俥に乘せたり話したりしてゐるうちに、遂ひに、靜かな座敷で話したりするところまで走つてしまつたわけだ。即ち新らしい言葉で云ふと戀愛だれ、共鳴だれ。

かくて年が開けて晴れて樂しい夫婦になつたのだ。恩を報ずるは此秋にありとて女の方では髮結を初めたのである。岩崎は其の頃から人に知られ、仲間では顏の立つ親分になつて居た。それに政治趣味を持つてゐたので、不正な政治家や富豪は絶對に『我が尊い汗を流す車』には乘せてやらんのだと氣焰を吐いて居たものだ。『鳩山一郎といふ奴は什うも浮調子で眞實性の無い奴だ』と能く云つてゐたが、到頭、此の前の、選擧の時に彼は鳩山を自分の俥に乘せたかと思ふと、そのまま俥を横にして、引きづり落し、横ツ面をイヤツと云ふ程叩きつけたといふことで、當時の新聞記事を騷がせたものだ。

■勞働者だツ

藤田浪人と云へば怪奇な風をして歩く痛快な社會主義者であるが。岩崎は藤田と義兄弟の約を結び藤田の經營して居た東京新聞の記者にして貰ひ、その大きな『新聞記者』の名刺を腹掛けの中へ入れて置いて、俥を引いて歩く事を自ら大なる快としてゐたものだ。巡査なんかに能く喰つて掛かつたものだ。が決しく無茶をするのではない。立ン坊だの、自分達の仲間が、何か一寸した事で巡査にガン〳〵叱られて居たりするのを見ると、突發的に義俠心が飛び出すのだ。

僕達とも一件に演說をしたことがある。六年ばかり前私娼撲滅のあつたとき、僕達、北原龍雄だの添田啞蟬坊だの、辯護士の中村泰治だの代議士横山勝太郎だのと顏を竝べて、淺草の東京亭だの龜戶の長樂館だの芝のスケート場だので怪辯を振つたものだ。仲々頭腦がハツキリして居て、たいした學問をした男でないのだが、新聞や雜誌の新らしいところを覺えて居ては、破天荒の演說を行つたので、却々の人氣を受けたものだ。新富座で代議士黑須龍太郎の目に止まり、大いにカンタン相照したといふことである。東京驛前のビルデングで、普通選擧大會が開かれた一昨年かに、彼はフオークを握つて立ち、『我輩は車引である』と云つて勞働者の爲めに叫んだこともある。まア勞働者として演壇に立つたのは、彼などが元祖であらう。

■糞まきの亂暴

神戶の鈴木商店を燒打したとかいふので三年の刑を受けて下獄した先輩藤田浪人の初めから終りまで面倒を見るのは岩崎一人である。多くの社員や同志が居たが、岩崎程懸命ではない。岩崎は今春、藤田の結社であつた日比谷第一倶樂部の一室を引き受けて『おでん屋』を開業したのである。その上り高のうちで藤田の妻と二人の子供を養つてゐるのだ。

この夏の間は氷を賣つてゐたが、著てゐるシヤツの兩襟には墨黑々と『人は働く可しなまけ者は喰ふ可らず』と印してあつた。その署した通りの氣持で世の中を渡つて行くのが岩崎である。彼の全生命は働くことにあるのだ。

彼の好物は酒だ。酒を呑んだら、浪花節を語ることが常例だ。それが、黑人ぞつち脫けの上手だから驚く。最うひとつ有名である亂暴を忘れた。それは一昨年、農商務省へあばれて行つて『米價を引き下げろ』と我鳴り、持參して行つた袋の糞を省內へまき散らしたことである。省員が時ならぬ黃金色の雪に降られ、顏や手を吻々させたといふことである。勿論、岩崎は其場で引致された。

とまれ、天下の名物男とも云ふべ岩崎善右衞門の『おでんや』に『うきよ』の讀者たる者は一度は行つて飲むの必要がある。

探偵實話 怪僧法導

生臭坊主の痛い策略

今は官界から去つて少々の田地を耕し、呑氣に日を送つて居る刑事の横井老人は度々僕に色々な探偵の苦心談をして呉れる。刑事根性の抜けた薩張した人で、その故か近所の人々の尊敬も甚大である。此の談はある雨の降る暗い晩であつた。火鉢を挾んで（此の人特長の悠長した語調で話すのが例である）夜の更ける迄話して呉れたのである。

其れは讃岐の善通寺近傍のある小さい庵寺の住持さんが主人公だがれ。『事件の起りは丁度春五月だつた。櫻の花が咲き亂れ鳥が柔い胸の毛をふくらせて人の心も自然に浮き〳〵した時分、近所の信者を誘ふて觀光團を作り團體で大阪、京、伊勢見物傍ら拜詣を兼ねようではと其の庵寺の法導さん——名は法導さんなんて好い名を付けて居るがれ——がいひ出した。去年の稲はよく收穫し又今年の麥の成育ばえもよいので百姓たちは獨り悦に入つて居た。それに加へて時候もよしと言ふので贊成者も多くなり五十人の團體が出來上つた。それで一人前の旅費、出發、日時、集合場所とチヤンと決定して仕舞つた。無論入費は先拂で會員は皆五日の夕方迄に拂込んだ。愈々明日が出發となつたので團體員は雀踊りして喜んだ。住持は急しさうに準備に取りかゝつた。その日も暮れた。そして翌る日の朝二時頃法導は團體員より一足先に其の旅券を買ふ爲團體の金を全部引さげて山間の捷路を通つて多度津港へと向つた。夜は白々と明け放れて風一ツない日本晴、旅行にはあつらへ向きの上天氣、東からは朝の太陽が萬民に温い恵のある光を投げた。そして時計はカチ〳〵と刻んで定刻の八時半は最早間近となつた。團體員は我も人もと誘ひ合せて遅れぬ樣に全部期定の場所へ集合した。が而し主導者の法導さんが未だ見えて居ない。時刻は休まずに進んで來る、團員はそろ〳〵疑惑の雲に被れて來た。十分、五分、一分、出帆時間は近くなる許り。そこ此處の船宿と言ふ船宿は全部手分けして尋れたが依然姿が見えない。衆の疑雲は層一層暗くなつた。疑雲は變つて憤怒となつた。愈時刻は來た。船は豫定通りに團員を後にして出帆した。團員の憤怒は頂上に達した。その時突如!! 呼吸せき切つて馳せ付けた車夫がある。その車夫は呼吸も絶え〴〵に『法導さんの團體の御方はこちらにおいでゝすか』と尋ねた。彼の語る所に依るとかうである。

今朝四時頃に彼の山間に通り掛ると人の呻聲がするので怪み乍ら近付いて見ると、一人の住持さんらしい人が道傍に倒れて居るので、よく〳〵見ると全身數ケ所の創を

負ふて血塗れになつて目をまはして居ました。
それから近所の——近所と言つても五六丁も下

の方の——醫師の内へ相棒と二人で運んで行つて應急手當を加へると、やがて蘇生して夢からでも醒めた様な目で苦しい中から斯う話されたのです』

『今朝三時頃でしたでせう、こゝまで參りますまで後から見えつかくれつ付けて來る人があつたのですが、別段怪みもしないで其儘參りますと、あの山道で突然走り寄りいきなり私の肩の所へナイフ様のもので切り付けましたので扨は私の持つて居る金を盗らうとするのだなと力一杯泥棒々々と號びましたが、隣家がかけ離れて居るものですから、聞こえなかつたのでせうか誰も救けには來て下さらぬので、二丁餘りも逃げましたが、遂に捕つて、何處此處となく盲滅法界に切りまくられました、唯それ迄は知つて居ますが、それから先は夢現、更に記憶にございません』と云ふことでありました。私は側で聞て居ましたが「皆様が嘸待ちなさつて居るだらうお前一走り報らせて來い」と巡査さんのお言葉で一寸お報知に參りました』

さあ大變だ法導さんが見えないのも道理だ、強盗に出逢つたのだもの氣の毒ぢや／＼と、誰も人も同情の心となつて仕舞ふた。それで各々引上げて歸つて了つて、唯徒らに日を過すばかり。住持は創が重つて容易に召喚する事も出來ぬ——諸新聞では攻撃する、署長からは矢の督促をされる——他の刑事等は有力な嫌疑者を引致するが皆證據不充分で放還する。すると一週間も過ぎ去つてしまつたので、署長は遂に此の俺に日を區切つて命令を下された、即ち本明、明後日三ケ日間に犯人の逮捕せられたし、以上日時を經過する時は他の刑事に命じて逮捕せしめると云ふ一寸無理な命令だ。こいつは迂濶にはやれない、と臍をかためて署を出ると、ヒヨイと顔なじみな友達に出逢つた。急いで居るから其の儘別れて行かうかと思つたが、向ふから話かけられて止むを得ず話を續けて居ると案外な話を其の人の口から聞いたよ、「何んでもあの住持さんは今朝八時半頃に退院して自宅に歸つたさうだよ」と聞かされた時の俺の嬉しさつたらもう其の時許りは天下を取つた時はこんな氣分かと思ふ位にネ、急いで別れて其の足で直ぐ其の庵寺迄出掛けたよ。それは此の寺の内に祕密の、謎の鍵は祕されて居るものと信じて

其筋へ御注意申上候

本郷の理髪店へ行つたら、(其筋のお達示に依り手拭を各自に持參して下さい)と云ふ意味の掲示があつた。此の事は以前から(其筋のお達示)になつて居たらしいが、ほんの一部に於てしか實行されて居なかつた。今度一般に趣旨を徹底させる心算らしいが、此事は到底行はれないと思ふ。近所の若衆の娘品評と將棊打所の感があつた以前の髪床――日本剃刀を自由に使ふ鳥渡底意地の惡さうな床家さんが居る――時代に於てこそ、客は、藝妓の名入りの手拭でも疊んで懷中する事が容易であつたが、通りすがりの客の多い、又馴染みの客にしても所用ついでか勤歸りに寄るやうな忙しい今日の理髪店には行はれないと云ふのである。殊に山の手方面に於て然りである。然し科料にもならないお達示だから、あつたつて邪魔にもならないからいゝ。

仕舞つたからだ。そして晝は宿屋、湯屋、床屋等を探つて廻り、夜が來ると忍んで其の寺の裏堂の椽の下に隱れて(丁度病室が裏堂になつて居たから)模様をうかゞうと――こんな時には間々泥棒と間違へられる時が度々あるよハヽ、ヽヽ――丁度二日目の夜自分の妻に細々と事件の成行を話してその後から『僅か千や二千の金の爲に自分で自分の身體を切るとは――もすこし外に手段は出來なかつたかな、創がウヅ〳〵して夜も充分眠れやしない』

『だつて貴郎の樣に言つても一夜に大金儲少々痛い目はしたかも知れないが餘り惡い話ちありますまいナ』

『成程な、而し惡い事は出來ない今の世の中で俺がした細工は警察の目を盲にするな』等と手に取る樣に聞えたので私は早速飛出して阿呆の樣な顏をして居る兩名を即時捕縛して拘引したのさ』。

話はこゝで終つた。

雨は未だ止まない。(碟涙生)

女優募集の家へ

變裝して志願に行く……

婦人記者　澪子　報

オペラ女優それはもう近頃ではすつかり下火になつて居ますが、一時は盛に、さうしてすつかり學生なんかを迷はしてしまつたオペラ女優——、それが場末の劇場なんかで、あの聞くにだにいやな聲をして、妙な薄衣を纏つて歩み悪い舞臺で、變な踊りをして居る女優！　私はある朝、本郷の森川町一番地にある、東京歌劇團と云ふ、殆ど名さへ聞いた事のない家を訪れたのでありました。（大學正門前で電車を下りると、丁度右側に水菓子屋があつて、それを眞直ぐに行くと右の方に行く路がある、そこを行くとすぐの所に靴屋があつてその隣だからすぐわかりますよ）と、教はつた通りの道を歩いて行くと、成る程靴屋の隣に小さな家がありました二階の窓外には、白地の浴衣が、それももう垢じみて薄黒くなつたのや淺黄地の浴衣の、それも何んだかいやにはでな柄の、身頃と袖とがすつかり色が變つたのが洗つてよく絞る事も出來ないのか、ボト／＼としづくの落ちるのがそのまゝ干してあつたのでした。そして欄干の所には赤ん坊に使ふ襁褓が何んとも云へぬ臭氣を放つやうな風で干してあつたのでした。私は何んだか淋しい氣持がして、これがあのオペラ女優の居る事務所なのかと薄氣味の悪るい感がむら／＼と湧き出たのでした。

私の手はいつしかその格子戸にふれて居ました。

表札も何もかゝつて居ない格子外には氣を付けねばわかりかねるやうな、小さな板に「東京歌劇團」と云ふ五つの字が赤く掘つてありました。

「はい。どなた？」と云ふ老人の聲がすると白髪交りのおばあさんが眞黒になつた絣の前かけで兩手をふきながら、玄關のすぐ脇の間から出て來たのでした。そして上り口の所に見知らぬ若い女の居たのに吃驚したやうでしたが、すぐ又變な笑ひをして、

「あのどちらからなんです」と氣輕

く問ふ。

「あのこちらは東京歌劇團なのですか？　そして私はあのぶしつけなんですがオペラ女優になりたいと思ひまして……」

と言ひ終らない間にそのおばあさんはすつかり（何もかもわかりました）と云ふやうな風で、

「あゝ、さうなんですか？　今會長が留守なんですか、一寸待つてらつしやいよ。」と云つて、「綾ちやん！　綾ちやん！」と云ひながら二階の方に上つてしまひました。私は亂暴に脱ぎすてた下駄や、泥まみれになつた靴や、尾がきれてそのまゝ抛り込んだため下駄箱の蓋が半ば口をあけて居るのなど、入口の亂暴さにすつかり驚されました。これがあの女優さんがたゞおぬぎになつた下駄なんだらうか？　何んて無樣なぬぎ方をする人達なんだらう？　かと一見して凡の有樣がほゞわかりました。

間もなくすると何んだか話しながら階段を下りて來る音がしますと、

「この方なんだよ。」とさつきのおばあさんが私を指さしながら來ました

私はそのおばあさんの後に居る女の人を見ると妙に狐にでも馬鹿された樣な氣がしました。メリンスの片裡がばかに飛び出したのもそのまゝで襟なんか白粉で汚れてしまつた絣の單衣を著て、だらしなく小さな細ひも一つをして居ました。そして來だ生れて間もないやうな赤ん坊をかゝへながらだまつて立つて居ました。

「さう。あなたが女優におなりになるんですか？」

とキョロ〳〵したやうな目付で私を見守る。

「え、さうなんですが。お差支御座いませんでしたらお願致し度いと思ひます」と云ふとその女の人は、

「さうですか？　しかし今會長が留守なもんですから」と云つたので私は、しまつた！　とは思ひながら

「でも今日中にはお歸りになりますんでせう」

と問ひ返します。

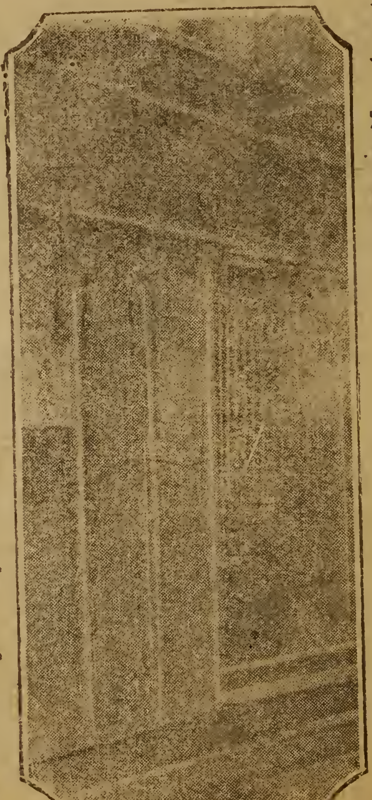
「えゝ歸りますとも。もう大方歸るだらうと思ふのですがね。」

「ぢやあ私折角參りましたのでお待ち致しませう」と云ふと、「ぢやあお二階におあがんなさい。そして待つてるともうすぐ歸りますよ。えゝもうすぐ歸りますよ。」と何んだか一人合點したやうに自問自答をして、

「さあお上んなさい」と云ひながら先に立つて二階にあがつて行きました。私はその後からじめ〳〵した氣持わるい疊を歩るいて、その人の後に從つて薄暗い、上りにくい階段を上つてしまひました。

（東京歌劇團の事務所だな）と思ひ

ながら案内される部屋に通りました「子供が居ますんで部屋が取り亂されてね。眞實にせうがないですわ。」と言ひながらその女の人は投げ出された枕や、取り散らされたおしめ等をくる〳〵と一まとめにすると、その儘何もかも一緒にして押入の中になほし込んでしまひました。私は六疊の部屋一ぱいに取り亂した物や、朝起きて掃除さへしてゐないやうな部屋の有様をみると、一體何處に坐つてい丶かわからなくなりました。へりのとれた破れた疊は赤ん坊のおしつこでじめ〳〵して居るやうに思はれたのでした。誰が休む爲にか狹い部屋の片隅には、四人でも寢せるかと思ふやうな氣持惡るい寢臺があつてその上には、襟あかのついた浴衣や赤ン坊の着物なとが入り交つて置れてありました。窓際の方に置れた机の上には薄墨で書れた人名簿がのせてありました。その脇には岩間百合子を表紙にした、オペラと云ふ雑誌がのせてありました。柱にかかつた、暦の傍には、田谷力三の粧したポッカチオの繪葉書も張れてありました。私は片隅にもじ〳〵したやうに、一體こんな家に居る女優さんがたはどんな人だらう？と一人種〳〵な空想に更けりました。女の人は――會長の女房さん――とでも思はれるその人は、「しばらく待つてらつしやいね、…もうすぐ歸りませうから」と云つて汚れたおしめや、讀み散らした新聞なんかを取りあげるとそのまゝ下におりて行きました。私はぽつねんと取り殘されたやうな氣持で、誰か上つて來ると一言なりとも聞きたいんだがと思つて居ました。すると突然隣の室内からハヽハッ…と云ふ笑ふ若い男女の入り亂れた笑ひ聲がしました。私は女優さんがただな？と思つてそつと障子をあけてのぞきましたが、その室内は固く障子がしめ



（女優募集の家）

切つて外からは容易に見えないやうにしてありました。その笑ひ聲が沈まるとピアノの音がしました。私はハハアお稽古だなと思つたのでしたすると、耳ざはりの惡るい聲をしてソプラノの獨唱がはじまりました。私はそのお稽古の場を見たくて〳〵ならなかつたのでしたが、とにかくかうして表面的では志願と云ふ事に來て居るんですからそんな不作法な事も出來まい。とじつとこらへて居るのでした。やがてその獨唱が終ると今度は、「……平和だ！　平和だ：：：」と只歌ひさへすればいゝんだと云ふ鹽梅なコーラスが起りましたその後は一だんらくがついたのか只がやがやとしやべる聲ばかりでした

すると入口の障子が開きましたので私は會長でもお歸になつたのかと思ひますと、隣の部屋からでも來たのか、菊五郎の浴衣に木綿更紗の羽織をひつかけた丸顔の可愛かほした私とほゞ同年位の人が入つて來たのでした。そして見知らぬ私の顔を眺めながら女優志願かしら？と云つた風な顔をして居るのでした。私はこの人に聞いたらと思つて、

「あの歌劇團の女優さん方は隣の室内でお稽古をしていらつしやるので御座いますか？」と云ふと押入の襖をあけて洗ひざらした木綿縞のはひつた柳のかごを引き出して居たその女の人は、

「えゝさうなんですよ。あの、あなたも志願して？」

「えゝ私もお願にあがりましたんですが……」

「あゝさうですか。」

「あのあなたもこちらの……そしてずつと矢つ張り東京の地でなさつてるんですか？」

「えゝあのさうなんです。が私まだ此處に來て間がありませんのです。この間王子の方に行つて興業して來ましたの。今度は信州のあたりに行くんださうです―

「あゝさうで御座いますか。あの此處には女優さん方は何人位ゐらつしやるのですか。そして男優の方も。ずつと此處に寢泊りしてゐらつしやる方ばかりなんで御座いますか。」

「えゝ、女優なんてわづかなんですよ。たつた七人しきやゐませんの。そして男優の方でも五人ですからねえ。ずつと此處に居る方もありますが、家の方から通つてゐらつしやる方も御座いますの。私はこゝに居ますんですが」

「さうで御座いますか。そして月謝や寄宿費は如何なつてるんで御座いますか？」

「月謝なんか入りませんのよ。此處に居たつて食べ料なんか勿論入りま

せんのです。私はかごの中から袖だたみのまゝ押し込んである着物を取り出して居る女優さんに、ほゞ伺つてしまひました。

「あなたはもう舞臺にお立ちになつたんで御座いますか？」

「えゝ……何んと云つたつて人數が居ませんから來てすぐだつて舞臺に立ちますのよ。あなたは今まで何處か舞臺にでもお立ちになつたんですか？」

「いゝえ私まだ一度も御座いませんの。でも全での素人がそんなにすぐ舞臺に立つなんて事は、隨分なんでせうね。」

「いゝえわけありませんのよ。いゝも惡るいもないんですから。只自分が云ふ事と歌ふのさへ知つてればいゝんですからねえ……」と氣輕るくその人は話したのでした。そして取り出した着物をかゝへると、一寸會釋しながら室内を出て行きました。

私はわけありませんのよ。自分の云ふ事と歌ふ事さへ知つてればいゝんですから……と云つた言葉を再び思ひ出しました。するとすぐ又その後で誰か入つて來ました。

髮の毛をぼや〳〵と長くした、眼の鋭い二十二三の男でした。そして机の上の人名簿を取りあげつ私のそばに來ると。

「あのあなたが志願の方なんですかそしてお名まへは？」と問はれたので私はハット！しながら口から出まかせの事を答へました。

「本郷のX町に居ますんです。東君代と云ひますんです。えゝ年なんですか？　十九でございます」と私は年だけは眞實の事を答へました。するとその男は、さうですか。と書き入れてそのまゝ部屋を出て行つたのでした。半時間もまたされた頃、さつきの子供を抱へた女の人が「こゝに居ますんです」と云ひながら主人らしい――會長の人をつれて來ました。

いやに目のおちくぼんだ、がつがつした樣な小柄な人でした。それでも矢つ張り色はなま白い色をして居たのでした。始めての挨拶がすむと「おい座布團をあげないか」と後の女の人を振り返へりました。

「あゝ眞實に」その女房さんらしい人は寢臺の下にある座布とんをすゝめました。私はこれもおしつこでじめ〳〵した氣持の惡るいものだ、と思ひながらもその上に坐りました。

「あなたの御兩親方はお許しなんで御座いますか？　女の人はよく虛榮のために女優になる方が御座いますからね、うちなんか女優の人も大せい居ますし、東京歌劇團と云へば、田谷なんかを追ひこさうとして居る

んですからね。したがつて女優さんなんかもしつかりとしてもらはないとねえ、いまのスターですか？　女優の？　東百合子と云つて淺草なんかで隨分評判だつたんですからねえ」と私はオペラ女優として聞いた事もない女優さんの名を知りましたましてこんな家に居る、もう十一月だのにまだ浴衣なんか着て居ます樣を見ると虛榮もなにもあつた事かと思はれました。

「兩親はもう許して居ますので、こちらでよろしければお世話にあづかり度いと思ひまして：：」

「さうですねえ、御兩親さへお許しになれば。それや出來るだけのお世話は致しますよ。：：宿料なんかいりませんとも。そのかはり地方興行に出ますからねえ。その所は：：」

「えゝかまひません。かへつて東京の地に居るよりも珍らしい所でも見物しますからねえ。そして私のやうな素人でもすぐ舞臺に立てますんですか？」と私は出たらめの事を云つたのでした。

「いや、それが何んと云つても可なり認められて居る劇團なんですからこの會に係るやうな事があつてもいけませんから。十分にお稽古をしてからでなけりや舞臺には出る事は出來ませんのですからね。しかし、後から來たつて御本人のうで次第では十分に上達するんですからねえ」とさつき女の人に聞いたのとは全で違つた事を云ふのでした。

「それに明後日あたりから信州の方に行かうと思つて居るんですがねえ今まで王子の方で興行して四五日前に歸つたばかりなんですからねえ。しかし、そんな風で又地方興行に出るんですから、あなたもおはひりになる樣でしたら、明日からでもすぐ此處に入りこんでおけい古してもらはなければならないですからね。その代り興業に出るとお小使なんか不自由はさせませんからね、そんな所は御安心なさい。私の方はね、金龍館なんかの樣に女優さんがたをあんな無理使ひはしませんからねえ。とに角親切本位なんですから」

と夜店で商賣人の云ふやうな事を物なれた調子で喋言立てたのでした。

私は一々かしこまつてその話を聞いて居ましたが、渡鳥のやうな次から次へとはかない生活を續けて居る舞臺生活者の事――ましてこんなはかない旅役者の樣を見ると、これから自分等の進む途が眞黑なのも知らないで只わい〳〵騷いで居る人々が可愛想なやうに思はれました。

・隣の部屋では思ひ出したやうにピアノが鳴つたり、まじ〳〵になつた歌聲なんか聞こえました。

向島署と千社札に就いて

既頃の一新聞は（向島署は其所轄内の神社佛閣に千社札を貼付する事を禁じた）と云ふ樣な事を報じた。新聞は殊に社會面は與太が多いから直に信じるわけにはいかないけれど、若し此事が眞實だとすると隨分馬鹿氣た餘計な手數を自ら作るものだと冷笑する。禁ずる理由は、神社佛閣の威嚴を損ずると云ふらしかつた。滑稽に値する。何故威嚴に關するのだらう。千社札の多い事は、まづ信者の多い事を意味する。信者の多いことが威嚴に關するものなら建立する事が間違ひと云ふことになる。寺や社は信者に依つて維持されていくものだから。不便な土地の小さな寺や社に此千社札が貼つてあると私等不信心家でも、宗教の力を感じさせられる。千社札なるものは、廣告に利用されて居る事もあるけれど、其麼實利的な心を蔽ふて尙は趣味の餘りあるものである。寺社の美觀となるものである。禁止するとすれば向島署長は、辨慶橋取除き事件以上に呪はれるであらう。然し、署長に依つて（千社札は天明年間に起源し或る盜賊が江戸追放になる際、子分に云つて、自分の身を隱して居る附近の寺社に札を貼つておいた事に起因する）と敎へられた事を感謝しておきます。同時に大正の今日、其れを同手段に利用することを虞れたとするならば、必ずや岡警視總監は三階の角の大きな總監室で署長さんの老婆心を笑ふことでせうと云つておく。因に附記するが、札の名既に千社札と稱ぶ（千社參りと云ふ事は安永以來行はれ麴町五吉とか云ふ者文字を書いた札を貼つた）と云ふ樣な事が「嬉遊笑覽」に出て居る。（は）

「ぢやあ私明日からでも參りますから、如何かよろしくお頼み致します」と大抵てゝらと思つた所で歸りの挨拶をしますと、

「ぢやあ明日午前中までに屹度お出で下さいね、間違はないやうにね。出來る丈の事は致しますから。もうすぐ興行に出るんですから。午前中にね。屹度。」と何度も念押しに繰り返へすのでした。で、私も屹度參りますと云つて、薄暗い階段を下りました。二階の方では、ハ、ハッハッ、ハッハッハッ……と男女のコーラスに交つて「眞實にしようがない子だよー」と云ふ女の聲が聞えました。

私は何んだか此處に居る人達は―種の暗い影に包まれた何んとも云へぬ、なぞの人のやうな氣がしてなりませんでした。種々な想ひを一人爲がきながらその會長の人に見送られて、玄關を出ました。（澪子）

食事前に讀む事れ斷り申候

記者、乞食樣の後を尾行する

―〔金坊〕―

嘔吐とビチ、糞

『立てば杓子で坐れば牡丹餅、歩く姿が質使ひ』廊下ボリ〱い尻かき乍ら、月を眺めて屁を垂れた『可愛さうだよズボンのおなら右と左に鳴き別れ』『裸體で寢るのは惚れたぢアないよお前の虱が移る故』『糞のお飯、小便のお茶、垂れてもやつぱり糞の糞』

『嘔吐とビチ糞どちらが美味い同喰ふならば嘔吐を取ろ』『さぞやさぞさぞさぞ今頃は野糞も田圃で淋しかろ』『すか屁スッとひつて一里半臭ふ。鳴る屁可愛や音ばかり『湯屁と水ツ屁とドチラが臭い、嗅がぬお方にア水臭い』

『ブスリ〱と出る屁を嗅いでひつたその屁はブスリ〱ブスリ』『カッタイ坊主に醬油をつけて、生でムシヤ〱しやぶりたい』『左捻ぢでも野糞は野糞、尻の曲つた性ぢアない』

『あんまりイーイ、餓じユーテエ、草喰ふウてエー寢たアらア糞まアでエ、臭くウてエ、寢かアセエなアイーーイ（ハアトーントン』

何と意氣なと、一ぢアげエせんか、エヘヽヽ、何が可笑い、イヤサ何が可笑しい。

記者は金杉日暮里の方から上日暮里の方へ乞食探訪に來た。その途中に唄つたのが右のどゝ一である。かういふと、うきよ記者は穢ない事ばかり言ふ者ばかりかと早合點されて、ウンコを喰べる際に御飯の話をする、ヨリ以上に穢ながつて『オヽいやだ、こんな雜誌向ふへやつといて頂戴』なんかと仰せらるゝ娘さんが出來るかも知れない。併しうきよ記者は皆美しい人ばかりで、穢ない事を言ふのはホンノ金坊位のもの、餘り馬鹿にして貰ひますまい。尤も此どゝ一を春吉さんの前で唄つたら『何だか口が酢ぱくなつた』と仰せられた。（扨は孕みアがつたナ

誰の種だ、白狀しろ）と言ひたかつた。オヤ、臭い!!その筈だ。屁を握つた手だもの。

『そこら邊りの旦那さアま。餓鬼奴がア此樣にイ（ピシヤリ）泣いて居ります。（ピシヤリプスリ）これはア今朝からア飯を喰ぬ爲でエあんます（ピシヤリ）ドヅヤ一錢恵んでエ下サレ、（ピシヤリ）吳れなけりア何時までも泣きます。大藏省のオーお旦那樣（ピシヤリ）』

院線で上野から來た人、若くは赤羽邊りからでも宜しい、兎に角、日暮里驛で下車した人が、アノ驛の裏手の阪を上つて、谷中延命院の通りみち七面阪に、途をとつた時には、降つても照つても、途中の阪の兩側に乞食の群れが陳列されてゐるのにお目通りをするであらう。イヤしないと言つてもしなきア、外に途がない。俗にコレを乞食阪といふ。此處だけは警察の治外法權に屬する處で東京名物阪番附でも、立派に『乞食阪』として異彩を放つてゐる。其乞食阪へ拙者探訪に罷り越した譯である。只さへ行人を見遁さぬ乞食の群れは、時節柄イ、鴨がヒッ掛つたと言はぬばかりに拙者の周圍を取卷いた

右や左の旦那さまどうか一文やつて下さいまし

癩病坊と虱ッ集り

『カツタイ棒』がある『ガンガサカキ』がある更に『虱ッ集り』がある『ヨイ〳〵』がある『セムシ』がある『テン棒』がある『ハナツカケ』がある『イザリ』がある『出ベソ』がある。イヤハヤ、鼻持ちもならぬ哩、今拙者の前で讃美歌を唄つたのは『ナリン棒』のおまけに『メッカチ』のおまけに『ヤカン頭』の口が腐つて蛆が湧いて ゐようといふド乞食、第一四圍に旦那は拙者一人しか居ないのを知つて居乍ら『其處ら邊りのお旦那ア樣』ナンて鎌をかけるのが癪だ。それなら默つて行つて了へばいゝ譯だが、此の『出ベソ』の連中の對

聲色家の苦心談を聽く

何んの商賣でも其の道に依て他人の想像し難い苦心が有る。是は本鄕の酒場で湯島の粹街を流してる聲色屋と私との對話「どうだい大將の十八番を一つ聞きたいね」「いやどうもちや一つ大橋家をやりやせう」と尾上紋三郎の夢の市郎兵衛をやり出した。此人紋三郎は折紙付きださうだ。「よう上出來〱然し君は自分の好きな事をして金を取るんだから羨ましいね第一苦勞が無いだけいゝよ」「旦那御戲談でせう、是れで呑氣な樣ですが他人に云へない苦心が有るんですよ」「はあ御言葉だね、君の所謂苦心てのを是非承り度いね」「さう改まつて聞かれちや困りますがね私がこの商賣になつてつく〲嫌になつた事があるんですよね、旦那何の商賣でも其れで飯を食てゐるからにや其の道に掛けちや一ばしに成り度いのは人情でさあね私だつて御客からどんな役者の聲色を注文されても間誤付かずに立派に其の人そつくりてなのをやりたいと思つてゐますさあ、丁度去年の今頃でしたよ上野山下の三橋の角で御客から色々の注文が出た時、仁左衛門の師直に歌右衛門の内匠頭で松の間刄傷をやつた時でしたが仁左の聲色で鮒だ〱鮒武士だとあすこで女に好かれない聲を出しますあね、さうすると芝居でやれば内匠頭がさも口惜しい

手になりに來たのだから已むを得ない。コレも讀者の爲めと恩に被せて置く。

癪に觸ると言へば、餓鬼を無理に泣かせる事だ。『此通り何時までも泣きまアす』なんて、ピシヤ〱頭を叩いてゐるんだ。餓鬼も又餓鬼で、撲たれない前から泣いてケツカル、モウ蛆の手が來る頃だと思ふと『ソアー』と泣く癪に觸るが要領がいゝ。よく仕込んだものだ。一番、俺も、遺歴餓鬼を一匹買つて來て退屈したらピシヤ〱叩かうか。

そればかりぢアない。朝から飯を喰はぬとヌカシタ。時間は恰度正午だが、俺だつて未だ晝飯は喰はぬ。尤も奴は、朝飯も喰はぬとヌカすのだらう。が無論當にはならぬ。現に仲間の『カツタイ棒』は喰つてゐる糞掃除の杓子の柄が取れた樣な器へ、おシンコだとか豆だとか味噌汁だとか、魚のアラだとか又、麥飯だとか、粥だとか、コンニヤクだとかハスだとか、何もかもの貰ひ集めをグチヤ〱に入れて、ウス穢ねえ椀に盛り分けて、グニヤリ〱グチヤ〱と喰つてるぢアねえか、俺にも尠し喰はせねえかい。

最後に、大藏省のお旦那と言ひやアがつた。馬鹿にするねえ。何が大藏省だ。第一俺の前で、プスリツとやりアがつた。アノ『ブスリツ』タア何だ。何がプスリツでえ。忌々しい。ヘン。何が、ソノプスリツでえ。餘り癪だから屁のひりつこなら負けねえぞ、と俺も空き腹にイキンでボツボウプーーーンと幽靈ツ屁の、人魂つ屁つてやつをひつてやつた。餘り氣張つて、『ミ』を露み出した。紹のハミ出たのと違つて尻のまはり

思ひ入れをやりませう、あの幕ぢやあすこのきつかけが大事な處ですから、あれを聲色屋がやればやはり内匠頭の我慢に〱をしてゐる思ひ入れをしなければ芝居にならないでさあれ、然し聲色屋は顔を見せるんぢやない聲を聞かせるんだから、あの思ひ入れも聲で感じを出さなけりやなりませんから、仕方が無いフーンと云て暫く唸つて、それから『高野待てつと切り付けるんですが其のフーンと唸つた切り暫く腹の中で思ひ入れをしてゐた時御客樣から「おい聲色屋どうしたい後は絶句かとか停電かとか水を持て來てやらうか等と云はれたのですよ、私は其の時ばかしは情けなくて涙がこぼれましたよこつちぢや一生懸命に思ひ入れの感じを出してゐるのが、御客には下手な奴だ出來れえんだな新米だらう位に思はれたのですから、私の方の苦心なんざあ解て呉れえんでさあそれからは懲りて注文されても思ひ入れ澤山のものは皆いゝ處で、拔いてしまふ事に極めてしまひましたよだから私の聲色は商賣人に聞かせては物になつていませんよだけど素人向きで奴が當世ですから惡く云はれてもかまはず萬人受けの聲色の棒讀みとでも云ふのをやつてゐますがね苦勞の無い樣でこんな苦心は、御客さんにや解らない吾々の辛い事ですよ」と此の告白を聞いた私はやつぱりどんな商賣でも、他人に解らない苦勞があるものだとつく〲感じた話に身が入て、ふと氣が付いて周圍を見たら、散らばつてゐた客が皆自分を取巻いてゐた同朋町の見番へは藝者の出入りが繁しい最中だつた。

（柏家頓智坊）

が冷たい。

『オイつくな着くな穢え。汝口はうめえが、其樣な嘘にア乘られえぞ、見ろ、今グチヤ〱仲間の野郎が喰つてるなア、アリア何でえ』と一本突込むと、早速第二の讃美歌が始まる。

『アレはア貰ひ集めの雜炊でヱゲス。アナータのオー御口はア銀紙でヱ――ゲスカ、餘り美味いものぢア――ゲーセン、腹が空きヤア蝨でも蚤でもオ喰ひやす』かう言つて、一寸讃美歌を止め『のう、スカ公やい』とカツタイ棒の方を向くと、カツタイ棒も尻馬に乘つて『さうともオーさうともオー旦那さまやアお旦那アさま、嘔吐のやうな、飯でも喰つてりアこそ生きてゐまアす。何なら一膳さし上げませうか』と來た。誰が喰ふものか、口の周圍を見ろい。蛆蟲が齒の間からわきさうだ。

臟物と最後屁

『ゲロツゲロ〱ゲロツピー、ビチ〱ジヤー』嘔吐も下痢も一時に出るやうな氣持になつた。いや、な臭ひだ。大體、餓鬼の著物はアリア何だ。コールタールを塗つたやうで、馬鹿に惡臭え。猫の死骸が腐つたのを蛇が來て、臟腑を喰ひ破つた處へ、頭の崩れかゝつたド乞食が鼠色の褌を引づツて來て、臟物の上へひつくり返つて、グチヤリと頭を突つ込んだ拍子に、ブクブク、ジヨウとビチ糞を垂れ流したやうな臭ひだ

餓鬼もさうだが向ふ向きになつて、小便をジヤア／＼垂れてゐる婆ァの態見ろい。口をモグ／＼させやアがつて、何だかインキンでも噛るやうな口つぷりだ、其又隣りに坐つた、ヨイ／＼を見ろ、鼬の最後ッ屁を吸つたやうな青い顔をしてらア、扨は汝えオーダンだな、其又隣りのメチヤメチヤ、汝の尻を見ろ、膿がタラ／＼流れてらア加之その膿に血が混つてらア、その又隣りの水つぷくれ汝の面は、ガンモドキのやうだ。ジクジクしてらア。

今日は何ういふものか薄穢ねえ乞食の中でも、特にド穢ねえド乞食が揃つてゐるので胸糞が悪くなり、十錢銀貨を抛り出して現場を立去つた胸がムカ／＼する。書いてゐてさへムカ／＼する位ゐだから、讀者も定めしムカ／＼するだらう。此心持を比喩て見ようなら、品川の漁師部落へ行く、すると、四斗樽に魚の臟物を濫るゝばかりに入れて腐らせてある、半年以上も天日で沸かせたり冷したりしてあるので、ブク／＼泡が立つて、鼻がモゲるやうな臭氣がする。蛆がグジ／＼蠢動いてゐるやつをコツプで掬つて、グッと飲んだやうな心持だ、馬鈴薯をウンと喰つて表に出たが急に糞が出たくなつた。仕方が無いから横丁で尻を捲つてグジヤ／＼と羊羹を解かせたやうな、ボツボツと湯氣の立つやつを山盛垂れた。其處へ旦那と喧嘩して、素足で飛んで來た、美しいお妾が、白魚を並べたやうな可愛らしい足で、思はず此湯氣の立つ、ひり立て糞を、五重の塔のやうな、且、ヘルメット帽子のやうな糞の、先のトンがつた上から、ビチヤリッと踏んづけたやうな心持だ。指の股から蜜柑袋のやうな糞がズル／＼と漉されたやうだ何と穢く念が入つてるであらう。

青啖と豚の小便

『一トつや二タツウ三つや四つウ、にも足アらぬウ幼子がア、賽の河原アに集まりてヱーエ、西を向いては父戀しイ、東を向いては母戀しイ戀ひしイ戀しと泣く聲はアア此世で泣くとは事變り……』

一體、賽の河原ナンて有るのか無いのか知らぬが、谷中三崎町四番地の二號迄來ると、ゆくり無くも此の賽の河原に邂逅した。

河原は年齡三十四五歳の女、縞の木綿の綿入に紺股引、何が這入つてゐるのか大きな風呂敷包みを背負つて、鈴を振つてゐる。そして軒並にふるひ附きたいやうな聲で賽の河原を唸つてゐる。

一體何處まで行くのかと喰つ附いて行くと、初音町三丁目の方へ行く

河原はピタリと立止つた。そして四邊をキヨロ〳〵見廻した。何をするのかと思ふと、逸早く蹲踞んで、柿の喰べ殘しを拾つた。何するのかと、猶も念入に見てゐると、突如、泥だらけの柿に、カツと青啖を吐いた、そして中指と人差指とでヌルムル洗つてゐたが、間もなくムシヤムシヤと喰ひ始めた。青啖を牡蠣の酢浸と間違へて喰つた話もある。が、實に穢い事をするものだと思つた。

猶もついてゆくと、岡埜の別荘の前で、大分長い事、鈴を鳴らした。何でも五錢は貰つたらしい。次は、室田と云ふ家で芋を貰つた。貰ふと直ぐチヨコ〳〵と露次へ這入つた。そして芋を持つた儘クルリツと尻を捲つて、ギヤア〳〵始めた。「失敗たッ!!」と叫んだ。がもう遲い。芋を溝へ落つことした。豈夫こればかりはと思つてゐると、奴さん、平氣で拾つて、眞黒の泥のついた、且、啖や小便や齒糞や、犬の糞の解溶て流れる中へ落した芋を、尻つの邊りで拭いて、ムシヤ〳〵と喰ひ始めた。俺は豚の小便を頭から浴びたやうに慄然とした。

立ン坊が共用便所に墜落をして小間物屋に飛込み、おまんまを手摑みで喰つてるやうな氣持がした。

胞衣とおはぐろ溝

法光寺裏へ廻れば琴の主。美しい娘の居る日暮里渡邊町の通りの法光寺の山門に、毎夜乞食の野宿があるといふので見に行つた。處が、ソンナものは居ないといふので一寸落膽をしたが、何をと諏訪神社の方へ阪を上つた。夜道は暗い。拙者は、這麼事を考へた。若し此處へ乞食が現はれて、咽喉が乾いたと訴へた時、大學の肺療科から肺病患者の吐いた啖壺を持つて來てゴツクリゴツクリと飲ませたら何うであらう。更に空腹を訴へたなれば、三河島から犬の臓腑を貰つて來て喰はせたら何うであらう。更に眠いと言つたなれば、癩病患者の死體を山積した解剖室で、寢かせたら何うであらう。更に、顏が洗ひたいと言つたら嬰兒の死體を侵した、アルコールの老ねを持つて來て洗はせたら何うであらう。若し顏が拭きたいと言つたら、オハグロ溝に落ちてゐる胞衣を拾つて來て拭かせたら何うであらう更に、仕事がしたいと謂つたら一間四方の檜造りの室に入れて、眞つ裸にし、糞を丹念に破目板へ、ムラの無いやうに塗らせたら何うであらう這麼事を考へると、新年のお雜煮の餅が、大變美味しく喰べられる。

―(オシマヒ)―

娘行狀記

第二報　上野附近

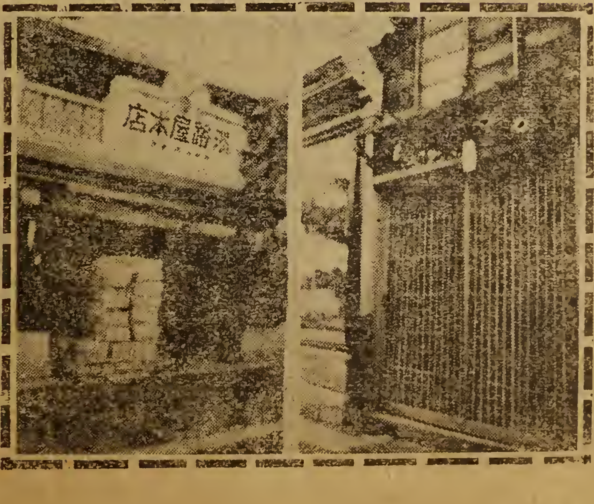
婦人記者　福光澪子

上野小町の靜野さん

ほつそりとしてほんとに上野小町といふ通り名に相應しい靜野さんのお宅は、この前御紹介した。豐田文子さんのすぐ御近所で御徒士町四丁目十七番地の田泉といふ下駄屋さんです。もう娘だなんていふ略號はなくて今は立派な御亭主さんのある御身です。丁度二十で瘠形な色白い優しさうな方です。上野小町の由來は、大正博覽會を初めとして上野で開かれて各種の博覽會に、お店の方でいろ〳〵の下駄を出品する時その會場に賣娘に出たからです。博覽會といふ人出の中に、目出つて美人ですから其處いらの鼻下連は俗に言ふ張つたのです。中でも當時下谷竹町の〇〇賣會の文雄さんといふ人の熱が一番高かつたさうでしたが、この春上野小町と名をとつた靜野さんにお氣に召したかとは存じませんが、お店で仕事をしてゐた職人がお婿さんに選ばれました。今はお店の帳場に初々しい丸髷姿を現はしてゐます。お妹さんらしい十七八の方が、今に第二世上野小町と言はれさうな、姉さんによく似た優しい顏をして時々内玄關から表通りを無心に眺めてゐらつしやいます。

酒井千代子さん

酒井千代子さんでは一寸知つてる方は少ないのです。堺千代子さんと書けばあゝあの金龍館のダンスのうまい女優かと思召すでせう。千代子さんのお宅は末廣町で堺幸といふ、江戸前のパリ〳〵のお料理の仕出し兼魚屋さんです。この江戸前の堺幸の愛娘千代子さんはまだ十七でせう。然し日本の踊りを識り、日本のトーダンスの神樣永井徳子に一番可愛がられて教へられたのですから、此の頃賣出しの高井ルビ子など



（靜野さんの家）右は内玄關 左は店です

よりずつと上手です。高田雅夫でも徳子の實弟の花井敏郎でも千代子さんの天才は認めてゐますそれに舞臺に熱心なと、よくよく顔の作りなどを獨りで工法されては先輩の室へ來て『先生これでは變でせうかしらん』と舞臺勞働の忙しい中に眞面目な研究を忘れないのは、萬年コーラスや成上と幹部や舞臺へ遊びに來て來るやうな俳優とはハッキリ馬鹿と利巧とが分れてゐます。此頃踊りが亂暴だなんて言ふ人がありますが、この夏あたりから大合同まで金龍館の興行師が千代子さんの大人氣なのを知つて一日十八回も踊らせたんですからいくら何だつてたまりません。それに未だ十七の少女がそんな酷い勞働過多ですもの、ほんとに興行師の頭は何で出來てゐるのでせうかしらん。ホ……議論になつて御免なさい。

右が下村八重子さん
左が妹志津子さん

　ほんとに千代子さんは現はれた天才です。たゞ鼻が惡いので聲が一寸變なのですが直きに全快して再び舞臺に現はれるでせう。妾の一大好きな革命兒小生夢坊氏は千代子さんの義理の兄さんです。千代子さんも必然その血を受けて一寸した細かい芝居の折りの姿や、衣裳の着付けなどは提灯記事で自惚れるやうな串の三文尻輕女優と黒白の違ひがあります。石田の雍ちやんとはほんたうの仲良し友達です。お父さんとも美しい愛情で結ばれて、俄か雨の時などお合羽と傘をお父さんが持つて樂屋へ迎ひに行きます。千代子さんはお父さんに其の日の芝居の出來などを話してはお父さんと御一處にお家に歸ります。やがて日本の舞踊界を背負つて立つ可き千代子さんの未來は何といふ大きな美しさではありませんか……。

（下村さん姉妹の家）

姉妹美人下村八重子さんと志津子さん

御徒士町の通りを歩く人はきつと有明堂（四丁目八番地）といふ繪葉書屋に二人の美しい娘さんのゐるのに氣が付くでせう。頰が丸々と食べたいやうにふつくらして女優髷に結つてゐる

方は姉の八重子さんで、日本髪で黒をつけてゐるのは妹の志津子さんです。

八重ちやんは今年二十で志いちやんは十六です。八重ちやんの顔は歌劇女優の安藤文子を美人にしたやうで、志いちやんは松木みどりに悪魔女優のセダバラを混ぜたやうな顔です。二人共活動が好きで志いちやんは市村座の芝居通で菊五郎や吉右衛門の大好きなことは言ふまでもありません。

八重ちやんの事を近所の方は女優だと言つてゐますがそれは大嘘で、お店に姿を見せない時はお家のお仕事を手傳つてゐられるのです。志いちんは大抵店番で、ひやかしのお客にも、買ひにくるお客にも親切に應待してゐます。貸本屋もやつてゐるので、志いちやんや八重ちやんに話がしたいばつかりに讀みたくもない本を借りに來る若い男が澤山あります。所や名前を聞かれると、わざ／＼名刺を出して置いて行きます。すると志いちんは、『口で言へばわかるのに嫌な人。妾こんな人大嫌ひ』と名刺を破いてしまひます。二人共ローマンスは澤山持つてゐる方です。八重ちやんは昔の大の田谷力三好きでしたが、田谷のウスッペラなアンペラが解つたと見えて此頃は田谷はけなしてしまひます。田谷の好きな時分は仁木みれ子さんと仲好しでしたが、あまりみれ子さんが不眞的なので絶交してしまひました。それからは、長谷川といふ二十五六の琵琶の上手な色男然とした人と御親密といふ話です。八重ちやんは知らなくとも機會さへあればとれらつてゐる人は數へて來たら何人になることでせうか店へすぐ坐りこんで話をしてゐる學生やら勤人やら役者やら商人やらいろ／＼な人が澤山ゐますが長くなるからやめませう。

志いちやんはどうしても十六とは思へない位よく發達してゐます。大抵日本髪結つて笑ふとすぐ靨が出來お酌みたいな感じの人です。はたの屋のお照さんに聞くと、志いちやんと仙臺ホテルのボーイさんは大變な仲良しださうです志いちやんはお世辭のいゝ人で表を通る顔知りの人などに、『あの今度異つた活動のブロマイド澤山來ましたから、お歸りにおよりなさい』など言つてゐます。歌劇俳優で女に人氣のある石田雍は、今評判の志いちやんの顔を廣小路の乗換へを應用して見に來ました。その時丁度八重ちやんもゐたので、『嫌れ。男の癖にお白粉をくつつけて、あたしは役者でございますつていふやうな顔をして、感じが悪いわれえ、、……』と石田が歸つてからけなしてゐました。それから松竹キネマの俳優も三四人隊を組んで來ますが、志いちやんや八重ちやんの男に肥えた眼にはみんなけなして飛ばされてしまひました。

志いちやんは一度神田の須田町通りの繪葉書屋さんに養女に行つていたのでしたが不縁でもどつて來ました。又二人のお母さんも小さい時去られて今のは二度目のお母さんです。それですから二人の仲のいゝことは若い戀人同士よりまだよくて、どんなことでも打明けあつてお互ひに助け合つてゐます。八重ちやんのいゝ人が來れば、志いちやんは粹をきかせて表へ出たり『姉ちやん妾が店にゐるから外へ行つてらつしやい』と耳打して姉を表へ出させてしまひます甘い語らひを終へて歸つて來た姉は『志いちや

ん有難う』と店をしめてからお湯の歸りにでもカフエーへ妹を連れて行つてやります。

この九月の初め突然二人の父の彌三郎は急病でこの世を去りました。兩親に去られた二人の淋しい冷たい心も知らずに、戀に餓ゑてゐる若い男達は相變らず店へ押しかけてゐます。直接干渉のなくなつた二人の身の上にどんな誘惑か知れません。此の間も夜池の端を志いちやんが色の白い優男と仲良さそうに語りながら闇路を歩いてゐました。二人共くだらない誘惑などにかかればどんな不幸に此後出會ふかも知れませんいやな噂さのある此の頃美しく澄んだ處女の瞳の手前を考へなければあなた方の一生はどんな破亂の起ることでせうか。

—(酒井千代子さんの舞臺姿)—

仁木みね子さん

眼が大きくて、見る人に仍つて愛ぐろしくもなつかしくも、物凄くも、又誘惑味にも富んでゐて、鼻は少し低い方で、顔は花王石鹸形の面長で、所謂仁木みれ子式とでもいふ妙な女髪式クシヤ〳〵髷に結つて、いつも木綿の質相な着物を體裁よく着て、メリンス帶を胸の上にしめて男のする革のバンドを帶止めに使つて、活潑に歩いてゐるのは上野近邊で有名なラシヤメンおみれと異名のある仁木みれ子さんです。

—(千代子さんの家)—

みれ子さんは什麼男でも從はせてしまふのですから、平塚雷鳥よりはずつと偉いんだらうと思ひます。丁度上野黒門町を交番について横に入つた所にみれ子さんのお家はあります。黒門町の十八番地で彌太郎はお父さんでお母さんは永峯といふ姓で産婆さんです。兄さんのまあちやんは凄く強いんで一人の姉さんは今年二十七八で嫁入先からもどつて來たんです。又一人の美しい十七になる妹さんがあります。兄姉妹三人がどう一人の妹を仕込むか見物です。

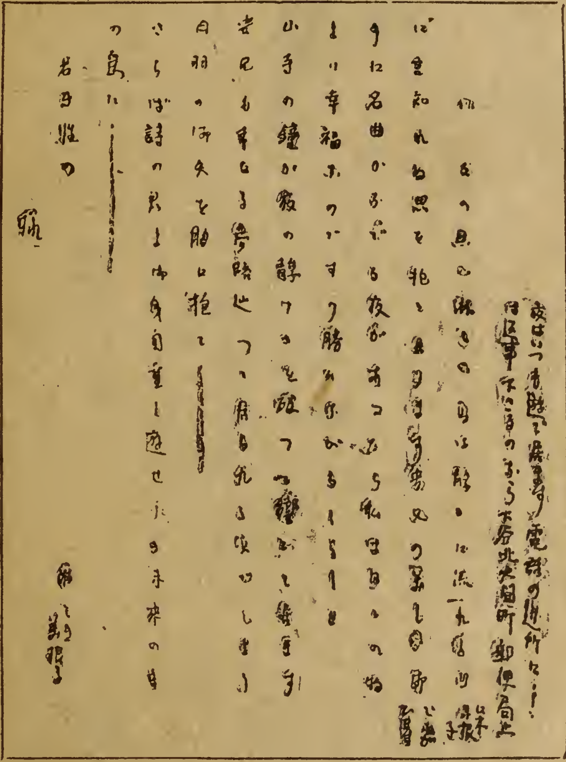
みれ子さんは三年ばかり前は遞信省爲替貯金局の女事務員でした。丁度オペラが大流行の折

柄で、みれ子さんはオペラにすつかり無中になつて貯金局をやめてしまひました。そして毎日淺草のペラゴロとして、淺草をブラついてゐました、夏の夜など、兩腕をすつかりまくつて、『長い袂を肩にかけ着物の袂をもつて『一枚看板を汗臭くしては合はないんですものといひながら太い足を出したまゝぞろ〳〵淺草をお仲間のペラゴロ達とブラついてゐました。

又まあちやんの友達の琵琶會などへ行つて『ヨイショ』なんて懸聲をしては、壇上の先生や見物を驚ろかしてしまひます。

このみれ子さんに一人の戀人があります。加藤さんと言つて、二十二位のお目出度い人です。御徒士町の繪葉書屋を待合所にして毎晩のやうに其處で密會をやりました。加藤が約束の時間より少しでも遅れると『何にグヅ〳〵してゐたの』なんて男をやつつけてしまひます。その加藤は顔にクリームを付け粉白粉をなすつて、みれ子さんの御氣をとつてゐました。二人は四ケ月位すつかり夫婦氣取りでゐましたが、六月頃から鶴見花月園のミルクホールにみれ子が務めることになつたのでウヤ〳〵に二人は別れたが、みれ子さんは其ミルクホールも二日位務めると、翌日は腹痛を口實に休んではサボつてゐましたが、何時の間にかやめてしまひました。

(みれ子さんの手紙)



此の頃は毎晩お家の近所でメートルを上げてゐられるやうです時々角刈にした商人風の人と睦しさうに手を取つて、池の端の近所を散歩してゐられます。あまり何時までもブラ〳〵してゐると、一生の御損ですよ。

此外、廣小路と山下の中頃の横町を入つた上野町二丁目八番池の瀧野さんといふ蓄音器屋にオペラ女優式に愛嬌よく音譜を賣つてる二人の娘さんや、五軒町の十九番地煙草屋の前田さんのよし子さんや女事務員さんの物凄いことや上野一と言はれた莫連女の行狀記など書きたいのですが都合で上野近邊はこれで打切りにいたします。(續く)

―次はどつちの方面へ?―

……(大島土産ばなし)……

俵藤太秀郷の子孫俵貞子さん

へ私しや大島御神火育ち
　胸に煙がなア絶えやせぬよう―

大島節の名所、波浮港で有名な新しい女？俵貞子さんは、遠くその祖先に、百足退治の俵藤太秀郷を頂いてゐる。血統正しい家のお孃さんです。お宅は波浮港村から程近い差木地村にあります。本年十八歳のスコブル付きの美人です。今は御亭主があつてなか／＼仲よく暮して居ますが、この御亭主を得るまでに喜劇が澤山にありました。その内の一二を御紹介すれば……。

大島は女の多い、美人の多い土地でしたが、貞子さん程の美人はありませんから、その村は勿論隣村までひゞき渡つてゐました。第一回の戀物語は、彼女が學校にゐた時分（代用教員をしてゐた時分）その學校に奉職してゐた二人の男教員の間に大決戰が開始され、つひには二人共辭職願を出すに至つた。それが元で村長や學校の名譽職なぞが調停の勞を取ると云ふ前代未聞の珍事件が突發した。その結果貞子は學校を辭した、これを聞き知つた父親の怒は又非常なもので隨分喜劇が行なはれたとか。

それをラブロマンスの口開けにして行きあたりばつたりロマンスを造り出してゐたが、最近彼女は結婚した、その相手も相當の道樂者とて結婚の前夜お茶屋でメートルが上つて宿つて來た。それを聞いた貞子は結婚當夜姿を消して化舞つた。サアかうなると結婚式もへつたくれもあつたものぢやない。當の御本人を探さなくてはならないと八方に手分けをして一軒々々貞子の行きさうな宅を探したが見付からなかつた。

父親は父親で提灯をつけて隣村までさがしに出掛けた。これまでもこんな事は始終あつたが、こんどは時が惡い。もし色男と心中をするやうな事があつてはと云ふ心配があるので一層大騷ぎをした處が御本尊は隣村の親類の宅にチョコンと坐り込んで話に花を咲かしてゐた。それは御亭主となるべき人に對して、宿つて來たと云ふ反感から、暗い道をマッチをすり／＼やつて來たと話が解つたが、承知の出來ないのは御亭主である。一緒になつてからも出來るだけ遊び廻つた。それを見た貞子は、いたゝまれずよく料理屋（波浮や差木地には待合は元より遊び場所がないので、若い人達は料理屋へあがつて酌婦を相手に宿つて來るのである）に押かけて行つて、昔とつたきねづかを振り廻はし道論でとき伏せ、首ッタマになはをつけてひつぱつて來る。かうした姿を二度や三度見た事のない人はない位の有名な話。また御亭主が夜更に一軒づゝ『うちの貞はお邪魔にあがつてはゐないでせうか？』と村中はおろか隣村へまでも探してあるく御亭主のあはれな姿も有名な話。大島にはあまりこの種の話がないので、大分やかましい茶うけ話となつてゐる。

――（覆面の人）――

又五郎に戀した濱田靜江

靜江は六區石新道のよろづやの愛娘で、小間物屋の靜江さんと云へば、淺草に平常出入りして居る若い男は、大概御存知である程に彼女は六區での評判娘である松崎天民さんは彼女の美を白萩の雨にしをれた風情があると言つたが彼女程秋に適はしい姿をもつた女はあまりあるまい。力なげな弱弱しい瞳、大理石の頰、單調な線の肩、總てが淡く暮れて行く秋を思はせる。彫刻的で又何處かに纎美がある。であるから靜江は形象を眺めて味はふ女で、肉の快味を溺愛する男の抱擁には餘りに弱い腕である。

冷たい魅力をもつ瞳に、水を浴びせられたやうにゾッとして立止つたら、深草の少將も斯くほどにはと心中立する男は星の數程に在つた。然し靜江には、夫れは皆な木偶としか思へなかつた。そして彼女の瞳には、丹次郎の樣な優男である公園劇場の中村又五郎の姿が平常も消え去る事は無かつたのである。

輪を太く紫三郎好みに結び、後毛を二三本、お太鼓に締めた妹脊模樣の帶姿の靜江は、公園劇場の女給連は唯知らぬ者もない程に、戀に捕はれた娘として噂された。荒んだ女給の心にも、戀の美しさを感じせしむる位に彼女は棧敷に白い頸と頰を毎夜見せたものだ。

舞臺はクッキリと浮んでる又五郎の顏を凝視むる乙女、夫れは全く戀の繪卷物であつた。

然し、それも幸か不幸か又五郎が此の春の死に依つて靜江は失戀と云ふまことに果敢ないものとなつて了つた。

馬道の又五郎の家から昇ぎ出された冷い骸――靜江には其の日のことがどうしても忘れられなかつたとの事である。

夫れから後暫くは、店頭に客を待つ靜江が頤を紫地の襟に埋めて、くの字形に身體を屈めて、强い哀愁に沈んで居るのは、いぢらしい程で長唄仲間の娘達も『男に惚れ抜くと恐ろしいものネー』と密語合ふ程であつた。

それから間もなく靜

淺草の女 □□□□□ その二

江の悩む姿は淺草から煙のやうに消えて了つたが、噂に依れば洲崎に近い叔母に當る料理店に預けられたとのことである。

美濃屋のお徳

　不幸者には誰がした、岡惚れと云ふ仲人や、枕の科ではないかいな、チチチン、ツンと圓八の鳥邊山を口三味線で謡ふお徳ちやんはキネマ倶樂部の裏通り、觀音劇場の横町の射的屋、美濃屋の看板娘である。

　五六年前に潰滅された射的屋も千束の銘酒店が、一頃掃蕩された爲、安逸を貪つてゐた、新聞縦覽所も仕樣事なしに、矢張り女を餌とする射的屋に早變りしたのが現在の如き盛んなる復活を見るに至つた最初である。

　美濃屋も其の以前は、彌三を極め込んで、自分よがりの粋な咽喉を聽かせ乍ら、千束町を素見して居る哥兄連を常得意として居た。おでんやで、淫蕩的な眼、男をして好色觀念を起させる口唇を持つおとくは、通つて來る色餓鬼連で可成り繁昌をして居たが、銘酒店の狩立てと共に、矢張り同じく現在の商賣に變つたのではある。

　然し、看板娘に來る客は（イヨーお見事ッ）とお徳から讃辭の一つも浴せられたさに、客の絶間ないのは昔より以上で日に六七圓の射的料は容易く上る程の御全盛、これも誰ゆゑお徳ゆゑとあつて、近所でも觀音劇場前は廣養軒のおきぬと共に福娘の噂は觀音樣の屋根より高い、それ丈に亦、我儘も仕度い三昧で　二十五歳の年増の部類にも拘らず、未だにこれと云ふ土器を破るやうな男は居ず、彼方此方と浮名を流して居ると雀共の噂である。所でお徳の過去に周はる暗い影を一寸許りお知らせすれば、十七の戀知る頃金龍館の女給となつて（此方へ入らつしやい──）と、無意識に男の手を引く内に、何時の間にか異性の血管を流るゝ紅い血汐に憧憬れ、其の頃同館の五九郎一座に居た人氣俳優ハートの五蝶と戀に落ちた。

　男女の仲は可成永いものであつて、お徳が御園座へ住換へ、十二階の札賣に移つても續いた。春秋六年、お徳の性格は淺草の女としては餘程洗練されて來た。而して何方から捨てたか、五蝶と離れ、今や流れ次第の風まかせ、次に當る矢は何人か？

──（次は誰？）──

怪僧河合大示傳

富山縣に埋もれ居る
世界的大學者

貞子姫を說誡す

越中の國は東礪波郡、神祕境五箇山下に戶數八百戶の城端町といふ古い街がある。高岡市から私設でボロイ中越鐵道に乘ると終點の驛である日本派の俳人で富豪である野村滿花城や松田菊江や城月等と名乘る通人が居るので其の土地のことを一名紫の町と云はれてゐる。それは詩的な景色に包れてゐるとを讃へたのだ。

それと大谷派別格別院と大刀山闘が廣告した吾妻樓のラヂユム溫泉と藝者の美しいのとが土地の名を高めたものだ。別院は大厦高樓甍を並べた大寺院で、高岡新報主筆井上忠雄君等の『越中誌』を飾るものだが、彼の新聞雜誌の艷材になつた九條公爵家の貞子姫が降嫁して死に給ふた名譽（？）の有る寺である。

ラヂユーム溫泉は政友會の老將上野安太郎君の膽入りで角力上りの黑川某が經營して居る。夫から藝者屋には桐木屋、神田樓などがあり神田樓の花子なんていふ妓は（金澤西廓第一等の美妓美嘉樓の紋彌よりは一段下位だが）東京の柳橋新橋邊りへツラを出しても負けないであらう。上野の音樂學校を卒業したヴアイオリンの秀才荒木某が熱愛の女で浮名を庄川の水に流したものだ。

金澤の紋彌姐さんでも然うだが、此の花子でも、都のコセ〳〵した風に吹きさらされて居ない丈けに淸淨の香が匂ふてゐて氣持ちが好い。男をダマすことを目的としてゐないからね。

是れでザツと街の紹介は終んだがその別院の下寺で淨念寺と號するのが溫泉の崖上にある、警察署と正面に睨みツこをして樹を切つた赤裸の地內を見せてゐるところが面白い。淨念寺の住職は哲學博士河合大示といふ大入道で惡僧の面玉をしてゐるが、根は愉快な男で越中第一流の新人なんだ。

妻君は金澤生れの若くして美くしい女で。河合は今の東洋大學前身哲

（河合大示の宣傳廣告です）

いよいよ十日になります　心しづかに氣さわやかにまことに　神明佛陀の威光ある　日本男子相互の顔立に御自分始め　御近隣さそわれて　清淨一票に墨つけられなば　無限の幸福ちまくだること　前知いたします

言行。忠信!!　表裏。相應。
人能ク自ッ度レ　轉タ相拯濟ヘ

富山縣衆議院議員選擧第五區內

カワイタイシ

學館第一期の卒業生で、井上圓了事幽靈博士の高足で、本屋の主人高島米峯君や代議士田中善立君やの同窓で而かも先輩格で、カントの哲學では清澤滿光先生に流れを汲む世界的の大家である。が根が學者だけに變物に出來上つて居るところもあり自惚が人一倍に強くて恁うと云ひ出したら決して後へ引かぬ。だから町內でも僧侶仲間でも面倒がつて成可く相手にしないやうにしてゐる。

　京都の本願寺に彼の怪傑石井春臺と共に務めて居た事もあつたが自我を張り通したので結極は學問は、敬意を表され乍らもお拂ひ箱になつたといふことだ。城端へ歸つてからも、貞子姬が浮氣をしたとか寺を汚したとかいふので大示坊は大刀を突きつけて說誡したものだ。が、畏き姬に對して失禮な振前だとか講中から猜まれ騷がれて遂ひに別院をも追はれたのだ。大示坊は超然と大笑して『蟲けら共に何が解るものかイ』と云つては酒を飲んで居る。酒の好きな事と云つたら劉伯に優る程だ。書院に迄で酒樽が轉つてゐる。

珍々妙々の立候補

　大示坊は今年の總選擧を加へて三回、東礪西礪婦負三郡から代議士の候補者として自稱の名乘りを上げたが何時も落選に定つて居る。信用の

無い土地から當選する理が無いのに得意の氣持ちで出馬するのだから面黒い、而も、その度に各所で獨演説を行る。言論戰の問題にならない頃から、劇場だの寺だのを開放して堂々たる理論を吐露したものだ。

その又宣言ビラが一風變つてゐて痛快だ。その一枚を左に寫してお目に掛けよう。大正九年四月に撒散した十萬枚の宣傳廣告郵便である。

今は第一方面に進行

◎大正四年以來選擧界救濟に罷出候處不幸にも皆樣の御蔭に由り分外の不成績を得申し候段是全く爲國家德敎遺憾の至りに候就ては今年も相續きて出馬候◎政見又は選擧の辭柄につき御不審の廉は郵税先拂にて御尋ね被下候はば速かに答辯敎示申上候◎本縣内に初て普通選擧を云ひ出したのは恐れ乍ら私に御座候

赤心

◎帝王の神聖を尊重!同胞の康福を祈ります
◎驕奢をさけ貧弱の味方するものです
◎先覺を敬い愚劣に敎ふるものです
◎德敎の根本義に據り民意の徹底に盡します
◎冷評惡罵來らば直に返上します

最近の急政務

◎選擧法を改正し普通選擧の實施

神主の娘と外國士官の戀

浦鹽赤十字病院へ

群馬縣群馬郡倉賀野町の神職、高木定交氏の二女に、むつ子(二十九)と云ふ婦人が居る。此のむつ子は、去る八月新婚旅行を兼て遠く萬里の波濤を越えて、大戰絶の日本人として、チエツク國に一番入りをした婦人でそれには實に優しい日本婦人の眞情を遺憾なく露はした、ローマンスの美譚があるが、其の端緒は斯うである。

日本軍が曩に過激派と戰ふ爲めに西伯利に派遣されたが、當時日本赤十字社でも、別に救護班を送ることになつた。其の際むつ子も群馬支部から選拔されて、浦鹽に趣いて勤務を命ぜられたが、同地の戰時病院には多くの我が傷病兵と、故國復興の爲めに暴戾な過激派と戰つて、負傷したチエツク兵とが收容されて、殆んど滿員であつた。處が是等の數多い傷病兵の中に、チエツク國の中尉でカミユーロ、ロヂカルと呼ぶ、一人の若い青年士官が居た。同國のモラブイヤ州のウエケカロル、ウイツチと稱する山間の一小都會に生れた青年で、父は土地で小學敎員を奉職して居るが、その祖先は伊太利の男爵家から、出た由緒正しい家柄である。彼は鄕里で中學校を卒業してから暫く父と共に小學校で敎鞭を取つて居たが、間もなく歐洲戰亂が勃發したので、急遽士官學校に入學して卒業後少尉として、ガリシヤの戰線に立つて奮戰したが敵彈の爲めに負傷した。然し全治後再び出征し中尉に昇進したけれ共、ガリシヤ附近で遂ひに露軍の捕虜となり、其の後チエツク國が獨立の際に從軍して、波蘭の戰線で獨軍と幾度か戰つて愈よ本國に凱旋する爲めに、西伯利を

□□□・カ・ロ中尉むつ子に惚れる

□□□戀成つてチエツク國に一番入り

◎選擧法第十三條及治安警察法第五條第十七條撤癈
◎民力調査、即ち國勢調査ノ
◎我國民性に順應したる宗教法制定
◎何人に投票て宜しきか迷ふ御方は私に一票を投ぜらるゝは國憲を重んじ國法に順ふ第一歩です、人道正義の第一着です、陋習を破る模範です現在將來の安心立命です。

自家實行開始

ざつと以上のやうな珍々妙々の名文句を印刷にして北國人士の膽を寒からしめたものだ。而かも國勢調査なんかはいち早く唱へてゐる。更に面白いのは左の廣告だ。恐らく斯如き候補自選の廣告といふものは天下に餘り有るまいと思ふ。寫眞版にして掲載して下さい。本人は什れだけ感謝するかわからない。落選した上は最う是れでコリ〳〵だらうと思ふと、什うして〳〵元氣なもので、次回には第四回目の名乘りを上げるのだと云ふ。（をはり）

—〔夢法師〕—

經由引揚の途中に、又もや過激派と烏蘇里に交戰して重傷を負ひ、浦潮の日本赤十字病院に收容されたのであるが、時恰かも前記のむつ子が中尉の看護に當つたのであつた。

二人の戀は成る

中尉は斯くて強度の肺炎を併發し、四十度からの高熱に冒され、彼の昂奮せる唇からは、只數項の囈言が斷續的に洩れる許りで、哀れ到底助かるべき見込みもないと係りの醫官は何れも匙を投げて仕舞つた。然し何うかして助けてやり度いとは、其の看護に從事してゐるむつ子の願ひであつたのは當然で、彼女は其の爲めには約四箇月以上も、寢食を忘れて熱誠に何呉れとなく看護に盡した其の結果周圍の人々も驚きの眼を瞠る樣に、さしも重態であつた中尉の病氣は、日一日と恰かも一枚宛紙をはぐやうに快くなつたのである。かくて中尉は遂ひに退院するに至つたが、夫れ以來彼はむつ子を、命の恩人救ひの女神よと敬慕し、豐かな成熟しきつた肉體を持つむつ子は、斯くていつしか若い女の通有性である所の感受性が鋭くなり、兎角有り勝ちなこと乍ら、二人の胸には青春の血潮が高鳴つて、何時しか強烈な戀に落ちて行つたのである。むつ子は所屬の救護班が内地に歸還すると共に郷里に引揚げて、桐生町の實兄の許に寄寓した。

一方中尉は、強ひて日本軍需品供給部附になり渡來し、正式にむつ子と、兄の高木醫院で日本式の華燭の式を擧げ、彼等は夫婦連れで遠くチェック國に歸つた。然し中尉は直に日本政府へ歸化の手續をし再び日本へ歸り終生東京で送るさうである。（完）

—（チェック士官さん達）—

底に底ある　屑屋さんの打明け話

屑屋さん儲かるかい

記者『屑屋さん儲かるかい』屑屋『不景氣になつてからズツと暇です』記『だつて、不景氣になりア生活に困る。困るから拂ひものが出る其處で屑屋さん當然忙がしい筈ぢアないか』屑『處が正反對でさア。景氣がいゝと何でも新調なさる。其處で古いやつはドシ〳〵拂下て了う。從て屑屋も忙しんでさア』記『ハヽア成程處で何處も彼處も拂ひ下げちア買ひ手が無くて困るだらう』屑『冗談でせう。景氣が好きア何道具でも値が出まさア。だからソノ中產階級等で餘り景氣のよくない、其癖成金の餘波を受けて左程景氣の惡くないと言つた人がドシ〳〵中古物を買ひますよ』

屑屋さん咳一咳して語る。

『上景氣の頃は、立場へ拂下げ物を賣り込まなくつても仲間中で取引が丁と出來たものでさアそりア屑屋々々と澤山さうに仰しやつても却々馬鹿に出來ないものですよ。一日貴下五十圓百圓といふ商賣をした事もあります。其上拂ひ下げ品が上物だ。金物でも値がいゝ火鉢だつて、鼠入らずだつて、又本箱だつて、机だつて却々上物です。それも値をよく買へと強要はしません。何しろ金が唸つてゐて、そして新調した後の拂ひ下げ品だ。實に切れつ離れがいゝ、殆んど屑屋の附け値で拂ひ下げて呉れる。扨持つて歸ると、仲間の古道具屋でも手を受けて待つてゐる。ズブで賣つても倍位ゐに賣れる。道具屋だつてそいつを持つて歸つて、尠し手入をすりア今は物が上つてゐますからつて七割や八割の口錢で賣る。客に依つちア十五割廿割で賣れます』記者『近頃は何うだい』屑『左樣年末は多少拂ひ下げ物も出ますが種は惡い。物が惡きア惡いで、モツト値よく買へ買はなきア他の屑屋に賣つて了うと來る。物がよきアいゝでベラ棒な値を吹く。尤も買つた當時は高くとも今日では餘程下つてゐますからなア。大抵の處で折合ふのですが、ソンナ日に限つて損ですよ。』記者『一體何が一番儲かるネ。まア上物ですねえ。造作、簞笥、長持、鏡臺、茶簞笥と言つたやうなものですね。』記『古本は何うだい』屑『駄目です。他の物は大抵客筋より屑屋の方が玄人ですが本ばかりは解りませんね。そしてソンナいゝ本は滅多に賣りません。まア精々古雜誌。古新聞なンかですが、これも大概相場が確つて居りますので、儲かりません。』記『うきよは何うだい』屑『雜誌のうきよでせう。アレは買つても直ぐ賣れますからようござんす』記『ドレいゝ本を見るかな』屑『見て下さい。さう言へば何ですよ。仲間で巧みに客人に化けて、古道具古本ばかりを漁りに來るのがあります。却々店に据つてゐても油斷が出來ません。家内なんか時

（屑い屑い！屑のおたまりはありませんか）——

時此手に引つかゝつて、大したものを捨値で持つて行かれる事がありますだからいゝと思つたものは滅多に外へは出しませんが、その代り時々詰らないものを大事さうに藏て置く事もあります。』

成程ボロイ商賣だネ

記『屑屋さんでもかうして片手間に店を出すにア相當資本が要るだらう』屑『イヤ一文も要りません。そりア屑屋の足を洗つて古道具專門となりア別ですが、屑屋をやつてゐる中ア何に要りません。尤も資本を寢かせる虞れはありますが、これは何商賣でも同じ事、屑屋は雜作が要らぬ。買つて來た道具を積み重ねて置けばいゝ。お櫃でも茶碗でも、茶箪笥でも、鍋でもお釜でも、世帶道具一式は賣り物を使ふのですから便利でさア』記『それでも資本は要つたらう』屑『一厘も要らず、私が始めて屑屋になつた時は三文も持たなかつた。三日ばかり見習に附いて行つた時辨當代は要つたが、何ですよ一に二を加へて三、三に四を加へて五、といふ調子で一生懸命に働いたお庇で、此店の品物は皆出て來たのです、まア五年ばかりの間にお庇で小さな專門の道具屋を始める位ゐの金は溜りました』記『成程屑屋といふ商賣はボロイ商賣だネ』屑『馬鹿にしちア不可ません。屑屋がボロきア

大東京に化物騷ぎ

（柏家頓智坊）

九月七日の各新聞に下澁谷の蟇ケ池に化物が出ると眞らしく書き立てたので、其れからは附近は祭りの樣な人出で、警官が提灯を振り廻して物々しい警戒に騷ぎは益々大きくなつた。

化物騷ぎの起り

天現寺の車庫からゑびすへ行く途中の右の方を見ると、一見水溜りの樣な池がある其の淵は柵もしないで雜草の茂りはうだいなので、夜は化物でも出さうに思ふが、晝は一町と隔ての無い所に家があるので。子供が、いゝ遊び場にしてゐる。又中には水が有るから魚が居るんだらうなんて釣り竿を下ろして欠伸をしてゐる樣な人もあるまあ都人士の息吐き所とでも云ふのが此の蟇ケ池だ。化物の起りは終電車の運轉手が池の中からブー〳〵と異樣な啼き聲を聞いたと云ふので、其の後私も聞いた俺も聞いた、と云ふ人が出て來てたうとう新聞に迄出る大騷ぎになつたのだ。

實地見聞

正體を見とゞける積りで澁谷の友人の宅へ泊り掛けで出かけ、啼き聲の聞える二時前に池へ行て見た。先づ驚いたのは先口がもう大勢來てゐて提灯を持つた人、カンテラ懷中、電氣等それ〴〵用意して、角力でも見る樣に池の周圍を取卷いて、今か〳〵と耳をすまして待つてゐる。呑氣な連中がこんなにあらうとは思はなかつたいくら待ても聞えないので、一人の老爺をつかまへて「どうですもう聞えさうなものですね」と聞けば「昨夜は二時半頃でしたよ。底力のある音でブー〳〵とまるで自働車のラッパの樣なのが聞えましたよ」

聞えた怪音

世にボロくない商賣はありませんよ努力でサア。仲間にも隨分いろんな人間がありますが先づ金の有てる者はありますまい。それは商賣を怠けるのと、儲かれば儲かるで稼業を休む。飮む遊ぶといふ風で、雨が三日も續きア困る手輩が大勢ゐますよ。屑屋十年やつて一文なしの人間の方が多い位ゐです、まア尠し考へて眞面目にやりア見得を構はない商賣だけに樂にある樂な商賣です』記『嫌な買い物があるだらうネ』屑『ありますね、腰卷の古いのだとか、褌だとか』記『何處で賣るネ』屑『何處でだつて賣りますよ、山の手の若奥樣、又は女中さんなんかに多でざんすネ』記者『そんなものを何うするネ』屑『酷いのは立場へ賣つて了ひますし物になるやつア此通店へブラ下げて置きますよ』記『誰が買ふんだい』屑『まア裏店の酷い細民が買ひます

いくら大勢居ても、さすがに夜中の二時と云へば寂くはなるしいやに心細くなる。邊りの草がさゝゝと音がして、時々溫暖い風の吹くのも殘暑の氣分だ、上を見たら廿六夜の月が今化物が出るぞてな顏して我々を見下ろしてゐる。思はずぞーとした時だつた。池の奥の下の方からブー〳〵と異樣な音が響いた。皆はすつかり靜まつたので、いやに其の音が腹に響いた。成程此れは聞えたわいと、約卅分程耳をすましてゐたが其の後は聞えなかつたもう化物を確めたら用はないと、友人の宅へ引返したら三時十五分過ぎだつた。

化物の正體

それから歸てよく考へたら、どうも馬鹿らしくなつた。今から十年程前にも吉原土手を三の輪の方へ行く途中に無縁寺がある吉原の女郎が死ぬと此の寺へ葬るのだが其の寺からやはり夜中の二時頃になるとかすかな聲で女のすゝり泣きが聞える、さあ化物のしわざだとやはり今度の蟇ケ池の樣な騷ぎがあつた。其の時も相當の專門家が出張して晩三掛て正體を確めた事があつた。其れもやはり女のすゝり泣きが確に聞えたのだが、段々探たら三の輪へ通じる水道の鐵管が此の寺の少し先きで曲つてゐて、其の曲り角へ來ると中の水が管へ勢ひよくぶつかつてざあと流れて行く、其のぶつかる時の音が夜中に邊りが靜まるので、耳をすますとかすかに聞えるのであつたこんな事のあつたのを知てゐる。自分は、つまり此んな事だらうと、化物より東京人士の物見高いのにあきれた。其の後の新聞に二人で探したら何年かの甲羅を經た五色の蟇が此の怪物の正體だと出てゐたので、隨て昨今は騷ぎもどうやら下火になつた……亦化物？……亦其の後の新聞には本所で古井戸から火の玉が出ると出てゐた、それが又蟇ケ池の向ふを張て大評判になつた。此れらの化物騷ぎを眞に受けて、それも田舍の田吾作か何かなら兎も角も卑くも大東京に住居する頭の進んだ人が大騷ぎをやるに至つては、日本の前途も思ひやられると云ひ度くなる。

ねえ、それから、萬年町始め中以下の露店へ賣り捌きます』記『文等は出ないかネ』屑『素人筋にア餘りありませんが、色町には隨分出ますねえ。そりア、面白いのがありますよ。併し大抵はばら〳〵に千切つたり破つたりしてありますので、つぎ合はせて見ると隨分エヘ、妙な祕密も露見しますよエヘヽ』記『ヤな笑ひ方をするネエ、未だドンナものがある』屑『穢い紙を賣りますよ、併し其れが却々値があるので、吉原、洲崎、新宿等の各遊廓を始め、待合等では皆、それ專門の屑屋があつて、毎日若くは隔日にそればかりを買ひ集めて居ます』記『成程馬鹿に出來ないネ』

珍談は無いかい

記『何か珍談は無いかい』屑『有りますね』記『秀逸を一トつ承らう

ぢアないか』屑『さうですねえ神田東紅梅町の丸茂商會といふ萬年筆製造工場の露次で、組打をやつたのが此疵です酷いもので、今以て癒りませんよ』記『何をやつたんだい』屑『何アにネ、屑拾ひと間違られたんでさア……私だつて、車を細い露次に引つ張り込む譯にアゆきませんから鐵砲笊を引つ擔いで驀然に這入つて行きますと、恰度荷作りをしてゐた、小僧が「這入つちア不可ん」と言ふのです。「不可んと言つたつてお前の家へ行くのぢアない、奥の家へ行くだ」と遣りますと「奥でも不可ん、第一入口に屑拾ひ入るべからずと書いてある」ときたものです私しア屑拾いぢア無いから、さう言ひましたよ「俺は屑拾いぢアねえ、屑屋だ」と、すると小僧奴「ドツチだつて同じ事だい」と吐す。「同じ事ぢアない」「イヤ同じ事だ」とやつてゐます中に奥から何だ何だつて大勢で飛出して來やアがつて此通り怪我をする程大立廻りをやつた譯です。結局譯が解つて、丸茂の主人も同情して呉れましたが、實際アンナ癪に觸つた事はありません』記『それつ切りかい』屑『未だあります。新米の頃に、夕立に逢つて屑をまるつきり濡らした事があります』記『もつと變つた珍談は無いかい』屑『左樣ですネ、ウンゝ有ります有ります。本郷の西片町だ番號は忘れましたが確か十二番地か十三番地だつたと思ひます例の通り流して行きますと、突然屑屋々々つて呼込むのです。で、返事をして這入つて行きますと、熊のやうな顏をした書生が一人ゐてから言ふのです。「オイ屑屋、お前忙しいか」と。で「エヽ忙しう御座います」と言いますと、「ソうか忙がしくなきア尠し儲けさしてやらうと思つたがまあ止さう」と言ふのです。何だか氣になりますから「旦那、一トつ賻らないで儲けさせて下さい」と賴みますと「さうか賴むならいゝお前車を持つてるだらう、これを本郷曙町の瓦斯會社の併びの露次で久岡とか久田とかいふ家へ運んで呉れ、其代り、駄賃は遣らぬが造作を拂ひ下げでやる」と言ふのです。何しろ金になる事ですから承知の助で運搬し、約束通り、棚だとか、襖だとかを買ひました』記『何だか面白くも何とも無いぢアないか』屑『處がそいつが大變なのです、本富士警察から間もなく喚出しがあつたので、不思議に思ひ乍ら呼出されて行きますと、當の荒くれ書生が來てゐるのです。後で聞けば、家賃を四箇月も踏み倒した上家主所有の雜作を賣つて逃げたんです。――と語つた屑屋は谷中初音町安八百屋附近に居る。(完)

淺草公園を歩くこと

記者二人

曲馬團の悲哀

今日のよき日は十一月三日、明治神宮鎭座祭の三日目、汀君は都合があつて新入社の澪子さんと淺草へ行く。と書いて了へば二行か三行だけれど、實際は難行苦行でしたよ、何しろ西も東も人の山、いづれ劣らぬ人の波なんですからね、電車攻撃は既に本誌に掲載しましたから止めて、雷門、此れから中が東京唯一の歡樂境ださうでございます。

東京一と云ふ事は大抵の場合日本一になるんでせうけど、新世界を持ちそれより何より電車が終夜運轉するさうな大阪を、第二とすることは吾々東京兒として口惜しいが出來ません。此所は不斷に動いて居ると人は云ひます。然し動いてるだけでは困ります。進まなくちや仕方がありません。私は子供の時から淺草を見て居ます、けれど活動小屋が立派になつて行つたのと、活動の映畫が上等になつた事位ゐの進歩しか見出せません。一番賑やかな地點に立つたとて、私等の五官が湧き、慄え、眩み又は裂けるばかりの刺戟がありますか。山の手育ちの私にして、何の心のざわめきを覺えません、あゝ貧弱なる歡樂境よ：おや、おや斯麼ことを云つて了つた。これぢや今日の淺草歩記が駄目になつちまわあ、いえね、こんなことを思ふ時もあるつて云ふだけの話で、今日は、嬉しくてたまらないんですよ。美人の婦人記者澪子孃と同行なんですからね、汀君が行くと云ふのを私が此役を買つて出たんですから。

「春吉さん曲馬を見ませう」

澪子さんは仲見世の途中で立ち止る。

木戸錢特等さん御一名五十錢、普通さん三十錢也。

二人は木の札を持つて中に入る。

えゝ、今が千番に一番のかけあひでござい。

十七八の妙齢の女が二人連れで馬に乘つて丸く走ります、子供が肩の上に立ちます。拍手喝采。肉色の襯衣を着たあの豐滿な肉體を御目にとめて御覧じませ。あの可憐な少女の身を思つて御覧なさいまし。竹久夢二さんならぬ私も人買ひと云ふことを考へさせられました。何を喰べて

ゐだらう。一座には猿の樣な男が居ゐだらう。お白粉を拭ひ落した生地の血色は赤とは思へませんね。

見上ぐる高いブランコで、下がつたり廻つたりしました。綱渡りをしました。本誌十二月號から連載の茨木紫光さんの「女曲馬師に捧げた學生の戀」を知つてるだけに、想像は更に豐に、曲馬師の女に惚れた友人を自分の友人に持ちたくなつたりしました。

（一同の終りです、前から居らつしやる方は代りまあすと）云ふ時、二人は出た。

大道商人の喧嘩

「どうです冴子さん、貴女と同性に斯う云ふ職業の人が居ると思ふと何と思ひます」

彼女は默つて笑つたきり、どうも私とは餘り語らなくて困ります、其癖お轉婆なんですよ、皆さんからよくさう云つてやつて下さい、浮世風呂でゞも。

パウリスタでお菓子とコーヒーを食べたんですが、食べた話は一つもお腹が一杯にならないさうですから拔きにして、其所から御園座の方へ向つて來たら人集りがある。

「どけと云ふならどきますよ」

「どけとは云ひやしない、あつちへ行つてくれと云つたんだ」

「同じぢやありませんか、どけと云つたつてあつちへ行けと云つたつて……」

「違ふさ、こゝは僕の場所だから、もつとあつちへ行つてくれと云ふんぢやないか」

「だから行きますがね、唯藪から棒に除けと云つたつて、此方ぢや貴方が何の位ゐの權利のある人なんだか解りやしませんものね皆さんさうでせう」

と見物の方を向く。皆さん此れはモスの切を賣つてる男と、も一人は髭の立派な但し衣物はお粗末な刑事みたいな男との喧嘩であります。「どけ」と云つたのは其の刑事風の男ですが、此の男は刑事ではないんです何者だか未だ分明しませんが、兎に角傍に毛氈と鞄が置いてありましたから矢張り大道商人の一種で大方、口の先で衆人を煙に卷いといて本か金歯でも賣る男でせう。此男は少し性質が良好でありません。

切賣る方が今「ねい皆さん」と云つたのを咎めて

「君は衆人に訴へる心算なんだな」

と突つかゝります、

「いえ別にさう云ふわけぢやありません」

「なら皆さんなんて云ふ必要はないぢやないか」

「まあよござんす、どけばいゝんでせう、唯藪から棒に除けと云ふから解らなかつたんです」
「除けとは云ひやしない」
喧嘩はどう／＼いゝ廻りをして居る。又「ねい皆さん」と衆人に訴へる處へ戻るんでせう。
てゝで此喧嘩に見切をつけて進む、池の所で右へ曲つて、左側に木馬がある。此の遊戯を見ると子供が欲しくなる。いつそ子供になつて乘つてみようか、社の汀君が居れば氣が強くなつて乘らうもの、澪子さんぢや…
「どうです乘る勇氣はありませんか」先刻の曲馬師は女でしたよ、せめて船にでも…」
「子供が居ればね…」
子供が居れば私だつて。

—(仲見世の女曲馬)—

水族館へ入る

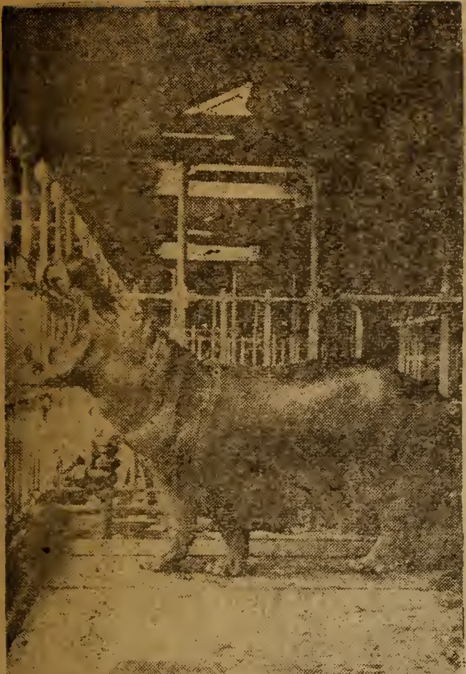
其お隣りの水族館、これは淺草へ時々足を入れる人でも御存知ない方もあらう。料金十錢。
えゝ、亞弗利加產の河馬が居ります！「體量五百八十貫身長九尺五寸、胴廻り一丈五尺、高さ四尺五寸」と書いてあります。幾歳と思へば未だ六歳で人間なら幼稚園に通つて居つて、（先生お小便）つて手を擧げる頃ですが河馬と生れた身は二坪位ゐの水の中に客から投げられる芋を大きな口を開いて喰べて居ます、口の中には六本の大小の齒と奥に物を嚙む齒が見えます。委細は寫眞に依つて御覽の程を願ひます、此外、いつだか新聞に出た數寄屋橋下で捕つた「大ハンザキ」と云ふ山椒魚が居ます。
見物人中、一人の醉漢有り、海龜を金網の上から木の棒を以つて頭を一生懸命突ッいて喜んで居たのは魚より面白かつた。序手にガラスを破つて魚と水がドッと押し出せば更に面白いがと思つて見て居たが、其所までしなかつたのは殘念、誰か電氣

火酒をうんと飲ましてやれ。

此のあとは澪子さんが書きます、澪子さんは、獨りで、生れて初めて東京を見たお婆さんと、少し東京慣れた二十二三の素堅氣とは見えぬ銀杏返の娘さんの二人連れの後をついて行つた。

私は、そこで別れる。

どんな、スケッチをして來たかは下の通り（春）



（アフリカで捕れました河馬でござい）

初めて東京を見たお婆さんの後をついて行く

仲店から十二階へ

「お母さん淺草のね、仲店通りは此處からだよ」人世五十年と定められた壽命を、もう六つも七つも通りこして居る、それでもまあ東京で磨ぎこまれて居た老人だつたら兎に角、九州の山奥からやつと出て來たそれも今度の明治神宮參拜傍々一昨日來たばかりの田舍くさい老婆の手を引いて居た二十三年前より上京して居るらしい。娘はそれが何ぼ自分の母親だつてあんまり氣持よい事ではありますまい。

「あゝこゝからな。お觀音さんは何處にあるんな」

「お觀音樣？ それはね此の通りをまつすぐ行つてさ……」

「それよりもな、わしやその東京が目の下に見えるとか云ふ所に上りたいんでがな？」

「十二階に？ ぢやあお觀音樣のお參りは後にして？」

「あゝ勿體ねえけど、そのわしや、何んとかに上りたいでな」兩側の店をキヨロ〲鳩が豆でも探すやうな風で眺めながら、田舍訛そつくりで大聲して云はれては娘さんまだ若い女だもの、一々振り返へられる人に氣恥しくなつてしまう。

「ぢやあね、十二階に上りますわね だまつて妾についていらつしやい

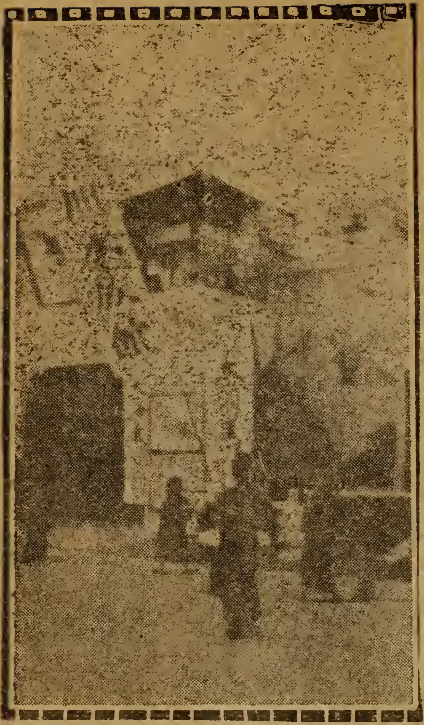
な」と云ひながら娘は母の手を引いて行く。入口の所で五十錢札一枚出して二人分買うと十錢のつりだつたのでそれは懷中になほしこむ。左側の入口からはひつてまつすぐに行くと、(近處からエレベーターにお乘り下さい)としてある。

「お母さん近處からエレベーターに乘るんだから、この草履をはいてその下駄は持つんですよ。」

「なんな？ 何んに乘るんかな。この下駄を脱ぐんな」と又大きな聲で云ふので行き交ふ人が異樣な眼で振り返つてみる。

「いゝんですよ。えゝその下駄は持つて妾の行く方にいらつしやいな」

「まあこの子はまたんな。さう忙はしう云ふてもわしやとちれるぢやねえな。さう〳〵あんたさう押しなんな」エレベーターの入口では禮儀や公衆道德なんて忘れてしまつた人が、我先にと押しこむ。



(淺草の水族館)

「お前こりや一體何んと云ふものかえ？ 乘りさへすりや動いてるぢやねえかえ、ああ、あんたその下駄の泥わしの着物につくぢやねえな」と並んだ人を大聲でしかりながら、「こりや一體何んて云ふもんかえ？」と、お母さん一生懸命に不思議相な顏をして聞きたがつて居る。娘は大ぜいの人中で顏を赤くして、そのまゝ默つて居ると職人風の男が「おばあさんこりやね、エレベーターつて云つてね、これに乘つて上の方に行くんだよ」と敎へると

「あゝ、さうかな。えゝ？ エレベーターて云ふもんかな」とお母さん一生懸命に繰り返へしながら感心して居る。「ぢやあこれに乘るとお前さん何處まで上つて行くのかな。飛行機のやうに高うあがるんかな？」皆ながお母さんの顏をみてドツト笑ふ。娘はもう大抵の所で默つて居てくれりやと思つて居ると、「さあ止まります。こちらからでるんです」と八階目で止まるとお母さん眞先に出る。

それから螺線形の階段を上つて十二階目に上りつく。

「お母さん此處が一番上の十二階目だよ。此處から見ると、こつちが日本橋、こつちが上野で向ふからは向島の方が見えるのよ。東京の市中が目の下に見えるでせう！。あすこがね、池の端、あの屋根がお觀音樣なのよ」娘は一々說明をしながら指さす。

「なあお前えたいしたもんだな。わしや此處から下を見ると目がまうぢやねえか。氣分が惡いやうになるなお前なんともねえな。おちなんなよ。此處からおちると死ぬるで、お前もまだ若えからの。氣をつけなりえ。なあ東京は廣えの。家はどの位えあるだろかな。お前知つてるな。あすこ見なよ、人があげえこまう見せてるぢやねえな」吃驚したとも何んとも云へぬ顏付をして一心に云つてると、傍に居る人達がくす〳〵笑ひながら「家數なんてあんまりぢやねえか」と云ひながら行きすぎる。娘は一通り見終ると逃げるやうに母の手を引きながら行く。

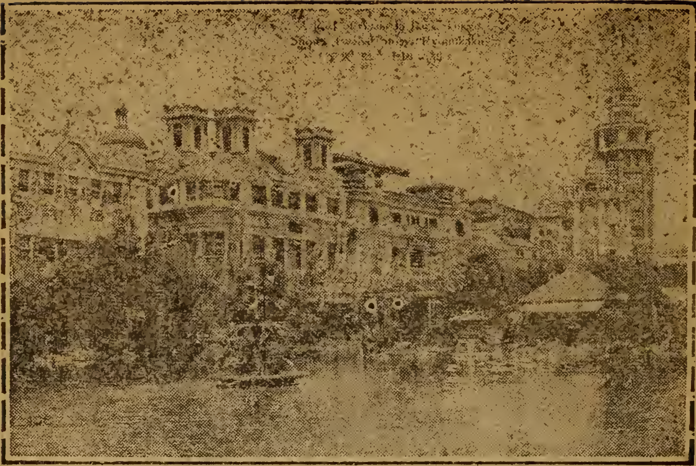
「お前さうあわてなよ。あぶねえぢやねえな」とさん〳〵大聲で云ふので眞實に困つてしまう。おでんなど食べようと云ふのを無理に引つぱつて、又八階目でエレベーターに乘つて下におりる。お母さんは又此時種々と話し出す。下りる時の方がよつぽど早いとか、東京にはめうなもんが流行つて居るとか、と、あたりかまはず一人で饒舌つて居る。出口に着くと娘は何んとも云はないで演劇なんかそつちのけにしてお母さんの手を引いて表に出ると初めてホットした息をついたのでした。

花屋敷へ

御信心なんて忘れてしまつたのかお母さんは花屋敷の前を通ると「見ようえ。〳〵と」無理に云て居る。此處で又とう〳〵四十錢拂つて二人分の札をうけとつて中に入る。入口の所には幸四郎と梅幸の粧した戻橋の人形がある。娘は耳許で一々說明をする。お母さんはその度每にかしこまつて聞いてるかと思ふと、急に思ひ出した樣に誰はゞかる事もなく大聲で質問をなさる。娘はも少し小聲でもとハラ〳〵思ふ。

「わしやこの年までかういふ芝居したる人形の動くのは見た事がねえの」戻り橋の人形がぐる〳〵まはつてる前に立ち止まつてしまつたお母さんは、一人で云つて居る。娘は前の所でこり〳〵した爲欄干のそばにかじりついて一所から動ぬ母の手を引きながらずん〳〵奥の方にはひつて行く。一體何處からこんなに集ま

つたかと思はれる澤山の人中を、年寄の手を引いて娘は動物の居る方に出て來るとお母さんは只目を丸くし


（池の中から十二階を見る）

てるだけで、外國產の珍らしい鳥や圍ひの中のライオンなんかよりもやつぱり入口の人形の方がよいのか「わしやかういふ氣びの惡りいもんは子供の時から嫌ひだからの」と云つて一向よろこばぬ。で又上の方に行つて文福茶釜の作つてある所を見せると、お母さん理由を知つてるかしらないのか、「茶釜の下はありや狸でねえか」と云つてる。「東京の市中を連れてまはつてるのでねえか？」と母なる人が云つた程、演劇場に行つたり、瀧のそばに連れたりあつちこつちをひつぱり歩くと、お母さんさんぐ\疲れたと見えて息をはずませて居る。

「お前から歩きよるが出口はわかるんかえ」もうそろそろ飽いたと見えて出口の心配をなさる。「どんなお祭の時でもこんな澤山の人出を見た事がないと云ふお母さんはたつた二十錢でこれ丈の事を見る事が出來るのを不思議がつて居る。

「もうお前何んべん見たつてわしや同じやうな氣がするに、なあもう出ろえ。お前出口知つてるんな」と秋風の樣。娘も又笑はれるやうな事があつても澤山だからと思つたらしく出口の舌切雀の所を通ると、片側の鏡に寫つてるのも知らないで「一體こりやどつちが眞物かい？」と又はじまる。「こつちは鏡なんですよ。向ふのあれが寫つてるんですよ」娘は人に聞えないやうにそつと囁いた。

やつとの事で出口を出るとお母さんは又振り返りながら、

「あの木馬ちゆうもんに乘つてみたかつたの」と又後に未練のあるやうな事を言ふのでした。(澪子)

徹底的愛の征服 ※（芳川赳著）
女に惚れられる法が書いてある。（本鄉林町・文明堂・一圓）

オペラ界 三角戀愛

伊庭孝と澤マセロと小野喜美子

直線といふ棒が三本集つて角を作れば三角と言ひます。國が三つ集つて同盟すれば三角同盟と申し、男と女と男、男と女と女の三人で好いた惚れたと色戀をやればそれは三角戀愛と申します。

『俺は偉んだ。役者もする。歌も唄ふ踊りも踊る、馬にも乘る、セロも彈く樂譜も解る、活動寫眞の燒直し脚本も書ける、外國語も出來る、俺は偉んだ。』と云つたやうな面構への伊庭孝と裸體になつた所を見た譯ぢやないけど、

『ね、あたいあの着物を着たら似合ふでせうかね』とか女そつくり、それより甘い物の言ひ方をする澤マセロと、ボンヤリしてゐると撲られさうな、

『チエッ、生意氣なことを拔かしやがるない、あたしはかう見えたつて幹部俳優なんですからね、』物凄い、これは又男みたいな小野喜美子の三人はもう過ぐる年から色戀をやつてをります。これは田谷力三のテノールより珍らしいオペラ界でたつた一つの三角戀愛であります。

この伊庭孝といふ偉い人は、誰でもよく識つてる偉い人です。もう三十を越した中老人ですが、其の道は別とやらで男と女を一度に可愛がつてるやうな譯です。澤マセロといふ奴は、頭はまるでボーッとした腦味噌のかはりに空氣が入つてるやうな仕末の、俗に言ふ青春期の女みたいな男か、男みたいな女かです。まだ兵隊檢査前でフラフラドタンバタンと踊る奴です。一度ベラゴロに撲られた經驗を持つてる位、女みたいな變な感じの奴です。

小野喜美子はマセロと同年輩位の、一目見た所では女中といふやうな女です。女中といふ感じが起る位ですからとても／＼スベタラ女優です。然し怒つちやいけません。スベタラ／＼と申

しても淺草歌劇女優的の內職が、舞臺の藝より上手といふ意味ではないのですから、喜美子の舞臺などはなかく〱いゝもんです。ジプシーの女になつて、『妾はお金で働いてゐるんだからね、お前さんみたいな文無しにやてつちが御免をかうむるよ……』なんて臺詞を言へば松島榮美子を想はせるやうなカスレ聲で圖々しさうに言ひます。そしてタンバリンをたゝくことは、死んだ永井德子のを受けついで今では日本一だと言はれてをります

これだけ立派な女優に向つてスベタラとは失敬なやうですが、永井德子の實弟花井敏郎は、『あゝ小野キミですか、何でも一番最後の女優募集の時でしたよ、小野キミが來たのは、何でもあれは日本橋邊を根城にした物凄い不良少女だつたので、姉も一座へ入れることはずゐぶん考へたんですが、仕方なしに採用したやうな譯なんですよ…………』と言つていましたつけ。それにあたしみたいな老人に、若い女子が煙草などを吸つてゐると、どうしてもスベタラよりほか見えませんからな……。

不良少女時代から永井德子の弟子新星歌舞劇團、朝日座、今日では金

新人―― 冨士松加賀路太夫

その納會（十一月七日）を上野鈴本で聽く。語り物はお得意の「醉月奇聞」と「宮戸川騒動」と「高野山」との三段。そこで頂戴をしたのは宮戸川、もつとも是は太夫がもろに手にいれたもの、と一口に評して了へば太夫は新進ではない、が、太夫は自分の喉を知つてゐる自分の路を開けてゐる、つまりあの量の計り知れない美しい聲、圓滑な聲、けれど艶がない、寂びがない、ゆゑに敢えて蘭蝶を唄はず、明烏を出さず、だから嫌味がなくて、誇張もない、で、斯うした普遍的でないものへ新しい生命を入れて試みて行く、それが太夫の新進としての光りで價値である、らしい。さて宮戸川の語り出しの「古昔は草茫たる武藏野や、人家疎らに隅田川」は呂の聲でなくともホワイトウオールの聲で聽衆を先づ魅した。「命と金とは誰しも惜しい」あたりは其絶頂。誘はれて秋の陽も夢と流れた。（東大路）

龍館にお三人仲良く獨立大興行に出演してゐます。マセロも伊庭孝も新星歌舞劇團から三角戀愛を生みだしたのです。

先づ伊庭孝は妻君格であつた永井徳子に死なれて、一寸淋しくなり小野喜美子を愛しかたはら、澤マセロといふ美少年（？）を稚兒さんにしてゐるんです。そこへ持つて來て澤マセロも少し男の氣があると見えて小野喜美を口説かうとするんですが、どうも、

『何に言つてやがんでえ、マー公』

とやられちまうのです。頭がボーッとしてゐると色戀までがこのやうにボーッと鐵砲を頂戴してしまうんです。その時マセロの返事が、

『さうそ、キミちやん：：』とつ拔け加減だから其他彼の日常は押して考ふべしです。

小野喜美の方になると流石不良少女の大將だけあつて、伊庭孝といふ偉い人についてれば大丈夫と思つて『先生々々』と口先きで尊敬してゐます、又言ふ事が一寸凄いので並製の人間（多くペラゴロ）などは吹き飛ばされてゐます。

『あたしが何ぼなんだつて先生にしさ、それにマー公みたいな腑拔けのアンポンタンなぞ、どうとも思つてやしませんよ。はゞかりながら：：』と、赤い葡萄酒をグット呑んでゴールデンバットをプー〳〵輪に吹いてゐるんです。するとそれを聞いてゐるペラゴロ連は偉いもんだなア新らしい女つてのはあゝいふものかなア』と感心して、『エビフライは如何です、ビフテキ召上れ』といふやうにさん〳〵御馳走を初めます。まだ食氣の方が多い小野キミは食ふ事飲む事又凄いものです。

この小野キミがあまりうんと食つたもので、本郷の湯島カフエーには『喜美ちやん』といふ料理がありますそれは平貝のフライであります。マセロなぞは、

『伯母さん、あたし喜美ちやんにトーストを頂戴な、それからコーヒー』と例の甘たれ口調でやつてると、よく呑込んだ伯母さんは、

『ハイ〳〵今あげるからおとなしく待つてらつしやい』と返事の代りをやつてます。そこへ煙草を吸ひながら伊庭孝が入つて來ます。

『お前待つてたかい』

優しく聞きます。

『いいえ、先生あたし今來たばかりよ』二人は食事をすませ、伊庭孝が勘定を拂つて何處かへ出掛けて行きました。

食事をしながらでも伊庭孝は、マセロの變な帽子の冠り方を直して、

『お前はそれぢや變だよ』

『だつて先生あたしから冠る方が好きなんですもの』なんて甘い事を言つてゐました。

考へて見ると小野喜美子がゐないのです。成る程、伊庭孝は偉いんだからたまには、織田信長が森蘭丸を一人連れて寢所に入るといふやうなことをやるのだと思ひました。

小野喜美と伊庭孝とが又實によく出來てゐます。稽古場などで伊庭が急用が出來て、

『喜美ちやんこれをしまつといておくれ、誰にも渡しちやいけないよ大切な本だから』

『ハイ、先生お出かけ。お歸りはおそいの』

『いや、すぐ歸つてくるから……』

と喜美ちやんに本を渡して行きます。するとマセロの妬くこと妬くこと、それはひどく妬くんです。『先生は喜美ちやんばつかり可愛がつてる……』とでも泣くんでせう。

用から歸つて來ると伊庭孝はマセロの不機嫌を知つて、小野喜美を先きへ歸して二人で何處かへ出かけます。マセロの空ッポの頭はそれで充分直つて、『やつぱり先生はあたしを可愛がつて下さる』と思ひ込んでしまふのです。

伊庭さんは偉い人ですからかうやつて二人をよくあしらつて行きます此頃は小野喜美もマセロも先より喧嘩をしなくなつて、ます〳〵三人の仲は巧妙にいつてゐます。

伊庭孝と小野喜美とのことは本郷座に新星歌舞劇團がゐた時分、その定宿であつた長龍館の二階の疊に聞いて見れば解るのですが、生憎疊先生口がきけぬのではつきりした話が聞けないのには弱りました（淺九郎）

茶目演藝 新年大演藝會

△ふイ、開けましてお目出度う、一人ぢや代り合ひまして代り榮えのするなんてワケに行かないが、年と共に筆を改めて御氣嫌を酉の春、どうぞ御贔負に。その酉年の鳴き聲がコケコッケイ、大に滑稽を探し出して御目にブラ下げやせう。

△『奇魔術界の霸王、神通力不可思議術』と、とある寄席の灯入りの行燈、敵がから堂々たる陣地を張つた以上、是が見逃して通れますかえ。例へ火の中水の底、燒豆腐のやうな攻め苦に逢つたつて飛び込まねば先祖へ對して申譯もない。新年早々だの、松の内だのと云つて居べき場合ぢやない。

△ヤアヤア遠からん者は明日でよし近くば寄つて驅けつけて簞笥を運べ誰だい火事だと思つたのは周章てるナ冗談ぢやねえゾ。桓武天皇無代の公園、ペンチの上に寢轉んだる岩見重太郎の末損、いかもの無茶修業なり、我と思はん者は來つて木戸錢を取れとも何ンとも云はじに飛び込ん

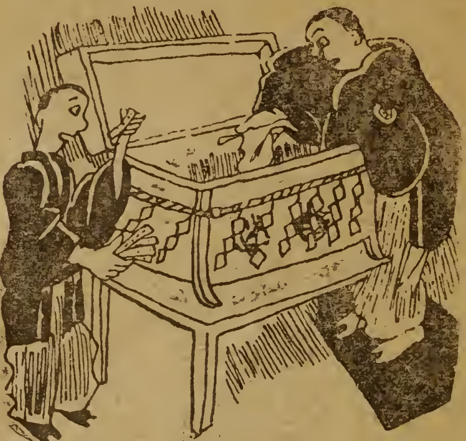
演藝樂屋話

櫻川遊孝と荻江節

淺草公園に巣を喰ひ浮世を茶にして暮してゐる櫻川遊孝。ツイ先頃の活獅子と萩江節とを賣物に大阪迄遠征に出かけた。處が此の萩江節は女房が萩江の家元の處で仕込むで來たのを口移しで敎つたのであつた。大阪には此の古曲に對して聞分る人がなかつたのか、それとも如何誤魔化したのか、大好評で歸つて來ると鼻を高くする事愛宕山の天狗以上。すると或る晩待合のおふれ（之は有名なバラガキのお舟と長唄の富士田音藏とがやつてゐる家）に招ばれた。其處で師匠並居る藝者を睨め廻し、『今時の藝者どうも藝がなさ過ぎやす何んでも昔の藝者は何でも知つてゐたと聞きやす。萩江が聞きたくも、『聞かれやせん』とやる。今迄の廣言憎しと思つたのか、居合した某妓（特に名を祕します）が、膝を進め『それでは一つ萩江を伺ひませう』と棹を斜に構へて、彈き出したのが、短夜、それからは彈き出す、唄ひ出す程に客のあるなどは、スッカリ忘れて、

だら。蟻の這ひ出る隙は有るだらうが、便所へ行くのも骨だと思ふ位の一杯の大入り、高座の上には瘦せこけた、不景氣を人間にして見せたやうな男が何かしやべつて居ます。傍の紙を見たら『我喜丸』とある。

△短かい話を二つ三つしてから問答をやる。『大きい物を飛行器とは是れ如何に』なんかと意味の分らない各問答がお客から出たのには怯やかされた。『景品も出さないのに京濱電車とは是れ如何に』『生きた人を乘せるのに死骸電車と云ふが如し』と云ふ鳥渡まア奇麗な所で打ちとめて阿呆陀羅經、それからが足藝。



△是は足の先きに人形をつけたのを寢ながら使はうと云ふ、始めが達摩のカッポレ、それが引き抜いて女の人形が『春雨』を踊る。それから若衆、潮吹と五度も足藝の引拔き早變り、此奴ア洒落て居やした。

△次が『耕右衛門』と云ふ男の浪花節『清水の治郎長』らしかつたが、元來拙者何の因果か浪花節と滿員電車は蟲が好かないから是は御免を蒙る。そんならお前、その浪花節の間は何をして居たんだと、ハテ野暮を云ふと嫌はれますよ、前に居た若い姉ちやんの島田を見て居ました、此所らがその役得でげしてね、へヘッ。ウい〻心持になつたが、悲しい事には女房に教つたには限がある、夫が了るとお了ひになり、ホツト一息して、遊孝師匠は、『〇ちやんは今時には珍らしい』と負惜みを云つた、が、此の某妓は、萩江家元の名取りだと云ふ事を遊孝師匠佛性で知らなかつたと見える。

中村福助と金一錢

歌舞伎座の花形中村福助が株主優待券を持ち芳町の菱家さん子と、男衆を連れて、帝劇を見物した時のお話。男衆のやり場に困り、『お前四等（四階）で見ろ』と云つたが、幕間に、親方に會ひません、とやつたので、仕方なく三等（三階）に席を直した。處が幕間に福助が脂取りを十四錢で買ひ、一錢のお釣りを、男衆に『お前にやろよ』と云つたが、男衆お釣りを取る事も出來すモヂ〳〵してゐると『一錢でも貰いぞ。俺が血と汗を流してこしらへたのだ』ヤット大見得は此の親方、却々經濟學に明い。

長唄連中歸京後

滿鐵からの御招きで遙々滿洲迄御かけになつた長唄連中、シコタマ貯め込むで歸ると、先づ第一に坂田仙八

ワツハヽ、物凄い聲を出すない。

△次が大道の古道具屋のやうな赫ら顔の小父さんが上る。そしたらこの小父さん與太が古道具屋になつた話をした。僕の眼も三里二丁三十間位は利くらしい。この男、音曲師かも知れない、勿論自分一人ぎめでだがイヤに氣取つて都々逸が立つばかりそれが皆『番頭さん、湯がぬるいよ』つて調子だから笑はせる。

△それから『たんとは呑まねど一合の酒に、醉た醉た』と云ふ例の越後獅子の替へ歌を、俺ばつかりがこの文句を心得て居ると云つた顔で唸るイヤ人殺し。お客も呆れ『手を叩かなかつたのはいい顔の皮さね』それが消え去ると、代つて現はれたのが十六七の至つて小柄な女の子。頭は蔓下地、紺地の袖の長い着物をヒラつかせながら踊りまするは『北州』の後半。

△『あ、あの女はお祭りにも踊つたよ』『あれで二十四ですとサ』『へイッ』『イヤ牛込のお師匠さんで本當は二十七ですとサ、驚きましたね』と傍の内儀連の噂、イヤ此方も驚きやした。良く見ると成程、目元、口つき、年は爭はれない、全く姉ちやん婆ちやんの標本、若く見えるのもかうなると怖ろしい。寄席へ出るよりは緣日へ出た方がよからうに。

△踊りは傍の内儀連は頻りに感心して居たが拙者は何とも思はず、心地のまるで出てない子供の温習踊りその儘、尤もスーッと出した手は、場末のトンカツ屋のホークのやうに反ツくり返つて居ましたがね。さて、愈最後がお目的の『神通力不可思議術』で、高座の机の上に注繩を廻した箱を据ゑ、『何んでもお望みの品物をお稻荷さんのお力で出して御覧に入れるから、何でも見たい品物を書い

は歸ろとスグ我家から小火を出して、懷中を探めると、富士田音藏はお舟さん同伴で伊香保へ出かけると間もなく、アノ大火で燒出され、這々の體で逃げ歸る。杵屋和吉は歸途箱根へ泊ると、其の晩に例の僞中尉が忍び込むでお土産のピーシーを失敬して、其儘ドロンしたと云ふ騷ぎであつたが、此の盗難話少し眉唾で、實はいゝ妓にやつたとの話だが、行つた連中で、少しも災難を喰はなかつた者は、今度俺たちの番ではないか、鶴龜々々。

貞山家宅浸入の話

釋の貞山が柳橋の某妓と大變熱くなつた。處が此の藝者が、或る日、貞山に（妾の家へいらしつて下さい）と云つて、所番地を書いた書附を渡した。貞山暇を得て、御召の衣類を着流し、中折帽を戴いて、ノシ〳〵ヅイ〳〵と押出し、書附け通りの番地を尋ねてあれば、其の通りあつたので、早速喜び敷居を跨ぐや否や、某妓の名を聲高らかに呼ばはつた。聲に連れて出て來たのを見ると其の妓にあらで、奥樣風の人に膽を潰して、其の妓の所在を問へば、其の家は某家で其處へ某妓が遊びに來ると知れ、貞山先生這々の態で逃げ出したが、其處が先生一番怖い人の家と知つたらドンナであらう。(柳家月子)

寫眞占斷

白山金やみき小とし

あなたは物質的には幸福です、抱への藝妓衆もよく揃って美い妓ばかりです、けれども、今の灰殼な言葉で申しますと、性的に惱みがあります。あせると大變な間違ひの因になります、もう直あなたの便りになる人が降って來ます。御安心なさい。

て下さい』と紙を配る。

△やがてお客が書いた紙を讀み上げると『水戸の梅羊羹もてこい』の『氷川樣のお札』の『ライオンを五疋出せ』の『菊右衞門の繪葉書』のと澤山有つた中に驚いた品物が書きも書いたり『褌にウンコのついたの』餘り品物が多いからと二つに別け、その一方を選ばせて愈品物を出す。

△羽織袴の男が何か祚るやうに『絣の反物を一反持つて來い、絣の反物だ、絣の反物だ』と叫びながら箱を開けると箱の中から絣の反物を取り出す。お稻荷さんが神通力で運んで來るんだとかで、『兎の子が二疋』の時、兎の大きいのは有るが少さいのは仲々ない、今盛んに探して居ますから後廻しにしますなんかと云ふ。

△『ライオンを五疋』でライオン齒磨きを五袋なんざアお稻荷さんも洒落者でがス。越中褌にウンコのついたのも出しました、ウンコは餘り汚いから、煮小豆をウンコと見せてつけたのなさうだ。

氷川樣のお札も出した、千住のお稻荷さんの掛額も外して來た。水戸の梅羊羹から靜岡の山葵漬け、大分遠方のも立ち所に現はれるから見物一同感に堪えた、が、僕だけは例外。そして出した品物は最後に籤を引いて見物一同に配けてくれる。入口でくれた番號札は即ちそれのだつた。

△が、殘念、無念、僕には何にも當りませんや、アアおお稻荷さんにも見離されやした。（勘平）

中村歌扇引退劇——都下下町の兄ちゃん達の所謂錆のある血汐を湧かせて居ました中村歌扇は、神田劇場十二月狂言「梅川忠兵衞」の梅川をお名殘として花々しく引退する事になりましたが、何でもある良縁あつて花嫁さんになるとか、大向ふ連の噂さの聞書き。

花柳 珍々魔語間語

◆毎度御喧しい事乍花柳界のゴタゴタは相も變らずで、先づ新橋が納税の事から騷ぎ出し、之は役員をしてゐた烏森の湖月が惡いと、松本の爺が市會で喋る事を、此處に講演に及むだが、結句役員改選で事無事に納まる。お寶の事と云ふとスグ斯う眼くぢらを立てゝ怒る。餘り見つともいゝ圖ぢやない。

◆落語の冒頭ぢやないが、新橋に代りまして、餘り代り榮のしない騷ぎを持ち出したのが、龜戶、之は新橋とは事違ひ少々喧しい問題を含むでゐる丈に、怖い伯父さんの方でも、多少眼を光らしてゐると聞いたが、何にも少々ばかりのお寶の事を、ギヤギヤ云ふには當るまい。事務所は少々位立派な方が至極結構ぢやがアせんか。とは龜戶へ繁くお通ひになる通人の御話、併し斯う御寶の事でイザコザが起るなんかは聞辛い、さうさう金持は溜る程汚ないつてね。

◆芝浦一瀧の家の音千代が寶田義文さんの處の息子と心中して浮名を流す。二人の死骸が上らずに何處かへ逃げたんだらう、と云つてゐる間にヒヨツクリ、バアをやつて皆を泣したが、寶田家では音千代さへゐなかつたら、音千代の方で寶田の倅がゐなかつたらと、兩方同じ事を云つてゐたが、戀は綺麗な者、佛になつてから迄、添はせないなんか、何處の御宗旨にも寸緒ない筈、そんな眞似をすると希臘の王樣見たいに猿に、噛まれて死ぬわ。

◆新富町に龜香川と云ふ泥龜が、一匹頑張つてゐる爲め、此の土地が發展出來ずモジ／＼の中に暮して行くなんぞは餘り櫓下の名譽でもない。之も要するに新富町には女主人の藝者屋さんが多ければこそ（尤男主人の藝者屋さんとは聞かぬ）が此の男又とない箸まめで、或る藝者の女將を旦那の隙を窺つて、寸緒お毒見したと云ふが、慈善萬事がいけず、尼港の時なんかも、龜戶ですら演藝會を開いて立派にやつたのに、指を喰へて引込むでゐる騷ぎに、血のタツプリある連中承知が出來ず、此處に一騷動起らんとしたが、漸くにして赤化するのを喰ひ止めて、一段落ホツト一息した事であらうよ。

◆昔の花魁は餘り物を知らず、文久を蟲と間違へたと云ふ話だが、此處に御話申上げるのは、尼港殉難の當時、或る客が、或る土地へ遊びに行

き、高千代(假名)と云ふ妓を呼んでお前尼港で大變人が殺されたのを知つてゐると訪ねた處、高千代裙、マジマジして妾知らないわ。と答へると、お前は新聞を讀むでゐるか、何讀むでゐる、それは役者の噂や小説や位だらう、と何時の鬱憤を飛むだ處で、撥ねかしてゐた末、政談演説の口調になり、尼港で數千の人が殺されたのを知らないか、之を知らなければ日本人ぢやない、と極め付ける。之を一生懸命に聞いてゐた、高千代愕きの眼を見張つて、アラさう、そんなに殺されたの、だけど、それ丈殺すのには、隨分殺しでがあつたでせうね、と其の客、思はずプッと失笑して事が滅茶々々。

寫眞占斷　下關 田中家米香

あなたは今東京から出ようかと大變迷つて居ります。姐さんは離しますまい。それに

あなたが今心で考へてる程東京から出ても思ふ樣になりません、それより親切を盡して

頼る人を求めた方が身の爲めです。

旦那運は大吉。

◉之は去る山の手の藝者の話、此の妓半玉時分には吉原にゐたが、好きな客に落藉されて、手鍋さげても、の暮しをやつて見たが、長く續かず山の手から、今晩アリー、で出たが吉原にゐた時分の朋輩が、或る處へ嫁付いてゐる先の名前を使つては、別れた男の處へ電話をかけてゐた。抱へ主は全く朋輩の家へ電話をかけてゐる者とばかり思つてゐたが、フトした事から、其の先方の家が知り合ひだつたので、問ひ合はせれば、はと氣が付いたが、其處は年の甲で何にも知らないとの返事に愕き、偖知らん顏をすると、佛性の其の妓、姐さん又御友達の家へ電話をかけて來るわ。

十二月十二日根津娛樂園に於て「文士忘年懇親會」が催される。會費二圓。發起人は島東吉、井上猛一、柳春吉氏等。同好の士來會御隨意

淺草公園活動街

ぶらつきの獲物

特に活動經營者の一讀を勸む

巴生記

■■米國物の前途悲觀無用

十月の末、淺草の遊樂館で封切をしたマーガリット、クラーク孃主役の人情物「今昔物語」を見たが、祖先の日記の内容が寫眞となつて現れる。其筋が十八世紀末から十九世紀の初頃までの時代を世界としてあるのに、寫眞の染調色のオットリとして居る工合から、古雅な趣のある庭園の實物應用、室内の道具立から、其裝飾の工合、さては人物の扮裝等に至るまで、これが米國出來だらうかと首を捻る程米國離れして、佛國（十八世紀末頃）氣分が畫面に漲つて居るのは、近來珍らしいことだ。米國物が此呼吸で進むことが出來たなら、平和克復と共に、歐洲物が盛返して來ても、さう〳〵ドカ落ちがして、成金凋落の卷の悲劇を演じはすまい。

■■天下御免の早川雪洲の名

二三年前淺草富士館で封切されたきり東京では其後名を公にすることが出來なかつた問題の在來日本俳優早川雪洲、先頃淺草電氣館で封切の「血の力」では公然と名を出すことが出來た。それは寫眞の内容が其筋のお氣に入つたからであらうが、此寫眞は米國在住の日本青年畫家を主人公として、其畫家が米國人と交際もあると云ふ筋だから、それで在來の日本劇のやうに、外國人が假裝した日本人を見せる爲に、母國の人が見たら、吹出したり、腹が立つたりするやうなものとは違つて、缺點が見立たぬのかも知れない。米人に迎合して、レンズの前に立つ數が重なれば重なる程、日本人離れがして來ると某氏に評された雪洲が、今度は其點が一向目立たぬのは、つまり以上述べた理由からだらう。

■■所謂新方面の映畫劇とは：

日本物が行詰つたからと云つて、新し

い方面に映畫劇を發展させようと、一部の青年智識階級が企てゝ居るさうだが、行詰つたは、行詰つたに非ずして、ザラに轉がつて居るいゝ材料を拾つて、それを寫眞化すれば、決して事を缺かないのに、例によつて、名の賣れぬものは相手にせずして、掘出し物をする勇氣に乏しい爲に、自分で行詰るやうにさせて居ることに御存じないのだ。それは兎に角、新しい方面を開かうと云ふのは惡くはないが、それも歸山第二世で西洋物に例がなければ、何でも蚊でも誤つて居るとして、混血日本人を作り出したり、猿の人眞似をして、それで日本映畫界に新方面を開拓しようと云ふ量見なら、歸山特作品の失敗を繰返すに過ぎないので、輕佻な一部の青年觀客には喜ばれようが、それが最後の勝利を得るとは保證が出來かねる。こゝに注意して、

三語樓、貞奴に水を浴けられた話

鹿の三語樓が、會社へ來たノセ物の水戸藝者の中の、木村家貞奴に眼星しをつけ、新らしい言葉を一生懸命に竝べた上、手提げ袋をプレセントして、御機嫌を伺つたはいゝが、之が到頭女房に知れると、女房怒るまいことか（こんな大きな子供（中學校とかへ行くとか）があるのに係らずよくも女狂ひが出來たもんだ）と、高座の猫久を正で行く騒ぎに、三語樓大に恐縮して、得意の新しい言葉で如何にか斯うにか、まづくなつて了つた。

女房の前にはアレ程、立派に思ひ切りませうと云つては見がた、扨て思ひ切れぬは戀の道で、貞奴の事が思ひ切れず、其の後もセイ／＼御機嫌を取結むでゐたが一向に御利益はなく、到頭焦れ込む中に、御約束の日限が來たので、藝者連中は水戸へ歸る事になつた。一日釋の貞山が會主で十圓の持寄りの慰勞會を奥山の大金に開いた之を耳にした三語樓飛上らんばかりに喜んで、仲間内を御親切にも勸誘して出席に及むだ。此の日三語樓の扮装を見てあれば顔をおびんずるの如くに光らして、ピカづくめであつた。酒になるや、惡戯好きの小勝が、種々仲間をけしかけて、註文を出すので會費では足りなくなるので、貞山頭を掻きながら（斯う過激派が多くては、困るよ）と云ふ中に三語樓此の期を外してはトテモよい折あるまずと思ひ、貞奴にヅシンと打掛ろ。と貞奴忽ち柳眉を逆てて（貴郎の逆上せを冷して上げま

自分達の道樂の爲、人困らせの作を公にしないやうにして貰ひたい。

■■國活巣鴨新派の一頓挫

國活の巣鴨新派が廢止になつて、角筈撮影場が新派獨占となつた以來の作品を、チョイ／＼拜見するが、森要君監督、長井技師撮影の分は、寫眞の出來もよいが、其他の分はどうもムラがあつて困る。十月の初頃新宿市電終點附近の武藏野館に出た「女の一念」も、「其後巣鴨館に出た「月夜嵐」も、隨分不出來だ。殊に「女の一念」は、寫眞のヌケが惡く、ピントが合つて居なかつたり、折角進歩しかけた國活新派も、一度中折れがした氣味なのは、誠に同派の爲に殘念に思ふ處で、小松商會の近作のやうには出來ないものかしら。

■■日活向島派は第三部

中山歌子等で組織された日活向島派の第三部は、モウ撮影を始めたさうだ。此一派の撮影は、祕密主義を日活が採つて居るので、親しく見物は出來ないが、どんなものが出來ようか。西洋の皮想模倣でなく、西洋物の長所を消化して、日本物に新生面を開く抱負だと聞くから、まさかに混血日本人は出來まいと思ふが……。

■■帝國キネマのトリック物

大阪の帝國キネマ演藝株式會社が愈東京へも切込んで淺草公園の日本館で、ユニヴアーザル東京支社に代つて旗揚げしたが、日本物はまだまだ日活や國活に一歩を讓つて居るだが國活巣鴨撮影所がツイ先頃まで居た撮影技師の大森勝君が此社に轉じた爲か、舊派「大江山酒呑童子」の良門が空中飛行の件と、「忍術三勇士」の猿飛佐助と霧隱才藏とが空中を走る件とで、白バックを應用して人物の膝から下をボカシにし、雲の中を走る趣を利かせたのと、大きな手や足がニユッと出て、關東方の大勢を將棋倒しにする忍術の働きなどは國活舊派が淺草の大勝館あたりで忍術物によくやつたことのある、枝正技師長直傳のやり方を應用したので、此空中に立つ人の足をボカシにするのは、日活舊派が、こんな場合にも、全身をハッキリ見せるよりも如何にも雲の中に立つて居るやうに見えてよい。併し芝居らしく撮るのが大阪の見物に受けると云ふ此一派の方針では、巣鴨直傳のトリック物にかけては餘り得手ではないし、其上控へ目な大森君、充分に伎倆は揮へまい。

■■市川姉藏後援會の創立

日活京都派第二部の市川姉藏に對し、京都かの愛活家連が後援會を拵へたさうだ。松之助、扇太郎以外に姉藏も無論引立てゝやりたいのは異存はないが、其後援も、一頃の松之助後援會のやうに、何でも蚊でも其一人にさせねばならぬ無理强ひをしたなら、松之助物が今日に單調の弊を脱し得られぬと同樣になつて、却つて姉藏其人を誤つてしまふわけだ。内容が多方面で、姉藏一人を萬能主義にしないやうにして、これで姉藏を引立てゝこそ、意味ある後援の實があるのだ。他派を目の敵に惡く云つて贔負の引倒しを以て後援と思ふやうな了見があつたなら、それこそ大べら棒の骨頂だ。

■■出世した小池春枝

淺草のみくに座が活動寫眞館時代に、桂壽郎などゝ一緒に出て居た女優の小池春枝、其時分には隨分大根で、唯お面がよいのが取柄だと思つて居たのだが、其後横濱喜樂座に移つて、暫く居たが、今度久々で東京へ戻つて、國活角筈撮影所の新派に加入した後の寫眞を、大勝館で近頃見受けるが、綺麗ではあるし、横濱で修業して來た爲か、メッキリ伎倆を上げて、以前とは別人のやうになつた。これでは映畫の女優として、行末立つて行けるだらう。

■■ろくろ首ばかりは駄目

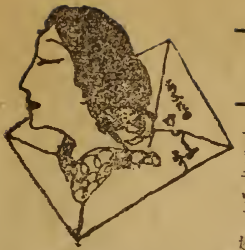
活動寫眞では、舞臺では到底出來ないケレンが、トリックを應用して自由自在に出來ることは、今更事新しく云ふまでもないが、それでも一ツ出來ないものがある。それは何だと云ふと、ろくろ首だ。首を拵へ物にしてならいゝぢやないかと云ふ人もあるが、さうした時には、首がニユーッと長く伸びて、ニヨロ〳〵と蛇ののたくつて居るやうに蜓り廻りながら、首が目を明いたり、口を利いたりすることは、實際寫眞では出來ない。さうかと云つて、拵へ物の首の目口が明くやうに仕掛をしても、それでは寫眞としては缺點が目立つて、事を壞してしまうから、特別な方法が發明されたらイザ知らず、當分のうちは怪談物の寫眞に、ろくろ首を出すことは諦めねばなるまい。

■■淺草公園の二人茶目

公園で二人茶目と名の賣れた少年辯士がある。三友館の金子茶目とオペラ館の久我茶目とだ。どちらも中々人を喰つて居て、西洋物の喜劇の中說明をさせると、立派にやりこなせる。日本物の子役の蔭白もスラスラと行けるが、金子の方は、今の處新派ばかり受持つて居る(巴)

映畫界の人となるまで

米國チエスター・ベンネット君



■亞米利加の映畫界に在つて毎日生活を送つて居る多くの男女の中には技術に天才的なるものもあれば、多年の研究に依つて今日の榮ある位地に就くことが出來たものもある、が大部分は前者の天才的方面に屬する、チヤツプリン君、ピツクホード孃ナヂモヴア孃等は是れに屬するのである。後者より出づる者は全然無しとまでは云はれぬが、偶然にもあつたにせよ、其の人は前者の方面より出でた男女と肩を並ぶる位地へ進む男女は稀であり珍らしいのである。仍で筆者は斯界と全然無關係の方面より映畫界の立物の一人となつた、チエスター、ベンネツト君の經歷談を筆して讀者諸君に御紹介する次第である。

■約三ケ年以前に、チエスター、ベンネツト君は、レランド、ス

遊興公認稅

世の中は益々開ける一方でこの分では將來のほどが恐しい位ゐで御座います、といふのは外でもなく何しろ一寸、えへゝゝ、遊ぶのにも稅金がかゝる譯ですからね、が、この遊興稅は一種の遊興公認稅で御座いまして多額納稅者は詰り上妓院妓員の資格があり普通の納稅者は醜妓院妓院に選出さる可きお方なのだ、さうでもなんでもありませんが、さて大正九年十一月一日から施行されました其遊興稅を爲念御覽に入れて置きませう。

―但し東京を標準。

東京市特別稅特別消費稅條例

第二條　特別消費稅は本市內に於て藝妓、娼妓、幇間、遊藝家其他之に類する者を招致して飲食及び遊興の爲め金員を消費したる者に對し之を賦課す但し其消費金額一人一回三圓に滿たざるもの及び數人共同消費の場合に於て其平分額三圓に滿たざるものに付きては此限りにあらず。

第三條　特別消費稅は消費金額百分の十（九年度は特に百分の四）以內として每年度市會の議決を經て其賦課率を定む。

第四條、特別消費稅は隨時之を徵收す。

第五條　特別消費稅は料理屋待合、茶屋、引手茶屋貸座敷等に於て第二條の消費をなしたる者に、賦課する場合は當該營業者は以て徵收義務者とす。

如何です、表面は特別消費稅とあるから振るつてゐるではありませんか。のみならず女中や遣手婆はお客の勘定をする時には稅務署のお役人樣同樣なんですから、恐れ入りますねえ。如何か讀者諸賢は妓員資格を得るためとはいへ、餘り特別消費稅を納入しないやうに、御家內安全の爲には、ホ、恭つて申す、以上

（納稅者の一人）

タンホード大學の法科を卒業した青年法律家である。卒業すると間もなく彼は法曹界に入った而して世界の映畫街として知られたロッスアンゼルス市に事務所を設けて開業した、が割合に日々の收入も少なく貧乏だった

其の點で、彼は法曹界を去って、一週十弗の俸給で、ユニヴーサル社の撮影助手に雇はれた而して翌朝大奮發して自働車で撮影所に向った。

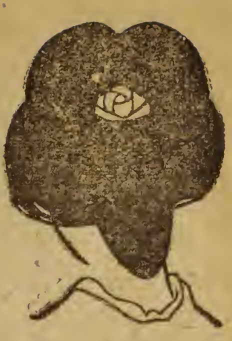
彼の業務は、技手の指圖に依って器械の三脚を立て、、焦點を定めるのが其れであった。併し、覺えの良いベンネット君は、數日の中に、はや器械の構造、撮影の要領を呑込んで了って一人で充分に撮影し得る手際となった。

其の當時、ユ社專屬の人氣女優ルース、ストンハウス孃は同社に在って二卷物の映畫劇女優として名を唱はれてゐた。孃は專屬のお氣に召した技手が居ないのを遺憾に思って居った矢先き、フト、ベンネット君の噂を耳にしてたゞちに孃專屬の撮影技手とせしめた。併し、彼は現在の職業に決して心から甘んじて居らなかったで、ベンネット君は、ユ社を去って、其の頃日傳聲喇叭手として名あるチエームス、ヤング君に弟子入りをした。而して今日はアントニオモレノ君の指揮者として、卓絕なる技倆を示して居る。（野呂金）

柳橋園也　店子の婆にいぢめられる

◎一足飛びに柳橋の名妓の數に入つた初和歌葉の園也、お父さんと二人で手頃の家があつた所から持主に交渉して、買ひ取り引越す事になつたが、其家には借り主の婆さんが頑張つてゐて、(妾の行き先がないから)と云つて動かず、園也仕方がなしに、二階へ引移つたが此の婆さん頗る意地惡で、下の便所へは園也と女中とを入れず持主が便所を借りて步く樣な騷ぎ便所位ならいゝが、お座敷がかゝつて來ても、取次がないから箱丁が二階を見上げながら、(園也さんお座敷、龜清さんと、怒鳴ると云ふ仕末、到頭園也の方で根がつき入り口に二階から呼鈴を引き一々押して貰ふと云ふが、下の婆さん退かうとせず(藝者は朝寢坊で困りますよハイ。

（大正町人）



白山藝妓評判

◉**高幾田の静子**　このヒトは小柄な可愛い顔附の妓ですか、それで仲々油断が出來ません。このヒトには、慶應の今村さんと云ふ好い人が有るんださうです。試しに「慶應さん」と云つてごらんなさい、キツト「妾、慶應さんに逢いたいわ」と云ふから、みつ豆と來たら日に五六パイは必ずですが、煙草も、お酒も少しも飲みません。それで仲々ハシヤギます。先日も御座敷歸りに自動車めがけて「自働車萬歳」と車の上で立ち上つて車屋さんを困らせたさうです。或學生から――此者は低脳に御座候へば何うぞおからかい被下候。尙名前を道天と申しますれば以後御見知り置き被下候――と云ふ不思儀な手紙を受取つたさうです。

◉**岩泉の政夫**　は背のスラリとした、一寸シブミのある、この土地でも美人連の一人で有るとまで唄はれてゐる子ですが、お酒ときては又土地の若手で一二を爭ふ上戸黨のお頭だからおそれ入ります。年はまだヤツト十八位なのですから末が思いやられます。

◉**福家の福丸**　丸ポチヤのデツプリとした、目に愛嬌の有る妓です。或る御座敷からヨツパラつて歸りしなに、梅月の前の藥屋さんへ入つて「チャイ！何時？」と大聲を上げて通行人を驚ろかした事もあるし白山閣の三階から落ちてホツペタを傷した事もある、と云ふ「飲スケ」です。近頃は例の怪しい時計を持つてゐないさうです。――同じ家のゑみ子、先月來病氣でいまだに休んでゐるが、近頃ではあまりの退屈さに、毎晩ドラをたゝいて流して來る、聲色屋さんに熱をアゲてゐると云ふ話(之は極内密です。)――之も同じ家の重丸、以前矢張りこの家から「福助」と云つて出てゐましたが、この五月に「重丸」と名乘つて出たのです。仲々の茶目さんで家にゐる時など、よく福丸や萬龍とケンカをするさうです。――「何でブク丸」――「何をゴコ丸」と云つた風に。

◉**美松屋の菊之助**　本名才鶴さんには元々四十二三の頭のテレテレな旦那が有るとの話だが、近來御若いのが出來たさうです、外を歩く時は、急足活歩おまけに右手をイヤにフリ上げて指輪を見て吳れがしに光らせるとはキザな奴。

◉**金時**　家を忘れたが、このヒトは博文館の「モーさん」とやら云ふ兄さんにすつかり熱を擧げてゐる先日も市村座であつた面白會へ御客に連れられて來てゐながら「モーさん」を追カケてゐたのを一寸拜見しました。――その折、花喜久家の東助が、平土間の後の方で、鼻をホジつてはその指をナメてゐたのも拜見しました。多分鼻毛に甘味でも附いたのでせう。

◉**かね蔦の貞奴**　見るからに仇つぽい、江戸子らしい、御自分樣の事を「テメエ〳〵」と云ふコハイヒトです。それでゐて、年に二三度

寫眞占斷

新橋　淺田家園治

あなたは大正十年六月までにかなりの煩悶しなければならない事が起る、けれども其れは平氣で居るがよい、さうすれば一月經たぬ間に恢復する。戀はあなたの氣さへ確りすれば叶ひます。病氣の爲めに稼業を休むやうになりますから、今から充分の攝制が肝要です。

は必ずお酒を飲んで泣くさうです。先日自分から白狀しましたが、此の暮に一度泣いたさうです。私も一度拜見したいと思つてゐます。この外照太郎がチョイ〳〵、或人と一緒に紅梅亭の二階で、スッシイ顔をしてゐる事や。――春本の小春は口が少し大きいが、丸ポチャで非常に愛嬌の有る人柄な妓で、――助六がスッキリとした江戸前藝者で、――稲奴は年は若いがカブ(花札)が非常に上手で、――と云ふやうに之までは一本さんの御ウワサです。

◎半玉さんの方は咲男さんが六月號に全部引張り出してしまつたので、餘り書く事もありませんが、――分金桐の相丸に「桐ちやんに飲スケだつてれ」と云つたら「ズーブンだわ(隨分だわの事)と云つて怒りました。尤もボルドにヨッパラッてお座敷でシャチホコ立した茶目なんですから。しかしキリッとした、總べてがツリ合のとれた、好い子です。吉田屋のいろ子は小柄で、割合にオトナシイ子ですが、私には半玉としては少しマセてゐるやうに思はれました。――そこへ行くと、初金やまきの千代龍は實に無邪氣な子で、何日もフク〳〵しい笑顔をして「にイたん〳〵」と云つてナツイて來る、實に可愛いです。抱いてキッスしてやりたいやうな事も有ります。――福すしの定丸も、大きなナリをして「にイたん」と云つてゐますが、この子に「パピプペポ」を云はせると「パップッポ」と云ふやうな發音をします。――松花家の花太郎は。この五月に一本になる筈でしたが來年かに延びたさうです。尤も五月の末に相丸と一緒にシャチホコ立ちした子なんですから無理も有りません。このほか、與太郎が太鼓が上手で、――初龍が江戸子らしい子でと、とても一々書き切れませんから半玉さんの御ウハサも此位にして置ます。

◎料理屋の姐さんを二三人御知らせ致します。――坂上の鳥長の「おしん」と云ふヒトは、元日本橋の西河岸に居たヒトですが、或男と白山へニゲて來たのです。それからと云ふものは、どの御客をつかまへても「白山と云ふ山は何處に在るんです」――「男って薄情ですれ」が始まりで御說敎半分のオノロケをしては客をマエらせてゐる。近頃「鳥長はボル」と云ふ事をチョイ〳〵聞きます。――みよれの「おはる」と云ふヒトは廿六七の見るからにキザな、アタリイ女です、それでゐて仲々浮氣っぽい。(大方宗太郎)

女曲馬師に捧げた學生の戀

前篇の梗概

その當時長崎東山學院の生徒であつた山岡健太郎は或日ピーエム曲馬曲藝團の木戸を潜つて、初めて見知つた一座の女星阿久澤津留子に對して熱烈なる戀に陷つた。津留子は其日技藝の上の過失から甚い重傷を負ふて同地の縣立病院へ入院したのであるが此の戀人の不幸が健太郎に取つては勿怪の幸ひとなつた即ち彼は津留子に接近するの機會が彼女の入院と云ふ事に依つて頗る自然的に與へられたのである。健太郎は自分の切ない心の儘を手紙に托して病床の津留子に打明けた。すると津留子の方からも夫れに對する感謝の返事があつた。這は固より男の熱愛に動かされたと云ふ事よりも女藝人としての立場から或る程度までは異性の贔屓客を惹付ける事の最も悧巧な方法であると云ふ彼女等社會で行ふ普通一偏の概念から來たものが其の大部分であつた。けれど健太郎に取つては其の手紙が百萬の味方を得たよりも猶且つ嬉しかつた。そして飽迄も戀に盲ひた彼は途に前途の何物をも抛つて無斷の家出を敢てしたのである。彼が懷中に深く秘めた愛人の手紙＝彼は夫れ以外に何物をも所持する事なく懷かしい佐世保の軍港にピーエム曲馬團の後追ふて行た。そして團長に會つて自分の固い決心を語つた。團長は又熱心に動かされて其の望むまゝに彼を一座の團員に加へたのである。所が思ひ掛けない一身上の變事が突如として彼の身邊に迫つて來た。

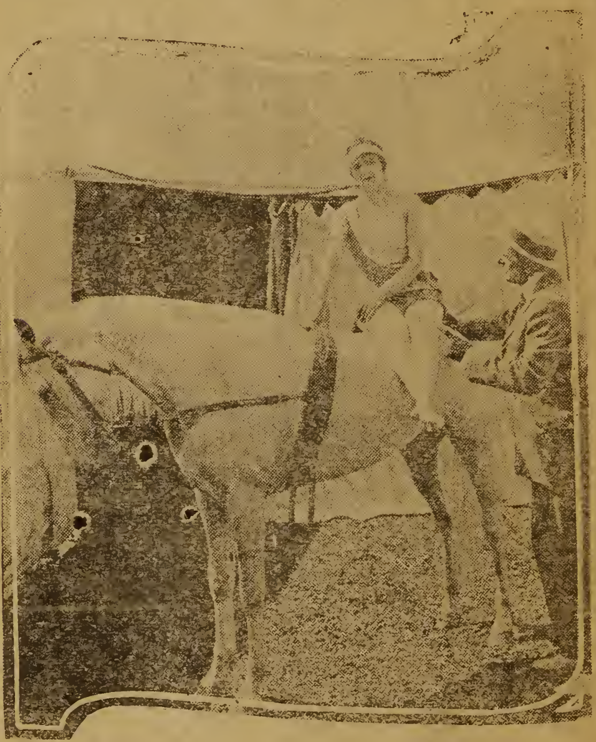
【茨木紫光作】

恩愛の羈

其日の午後であつた。健太郎は平常の如く樂天地の興行場へ行つて座方の手傳ひなど爲て居ると、一座では幹部の一人に加へられて居るKと云ふ外交係の男が彼の傍へ遣つて來て、『君、直ぐ歸つて來いと言つてたよ。團長が。』と言つて、鋭い眼付を爲ながら健太郎の顏を眺めた。

『僕にですね、え、直ぐ歸ります。』と彼は平然と構へながら答へたが、Ｋが自分の顔の表情で總ての祕密を讀まうと爲るらしい其の眼付を見て、津留子との交渉が暴露したのではなからうかと云ふ直覺的の不安と羞恥を感じて、顔が自づと赤くなるのを悟られまいと爲る樣に倉皇其場を離れて小屋を出て行つた。その宿へ歸る道々、自分と津留子との交渉が暴露したとすれば夫れに對して如何樣に辯解したものであらうかと種々に思ひ惱んだが其の考への纏らない内に歩く方の足は何時の間にか彼の身體を宿の門口まで運んで居た。

健太郎は急に全身の顫えを感じながら團長の居る座敷へ入つて行くと其處には思ひ掛けもない彼の父が默然と坐つて居た。そして彼の顔を見るなり『お前は何故私達を騙したのだ。え健太郎……』と居住ゐを直して嚴然と構へた。



『濟みません。』と言つた限り彼は其の傍に坐つたが餘りの事に頭腦が混亂して不安も羞恥も忘れて仕舞つた。

『まだ騙すのも可いとして、學校の方は何うする心算だ？。』と父は又疊み掛けて詰め寄る。

『何うするつて、學校の方は最う罷めたのです。』彼は漸く頭を擡げて斯う言つた。

『誰に斷わつて罷めたのか？。』

『誰に斷る迄もない、僕自身に然う決めたのです。』と健太郎は正當な理窟では勝てない此場の仕儀に野暮に出るより外爲方がなかつた。『僕の身體は僕自身で處置

するのが當然だと考へて居ます。それで…。』と後の言葉を續けようと爲ると、

『默れ！。』と父は一喝して『お前は未だ自分の身體を自分で處置する年齡には達して居ないのだ。生意氣を言ふな！。』と頭から斯う吐鳴りつけた。

『親の心も知らずに、馬鹿をするにも程がある。團長にも既にお斷りが爲てあるんだからお前は私と一緒に直ぐ歸らなくちやならない。』

『大方こんな事であらうと思つて一應は貴下の希望を容れたものゝ直樣人を遣つてお宅に照會して見たのです。其の結果は果して此通りの仕儀ですから私の心配が決して無用ではなかつた譯です。長崎へお歸りになつた上は元々通り學校へ通うて大に勉强して立派な人にならなくちやなりません。』と團長は微笑を啣みながら言つた。

『けれど僕は決心して居るんです。獨立して身を立てたいと思つて…。』

『まだ其麼馬鹿を言ふ。さあ直ぐ歸れ。』と言つて、父は團長に丁寧に挨拶をして、やをら座を立つた。

『健太郎、歸らんか!?』と父は彼を促がして立ち上らうとした。けれど健太郎は凝乎と身動きもせずに默想に耽るのであつた。

『何を考へて居るのだ？早く團長に挨拶をして歸る仕度をせんか。』と父は又呶鳴りつける樣に言つた。

『今更自分の家へ歸るやうなら僕は生きちや居りません。それは最初から覺悟して居るのですから。』と健太郎は遂に斷乎として言つた。

『それは何う云ふ譯で其の樣な決心を爲るに至つたのだ？。』父は彼の言葉を聞くと等しく、其處に初めて何等かの仔細があるものと看取した。

『其の譯は今此處では明言し兼ねます。けれど夫れは何れ後日申上げなければならない時期が到來しますから夫れまで御猶豫を願ひたう存じます。』

『然うか。』と父は溜息交りに頷いて『それなれば爲方がない。ハッハッ。』と淋しく微笑んだ。そして團長に向つて『お聞きの通りの有樣ですから、まあ暫くお預りを願ひます。其内何とか事情も判つて來るでせうから…。』

團長は深く頷いて『承知しました。萬事は私の胸にあります。御安心下さい。』

互ひに見交はす視線と視線とには雙方暗默の裡に何事かを傳へる樣であつた。

『それで學校の方はお前の意志通りに退學と云ふ事にして置くが夫れで可いのか？』
『構ひません。』
『後で悔む事はないね。』
『ありません。』
『諾矣。』と言つた父の顔には夫れでも悲しい表情がサッと浮んで其の眼には涙さへ滲んで見えた。

失望と不安

佐世保の興行は是亦長崎に劣らぬ大入滿員の盛況を續けて無事に打揚げとなつた。そして彼等の一座は小倉市に乘り込み十日間の興行を打つと夫れから日向の延岡に移つて行つた。十一月も末の吹く風寒き延岡停車場前の廣場に九州最後の興行地として葭簀張りの大天幕小屋を建てたピーエム曲馬團は三日目の興行が生憎雨に降られて一座は久し振りに休業をした。

――(健太郎家へ歸れと父の怒る光景)――

秋雨がシト〳〵と降つて、寒さ身に沁む旅の宿に、誰が彈くのかポツン〳〵と何の階調もない三味の音の聞ゆる侘しさ。健太郎は一座の若者と四五人で二階の一室にいぎたなく寢そべりながら愚にも附かん話をし

たり冗談を言つたり小唄を歌つたり爲るのを聞くともなしに聞いて居た。昨日の夜間興行で、長崎の縣病院に入院中であつた津留子が愈よ退院して今日は此の延岡へ歸つて來ると云ふ噂を聞いた彼は、今しがた汽車の着いたのに胸躍らせながら彼女の事を考へて居た。津留子が停車場へ着くなり直ぐ女藝人等の居る宿の方へ引取られるとすると道順から言へば必ず此宿の前を通る筈になつて居るので健太郎は夫れとなく表の樣子に氣を配つた。

『今歸つた――。』

不圖其時聞き馴れぬ男の聲がしたと思ふと『御苦勞さん！。』と店の間に居たSと云ふ囃子方の男が返辭した。

すると今迄二階に寢そべつて居た連中は皆な手欄の所へ出て行つて『津留ちやんよー』『リーちやん、御氣嫌よ！。』など、口々に喚いた。後に一人寢轉んで居た健太郎も斯うなれば覗かずには居られなかつた。彼は恐々ながら肩と肩との間に顏を出して下を覗いた。ピーヱム曲馬曲藝團と大きく書いた二ツの番傘に、折柄降り頻る雨をザア／＼受けながら宿の前を通り過ぎて此方の二階を仰ぎ見て居る二人連れ。それは見覺えのある愛くるしい少女と彼女に附き添ふて歸つた四十男の座方であつた。その愛くるしい少女、可憐なる乙女――それは健太郎の夢寢にだも忘れた事のない津留子その人であつた。彼は異樣に轟く胸を押へつゝ凝乎と瞳を凝らして彼女の顏を瞶つた。津留子は健太郎の想像して居たやうに甚しい衰弱も爲てゐなかつたが左りとて以前の樣な艶々しい顏色も爲てゐなかつた。心持ち頬の肉が落ちて、女優卷の髮の一筋二筋が鬢の所で風に弄られて居るのも淋しかつた。でも彼女は二階から『津留ちやん、津留ちやん』と聲を掛けられる度に舞臺で見せる樣な晴やかな、そして魅惑的な彼女一流の嬌笑を見せてゐた。『すつかり健康なつちやつたね。』『矢張り綺麗な娘だ。』など〻二人の姿を見送りながら誰に言ふともなく囁いて居た二階の連中は頓て自分等の部屋へ歸つて來ると、談話は期せずして津留子を中心に他の女太夫等の品評めや彼女達の持つ艶聞や情話に花が咲いて陰鬱な部屋の空氣が急に晴れやかなものとなつた。

『君は識らないだらうね！、彼の津留ちやんッて娘を。』曲馬の持役以外に何日も餘興の道化役者になる『佐ちやん』と呼ぶのが健太郎に訊いた。

『えゝ、識りません。』と彼は平氣を裝ひながら答へたが直ぐに顔が赤くなるのを意識せずには居られなかつた。
『それやあ識る筈がないよ。津留ちやんは長崎で入院して、此人は佐世保興行で一緒になつたんだから：：：。』と之れも若手の曲馬師として一座に重きを爲してゐる通稱『竹ちやん』と云ふのが嘴を入れた。

——(津留ちやんつるちやん！)——

『でも長崎の人ッてえなら津留ちやんの舞臺を見ない譯はないさ。ねえ君、然うぢやないか。』と佐ちやんは殊更健太郎の同意を求める樣に話頭を向けて『彼の津留ちやんはアレで却々隅に置けないんだからね。情事に掛けたら決してねんねぢやないんだ。彼奴の素つぱ拔きを一ッ聞かせようか？。』
『眞に受けちや不可ないよ。嘘なんだから：：。』誰かが交ぜ返すと
『嘘なもんか、眞個だよ。』と佐ちやんはムキになつた。
『それやあ噂はあるさ。藝人だもの。』と竹ちやんは津留子を辯護した。そして終には佐ちやん自身が津留子に氣があるのだと冷笑されて默言つて仕舞つた。
　佐ちやんの語らんと爲る樣な艶聞が津留子にあるのかないのか的確な判斷は出來ぬけれども健太郎としては無いと云ふ

——(見上げる津留ちやん)——

方よりも有ると云ふ方によリ多くの肯定は出來得るのである。然しながら佐ちやん自身が津留子に氣があると云ふ事は必ずしも冷笑半分の戯談ではないらしかつた。それは最初の質問で健太郎が顏を赤くしたのを有意味に解したらしい彼が瞬間の表情と夫れ以後の態度に依つて明らかなのである。で佐ちやんの語らんとした津留子の祕密も又佐ちやん自身の心持ちも健太郎に取つては共に不安の種となつた。

初めて聞く彼等女藝人仲間の艶聞情話、それが事實であるとすれば彼等は戀愛を一種の遊戯としか考へてゐない頗る不眞面目な内面生活で、寧ろ放縱に近いものであると健太郎は然う思つて強い失望から來る遣瀬ない哀感をさへ抱くのであつた。

視線と視線

◎懸命に稽古を勵んだ熱心は恐ろしいもので、如何に器用な者でも半年は稽古を積まんと舞臺馬場には出られないと云ふ馬術の中の馬術と言はれる曲馬に僅か壹箇月にも足りない短日月で兎も角も舞臺馬場へ出られる迄に漕ぎ付けた健太郎の技倆には流石の團長も舌を卷いて驚いたのである。彼が今日の境遇を自ら選ぶに至つた抑もの動機が何れに在るのか如何なる目的があるのか不明なので彼の父と會見以來一層その疑惑の念を高めた團長の阿久澤は今日まで彼の行動に對して特に深い注意を拂ふて居たのであるが彼が猛烈に稽古を勵む事以外に平素何の變つた事もない眞摯なる態度を見るに及んで段々と其邊の注意を怠るやうになつた。そして其の反對に彼を異數の天才として寧ろ彼が曲馬師としての將來を囑目するやうになつた。

夜に入るとから強く吹き出した烈風が夜一夜を暴れ狂ふた勢か其の翌日はカラリト晴れた晩秋の好い天氣になつた。座方の者は朝早くから小屋の方へ行つて、風に吹きめくられた外圍ひの葦簀を修繕したり天幕の紐の切れたのを繼ぎ合したり爲る然うした樣々な仕事に追はれて平素の開場時間よりは二時間程も遲れた。

朝飯を喰ふと直ぐ他の連中と一緒に小屋へ出掛けて行つた健太郎は高い棧敷裏の樂屋へ登つて行つて、舞臺に出る仕度に取り掛つた。樂屋は男部屋と女部屋に幕一枚を以て仕切られて居るので女部屋の樣子は少しも分らないけれど聞き馴れた聲に依つて女の連中も既に顏が揃ふて居るのが分つた。◎

半袖に仕立てた白ネルの襯衣にメリヤスの肉色パッ

ナを着けると其の上から深緑の天鵞絨に金絲銀絲で刺繡を取つた華麗なる半ツボンを穿き、それから紺足袋を穿いて最後には右の肩から左の腋下へ白地に赤で『ピーエム曲馬曲藝團』と染め出した肩章を懸ける。それが健太郎の舞臺へ出る曲馬の扮裝であつた。

間もなく樂隊の囃子方は例の『さすらひの唄』や『自然の美』と言つたやうな曲譜を騒々しく演奏し始めた既に開場前から三々伍々と小屋の前に人群のあつたのが囃子を始めると漸次に人出を增して札賣る頃には黒山の如き群衆であつた。朝興行の番組は最初何日も男女合同の大曲馬に始まるのが例であるが然し其の皮切りは初め十三四歳前後の少年男女が舞臺馬場に出る。それから順次に年長の男女が一組二組と加はつて終ひには二十名近くの人數になるのである。

健太郎が座方の『知らせ』で樂屋から梯子づたひに下へ降りて行くと、舞臺馬場には今や八人の少年少女が團長の鞭に指揮せられてクルリ〳〵と馬を乘り廻はしながら一齊に兩手を擴げて馬の背に立つたり坐つたり爲てゐるのであつた。彼と一組になるべき仲間は彼の外に男が一人と女三人であつた。女の方には既に馬の背に乘つて居るのもあれば又乘らんとしてゐるのもあつた。彼は急いで自分の馬の前まで行かうとして不圖埒内の女溜り（表面は女太夫等の休憩所になつて居るが事實は商賣上の活きた看板として男の客を惹付けるべく殊更に場外の群衆に顏を曝して居るのである）を見ると二十五歳前後の女太夫三人と何か祕々と囁きながら卓子に凭れて、健太郎の顏を穴の開くほど見詰めて居る津留子の化粧顏が美しく彼の眼に映つた彼女は平素の如うな舞臺姿で休憩所に顏を曝しては居るけれど演技には加はらずに病後の身體を劬はつて居るのである。その視線と視線とが礑と出合ふた時、健太郎は恰も電氣にでも打たれた樣な鋭い一種の痙攣を感じた。そして一旦は外らした彼の視線、それも懷しい！と思ふて今一度彼女の美しい顏に瞳を放つたのも束の間、後から羞かしいとも怖ろしいとも附かん複雜なる感情が一時に彼を襲ふて馬の背に乘るのも夢現、折柄天鵞絨の垂幕が靜々と揚げられて、彼等の一組が馬を乘り入るるべく入口は開けられた。『さすらひの唄』の曲は此時一層高調に奏樂せられて、腹に蹴を入れた馬は輕快なる足取りで續々と舞臺馬場に驅け込んだ。（中編をはり）

……〔次號で完結します〕……

どゝ一

（題）正月　　柳春　吉選

一等　　神戸　田中佇泣子

浮氣せぬとのうれしい誓今日が嬉し
い泣き初め

二等　　芝神明　辰巳家蔦丸

とられやせぬかと苦勞のし初め今日
のあなたの禮者ぶり

三等　　麻布　高野　梅旦

夢に見てさへ嬉しいものを肩を並べ
て初詣で

秀逸　　麻布　高野　梅旦

何は兎もれあ媒酌人樣へ揃つて年始
に行く二人

神戸　田中佇泣子

たとへ屠蘇でも頂きません下戸のお
主に叱れます

横濱　濱田　扇壽

氣まぐれに突いた羽根でもめつたな
方に渡しちやすまない人がある

横濱　成田醉狂人

歳が重なりや重なる程に妾や苦勞が
增してゆく

横濱　濱田　扇壽

水になりたやあの若水に年を取る度
若くなる

群馬　春の家菫草史

高く結ひましよ島田を高くそして恵
方の初詣で

府下　戸田　駄佛

たツた二タ人のきまりの惡さ何でも
ない事笑ひ初め

福岡　胡蝶　子

謹賀新年これみよがしに二人名前で
書いて出す

横濱　牛　月

主が松なら私は竹よ二人仲よく年を
とる

越後　桑原　亮川

屠蘇を結びのお酒に代へて主と添ふ
日の下稽古

淺草　平野水調子

去年の暮から足掛二年逢はれぬやう
だが中二日

尼ケ崎　彌生　三郎

睦つまじく丸く重ねたお餅の上で恐
い顏する飾り海老

京都　京　男

ポンとかへした羽子物言ふてポンと
返つて來る調子

佳作　　大阪　花村　三福

撲たれて嬉しい惚氣の露見染めた春
著は主の紋

淺草　滿岡　豊定

去年の追羽子島田でしたが今年や丸
髷人の妻

尼ケ崎　彌生三郎

露次に住んでも浮世の中に貧しなが
らの祝ひ雜煮

名古屋　阪野　久松

女夫ならんだ門松見ても苦海勤めが
身に泌る

美濃　山田　緑村

添ふたと見て居る此初夢を夢ぢやな
いかと夢に問ふ

どゝ一

そふて三年を迎へた春はかあいゝ坊やの若い母　市外　さくら

二人揃ひの紋付き嬉れし添へて初めの禮廻り　大阪　宮下利二坊

思ひ松竹色にも染めて門に出てつく追羽子を　名古屋　倉田　鯱南

彈き初めの主は誰だよ心が憎くや妾や日蔭の身をうらむ　熊本　鎗水　仙笑

祝ふ男松や女松でさへも仲を取持つ締飾り　名古屋　伊藤　柳風

眞底明したふたりの中にや笑ひ續けの三ケ日　函館　町田鐵眼子

鷄の初音に空あけそめてかるたとる手に日がくれる　市外　さくら

雪の曙社頭の初日惠方詣りも二人連　池袋　左馬

逢ふた初夢本意なく覺めりや憎くや初旭が笑つてる　淺草　散姬人

添ふて初春氣も新玉の笑顏と笑顏の屠蘇の膳　福岡　胡蝶

九尺二間に初めて主と春を迎へた新世帶　本所　吉村　助坊

突いた追羽子お主が受けて笑顏でついたりつかれたり　群馬　加藤　流水

溫床で咲かして玄關で眺め人も羨む福壽草　仁川　敏子

互ひの苦勞も昨日の昔笑顏で擴げる初暦　甲府　細野　一軸

よそへ心は移さぬ白さ神に組まれたかゞみ餅　芝神明　辰巳家蔦丸

選外

命までもと心の中を酒が言はすか屠蘇の醉　神戸　中村　秋嘯

君をおとづりゃ戸はメかざりかどにやあたくまつばかり　名古屋　村川　金鯱

あの人に遇ふて羞かしそむける顏のほてる片頰に初日さす　北海道　矢萩　直作

屠蘇も雜煮も陰膳そなへ兵舍の主へと祈る無事　橫濱　山田　銀汀

嫌なお客に見せてもやりたい主が情の此の春衣　淺草　國坊

添ふて嬉しや初正月のお禮廻りの赤手柄　兵庫　石田　正一

主の寢顏を一寸見て笑ひそつとひそめる寶舟　府下　淋星

昨日のけんか今日の笑顏二人そろうて歌ひけり　大阪　上杉　樂鳥

胸と胸とに七五三繩掛けてやがて添ふ日を松かざり　山田　村山　金夷

好いたお客のお屠蘇の醉をわたしや介抱かして見たい　本所　金坊

掃けば目映しく金砂の樣に初日耀く門の雪　橫濱　山田　銀汀

千歲變らぬ操のしろし剃つた眉毛は松の色　四谷　星野　夏丸

餅の正月無心な正月泣かぬ坊やになる正月　大阪　柳川　寶山

今年や厄年正月うれし晴れた二人で惠方行　大阪　西村世詩男

飾る言葉に殿御が起きて神へ二人の初詣で　名古屋　歌乞食

吾手と晴衣は二人が汗で作り上げたる寶物　大阪　情痴庵艷史

無理な首尾して待つ春の夜の暗い心を賑かに　下谷　白銀小天狗
天下晴れての世帶も嬉し結ふた丸髷禮廻り　神戸　玉　兎
笑顔映りし此の若水で嬉しう今朝とる眉の跡　四谷　緒方六峰子
雪を踏み分け若水汲んでこゝろ寫しの朝ぼらけ　越後　紅屋　艶丸
年も新たに氣も晴々と笑顔同士の新世帶　大阪　佐藤銀月樓
姿あの松主さんは竹よ海老がりん氣で角はやす　大阪　松原　殘雪
目出度く／＼に初春明けて町も賑ふ羽根の音　大阪　泉　その香
今更乍らほれ／＼するは主の正月祝ふ唄の聲　和歌山　青木　靜堂
彼方此方と七五三張る内もそつと見合はす胸の内　名古屋　辰巳家　榮
添ふて髷結ぶ心の底を隱し切れない初鏡　札幌　西村　梓鳥
天下晴ての夫婦と成つて初日拜んで嬉し泣き　下總　椎名　森鳥
積る苦勞も辛抱仕遂げ髷も變つた明けの春　四谷　星野露之助

どゝ一は唄ふものですから、作る方はくれ／＼も此點に留意して、飽くまでも唄ひよい、技巧の面白い、粋なものを作つて下さい、今後短い評を加へます（靜）

川柳

島山打果選

（題）『新年』『鶏』

一等

門松に詫を言ふてる屠蘇きげん　大阪　宮下利二坊
（評）ヤアコレは失敬ハツハツハツ

二等

盗人猫鶏は盥にけつまづき　京都　藤井草之助
（評）あつちの方でもクワツクワツクワツ

三等

課長への御慶ろれつの廻るうち　四谷　星野露之助
（評）ヤアお芽出度う

佳作

獅子舞ひの鬱金財布は見せつける　甲府　細野　一軸
（評）中には銅貨がザク／＼

同
追羽子に頤を突かれる千鳥足　群馬　櫻井菫草史
（評）對手が美人で『痛かアれえ』カネ

同
かるた會去年の娘髷で來る　市外　さくら
（評）これは美イちやんでない奥樣あけまして

同
新年會これはく／＼の雪になり　京都　京　男
（評）萬歳!!さア景氣をつけろッ

同
駈落は宿でボンヤリ鶏を聞き　神戸　田中佇泣子
（評）貴郎、何うする心算なの

同
横町も新年らしい人通り　府下　戸田　駄佛
（評）角兵衛獅子も混つて……

同
御年始のくづれは仲の町で逢ひ　支那　鈴の家豆六
（評）ヨー發見したぞ

同
今日だけの丸髷らしい初詣で　麻布　高野　梅旦
（評）嫉けますかネ

同
何思ひ出したか鶏は土を掘り　京都　草之介
（評）豈夫小判ぢアないでせう、クツ!!クツ

同
新年に目立は下女の白い足袋　美濃　山田　緑村
（評）眞個ですれ、オヤこれは御免なさい

同

馬乘りに大將雛を苛めてる　大阪　柳川寶山

(評)大童になって『畜生々々』

同

大びらに醉つぱらつてる松の内　群馬　加藤流水

(評)幾ら飲んだってベランメー正月だい

同

夜啼きする鶏に近所の物思ひ　淺草　滿岡豐定

(評)何うしたんだらうねえマア氣味の惡い

同

初鶏が足もとで鳴く氣持よさ　神戸　駄々子

(評)サア縁起がいゝぞ此勢ひで出かけろ

同

山番は鶏も五六羽飼つて置き　北海道　矢萩直作

(評)寒いから一羽締めるかナ

同

アヲ羽根が乘つてと俥追ひ駈ける　甲府　細野一軸

(評)車上の主が『ホーラ』と投げて吳れる

選外

名刺受け曰く近縣旅行中　尼ケ崎　三郎
新年の闇に柏手ひゞくなり　神戸　駄々子
初鶏を蕎麥喰ひかけた頃に聞き　群馬　菫草史
鶏を羨ましがる伊勢參り　京都　京男

新年の顔が出てくる松の内　府下　左馬
新日記買ふてそのまゝ飲み廻り　大阪　利二坊
初鶏を夢に聞いてる獨身者　神戸　駄々子
新年と書く丈坊はえらくなり　同　兎玉
新年を婦ア天下でお芽出度い　牛込　洲三男
又一つ年を取りたり小町姫　名古屋　柳風
新年をたばねて郵便夫投げて行き　芝　小暮人
縁遠く姉新年を又迎へ　下總　運天志
一番鶏鳴く頃起きて笑はれる　神戸　秋嚼
三ケ日お妾芝居へなきに行き　市外　さくら
鶏が啼て木魚に力づき　四谷　夏丸
鶏の聲寢たらぬ顔が空を見る　山田　金夷
新年も面白く無い年は行く　和歌山　靜堂
鶏をうらむ寢坊のお三どん　大阪　その香
鶏肉屋産まなくなると毛を挘り　横濱　仄人
新年の客は何れも赤い顔　美濃　緑村
作り物荒す名手や鶏　大阪　殘雪
明鶏や岩が八卷水火食ふ　大分　翠生
新年が消される樣に松がとれ　横濱　銀汀
初夢がよくて朝から飲み始め　甲府　花傘
臺所へ御慶目茶をはうり出し　淺草　豐定
岡ぼれの羽子板そつと羽根をつき　同　國坊
鶏に鳴かれて歌留多箱に入れ　越後　亮川
鶏の啼く頃やうやくに春着出來　四谷　露之助
花嫁の夢へ初鶏春を告げ　札幌　粹鳥
酒呑みは布袋の樣に腹ふくれ　和歌山　靜堂
今年も相變らずと飲み歩き　府下　駄佛
初鶏も皆んな寢棒で鳴きあぐみ　同　淋星
初鶏を聞いて盗人は床に就き　名古屋　久松
歌留多會目が八方に底光り　函館　鐵眼子
初鶏がもう啼くころと湯へ急ぎ　麻布　梅旦

恥かしいと云ふ年がない鶏娘　本所　柏葉
鶏が追ふに亭主は鳴いて見せ　京都　草之介
死に近くなりて新年お目出度う　大阪　艶史
壁一と重初鶏啼いて長屋起き　名古屋　歌乞食
お正月が一年あれば子供云ひ　大阪　世詩男
新年にや女中も意匠の初化粧　小樽　笑てつ坊
醉つぶれとりの聲きゝさむくなり　越後　艶丸
鶏の聲もう落ち／＼と眠られず　下谷　小天狗
羽子板があちこちに舞ふ赤手絡　同　同
新年は女の姿が亦目立つ　名古屋　鯱南
初鶏と一緒に起きて風邪を引き　神戸　佇泣子
一杯やるべく鶏一羽提げて來る　北海道　直作
又一つ年を戴く有難さ　神戸　秋嚼
双六に負けても菓子は孫にあり　横濱　醉狂人
新年會先づどんと出す大火鉢　大阪　寶山
雜煮腹鞭々として日を暮らし　淺草　水調子
啞の子の人の振り見て目出たがり　赤坂　芳晴
老惚れの互に祝ふ年賀狀　甲府　芳水
同じ事繰り返しては四角張り　芝　梨花
放蕩者年を重ねて馬鹿太り　熊本　仙笑
初鶏がないても用がかたづかず　赤坂　正成
山の神新年と聞き質に行き　横濱　半月
上戸たう上戸の家をまづまはり　淺草　豐定
新年は目出度いものだと又一杯　大阪　新字樓
居機機嫌下戸丈け赤い顔になり　横濱　仄人

選者吟

角兵衛獅子子守の顔へをつけつる
追羽子へ口三味線がまぎれ込み
軍鶏酒をすけたは銀杏返し也

（題）書初　井上啞々選

天

書初や母人に似て書を能くす　麻布　高野　梅旦

地

筆端に黎明迫る吉書かな　越後　桑原　亮川

人

書初に太郎次郎の端居かな　四谷　星野露之助

五客

書初や障子明るき書覺　下谷　白銀小天狗

技巧の句あり平凡の詩や筆始　札幌　青山　白水

書初の一ト間明るし富士眞向　牛込　松　柏

書初に今日は正しき袴かな　本所　一見　柏裏

書初の巨硯に墨を湛へけり　神戸　時田　水草

選外佳作

書初や女ながらに書を教ゆ　麻布　梅旦
書初や手を膝にして太郎冠者　府下　駄佛
書初や獨り座したる大廣間　神戸　六魚
書初や名墨香ろ大廣間　大阪　銀月樓
書初や庭に遊べる鶴白し　神戸　秋嘯
若君は三國一の吉書かな　下谷　小天狗
歌に詩に思ひ〳〵の吉書哉　麻布　梅旦
書初や至誠の二字を筆太に　越後　亮川
書初や全紙を前に及び腰　神戸　佇泣子
たかぶれる心靜めて試筆かな　同　秋嘯
我妹子が心ときめく吉書哉　遠江　多駄夫
奔龍の墨の香殘ろ唐紙哉　名古屋　柳風
書初めの筆とツぷりと濡らしけり　府下　駄佛
硯面に書初めの筆馴らしけり　同　同
賴まれて風に一字や筆始め　麻布　梅旦
孫に墨磨らせて老の吉書哉　同　同
書初に乞はれしまゝの戯れ書哉　同　同
書初の今年傘屋のでっち哉　大阪　幽涙
書初や紙をす跳れ出す事幾度　横濱　銀汀
一門の吉書に狹き座敷哉　遠江　多駄夫
書初や障子の外の梅匂ふ　神戸　秋嘯
書初に初日さしたる一と間かな　北海道　直作
書初の部屋に二日の旭かな　神戸　佇泣子
書初や春を題する自畫自讚　同　同
書初や初孫を見ろ翁あり　大阪　世詩男
書初めや伯父が手を導く筆の跡　名古屋　歌乞食
末の子やへのへのもへの筆初め　朝鮮　五曉
書初や振袖たろゝ靑だゝみ　相州　月の子
墨の香や試筆に和氣のみなぎりて　芝　梨花

選句餘言　井上啞々

萬年筆全盛の今日では、古風な書初などは僅に書家の御弟子達が行る位のもので、一般家庭では忘られて了つて居るに相違ない。我等幼年の頃には二日は未明に起き出で、晴装して座敷に正座し、緋毛氈を敷き、唐紙を展べ、大硯に香高き墨を磨り流し、やがて巨筆を持ちて紙に向ふのであるが、幼き腕では容易に大字を物し難い所から、介添の祖母が、背に廻つて、手を持ち添つて呉れるのであつた。懸腕直筆は言ふまでもない。書き終つた松竹梅の文字墨痕淋漓たるを眺めては幼心にも流石に會心の笑を洩すのであつた。父母は

書初めや社殿に光る筆の跡　大阪　艶史
書初や力こもりし忠一字　四谷　露之助
書初や窓朗らかに鳥影す　越後　亮川
書初や暗きに灯す庵の窓　同　同
病床に吉書の筆を召されけり　同　同
書初や八十翁の書流し　福岡　淡月
書初めに坊は衣紋を正しけり　美濃　緑村
書架闌に整へり試筆の墨薫る　札幌　白水
額寄せて師の書初に息凝らす　淺草　水調子

新年一言

汀果

故意とらしい「當て込み」や、俗惡な採りたつぷりの句は頂戴しない。酷いのになると川柳と狂句を穿き違へてゐるのさへある。さうかと思ふと折角捉へた「コツ」を口調でブツ毀してゐる人も大分ある。川柳は何處までも輕妙な諷刺と、洒脱な、皮肉が生命である。自然に觸れ、人生に觸れ、事各に、深い哲學味を帶びてゐなければならぬ。亞いでは、型を尊重しなければならぬ。川柳には川柳の型がある。尤も口調さへよければある程度まで型が壞されてゐても、みつともなくないが……併しそれは初心の人には難かしい。

書初の馬鹿に出來ない男哉　四谷　夏丸
書き初めを師に見せ行かん雪の道　大阪　その香
此の春は學寮に寒く書き初めす　同　同
書初に芽出度き文字を陳ねけり　山田　金夷
書初や下手が書いても富士の山　横濱　光水
書初にいよ〱晴れし窓日哉　大阪　虚石
愛らしき少女姿の吉書かな　横濱　蕉鳳
勅題に因む吉書や御代の春　同　扇壽
蕉翁の名吟借りて吉書かな　同　同
書初に暫し靜けき團欒かな　本所　柏裏
書初や金屛に浮く神の燭　同　同
書初の孫に祖父母の笑顔かな　大阪　殘雪
日のさして廣間ほの〲書初す　同　樂鳥
龍と化す墨の走りや筆初め　四谷　柳蛙
書初の大筆に墨の馨りけり　神戸　玉兎
神童の宮に召されて筆初め　神奈川　月の子
書初に才子の家の小さきかな　神戸　玉兎
六朝の書風健にして書初す　大阪　南花洞
どつぷりと墨含ませて試筆かな　牛込　松柏
書初や誰に見せても目出度い字　京都　京男
書初や兄弟三人の部屋靜か　大阪　利二坊
書初や床に芭蕉の軸掛けし　同　同
墨の香の今朝なつかしき試筆かな　同　利二坊
龍天に昇る勢や筆始め　三河　草楓
書初めの机取卷くや五六人　尼ケ崎　三郎
ほろ醉ひてわれ面白く書初めぬ　同　同
寺子等の書初懸くる四壁哉　横濱　翠泉
末の子の上手なれかし筆初め　東京　未曾二
かき初める手振り愛らし紅葉の手　福岡　城月
書初に新筆の鞘拂ひけり　群馬　菫草史
皆並ぶ部屋の狹まさや書初め　神戸　六魚

その上出來を賞め稱へ、御褒美として蜜柑等を呉れたのである。この床しい年中行事も今は廢れて萬年筆や鉛筆で、石版刷の繪葉書に口語體で、冗漫極る文字を金釘流で書き流すとは、さても〱殺風景な世の中になつたものである。

書初の金釘流と申しけり

次號課題	どゝ一	川柳	俳句
二月號（締切十二月廿五日）	三味線	酒、雨、戀	二日灸
三月號（締切一月廿五日）	雪	緋縮緬	鶯

○用紙は葉書又は同紙形○一枚へ一句以上書かぬこと○賞金は一等一圓二等五十錢三等三十錢（二月中に送る）○宛名は樂文社編輯局

投書歡迎

（皆さんの町内の評判を遠慮なく原稿紙へ書いて送つて下さい。）

町内評判

不平・感謝・告白所

メスの光

旦夕に迫る大本の命脈
皇位を無視して不敬罪に問はれん

▽怪物の正體は何？△

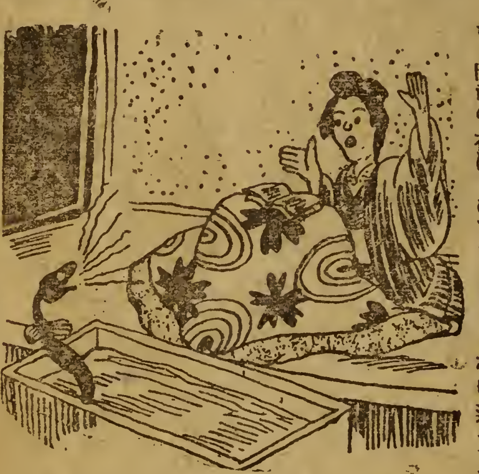
丹波國綾部の里に蟠居して、時代革新の一大宗教と自ら誇つて居る皇道大本教に就いては、曩に本誌が其の内情の一斑を紹介した通りであるが、其の後矢張り未だに社會の各階級から疑問視され、一方當局からは飽迄邪教しされて、取締りの手は却々に緩みさうもない。從つて思想界は勿論のこと。有ゆる智識的評論と標傍する、雜誌や言論界の誌上は、何れも之を幾様にも解釋批判して、讀者の讀書慾をそゝつて居るが、要するに何事はない其の眞髓は極めて平凡なものである。之に對し麗々しく嚴めしい解釋を下す必要もなく、内容は寧ろ頗る薄弱なもので、本誌の前號で、紹介したものと何等變るところがないものと思はれる。それにも拘はらず噂は次第に高くなつて當局の烱眼は益々過敏となり、其の結果彼等の宣傳印刷ものは、片ツ端からドシ〳〵押收されて、同教の宣傳機關は全く破滅して終つたのである。其處で最後の宣傳機關として經營したものが、例の大正日日新聞

の復活であるが、之とて如何に無限の財力を傾注すればとて、永久に發刊することは困難で、今にも經營難に陷るだらうと噂とり〲である。事實關西方面は兎も知らず、關東以北や中部地方に於いては、一の完全な取次店すら持たないと云ふ噂である。是等の大本教に對する非難は事實か否かは斷言の自由も持たないが要するに世間の批判が高くなるに從つて料金要らずの大廣告をなすものと云ふ信者の聲は、必ずしもそれが負け惜しみの言とのみは信じられない。

▽全く木伊乃になる△

斯くの如く噂が高くなればなる程不思議にも同教に關する忌はしい風聞が生れて來るのである。其の風聞の中には隨分妙な面白い話も少くないが、其の一例を擧げると、現今文壇に於いて名聲時めく某文士の如きは、此の大本教を信じた結果、十餘年間も苦樂を共にした最愛の妻を離別すると騷ぎ廻つたり、其の他某將軍の如きは、重い現役の重職を棒に

人語を發する鰻の靈



關門海狹の冬の空は、どんより曇つて可なり寒い。玄海を吹き荒ぶ海風が絶え間なく、空は一面に鼠色に曇つて、粉吹雪の降る日が毎日續く。淀泊船の灯が悲しさうにゆら〱と波間に搖れて、九軌の電鐵の軌しる哀音が寒風に顫えて、パッタリ止むと門司の夜は、ひつそりとして、全く人通りも絶えるのである。此處で目拔きの場所に店を構へて居る角長と云ふ料理店がある。現在藝妓を數名抱へて、土地では一流の料理店に數へられ、可なり華々しく來客を呼んで居るが、四五年前までは鰻料理を專門とする、些々たる一料亭に過ぎなかつたのである。其の夜は積つた雪が尺餘に及んで、暖國である筈の門司市としては、可なりの大雪であつたが、角長では雪の夜のことでもあるので、未だ宵口から大戸を下して、午後十二時頃には料理人も例の通り遊廓に出かけ二人の女中も何處へか所用に趣き、女許りの稼業のことゝて、女將が獨り炬燵に入つて、サラ〱と雨戸に當る粉雪の音を聞き乍ら、小説を讀み耽つて居た。すると折柄の雪を踏んで、一人のお客が店の雨戸を叩いて「今晩は、鰻は出來ますか」と二聲許り訪れたので、女將はハイと簡單な返事をし乍ら、炬燵を出ようとすると「鰻は無い」と、何處からともなく答へるので、お客は其の儘挨拶を殘して歸つて行つた。さして廣くもない家の中に、現在自分より外には誰も居らず、殊に今日仕入れた許りの澤山な鰻は、店の板場の下の水槽に入れて置いたのに「鰻は無い」と云ふ聲は、何處から湧いたか女將は獨り不思議に思つて、薄氣味惡くなり、これは必つと鰻の祟に違ひ無いとて、回向をした上、爾今鰻料理は自宅では一切料理をしないことにした――と女將の事實談。

天才一條久子の死

チチヤボ(本名赤岡久)が鉛毒にて死んだ。十七歳のあたら天才の花を散らした。一國の大臣の死よりも悲痛な出來事である石田猳に戀して叶わず、悶々の情を胸に祕めて京都で死んだ。が、初戀の町田金嶺が葬式の指揮官になつて彼女の安樂往生を祈つた。樂隊でブカ〳〵ドン〳〵行列をつくつた彼女の葬式は歌劇界初めての盛んなものであつた。青山、高德寺の境內に『噫天才一條久子の墓』が建立するのも近日の事だ。日記の頁の坊

振つて、家族を引纏めて丹波綾部に移住した實例もある。其の他同教の幹部には臺灣方面に關係ある知名の士が多い丈けに、目下臺灣地方の智識階級には、牢として拔くことの出來ない潛勢力があるやうに思はれる殊に臺灣總督府では、大本教の宣傳の盛んなころ、逸早く警部一名を態々綾部に派遣して、調査させたところ、其の警部が反つて同教の爲めに魅せられて、甚だ怪しい報告をしたので、更に一名を派遣して再調査を命じたところが、之は全く同教に歸依して終つて、到頭何の要領も得ることが出來なかつたと云ふ話である斯くて忌はしい噂は噂を生んで、丹波の綾部は恰度過激派の巣窟のやうに思はれ、甚だしきは赤露の過激派と連絡あるなどゝさへ稱されて居る果して之が事實かどうかは明言の限りでないが、若し夫れが無稽の噂に過ぎなかつたとしたならば、其の世間が強ひる非難攻擊も甚だしく、同好の爲め實に氣の毒と稱すべきであらう。殊に又事實であると假定したら、夫れこそ只事では濟まない、社會の爲めにも捨て置く譯には行かぬのである。それかあらぬか是迄隨分此の邪教か妖教か、探險の爲めに各階級の智識階級の連中が、隨分押しかけて行つたものである。

▽婦人の貞操を弄ぶ△

殊に例の加藤確次氏の如きは、南洋拓殖會社の重役を罷めてまでも、此の探險に從事したさうである。其の顚末は先達部下の各新聞社の人々や、之が取締に沒頭して居る其筋のお歷々を精養軒に招いで詳細に發表した。其の他中村古峽氏、河口慧海氏等も、有ゆるメスを縱橫に振つて此の怪物の正體の發表に餘念がない先づ加藤氏の話によると、歸依した婦女子が姦せられたり、信者は社會主義者であつたりするが、他の顚末は兎も角として、現在の綾部警察署長は稀れに見る熱心な佛教家であつて、土地に於いては相當に溫厚篤實な警吏と噂されて居るに、此ことあるとすれば、甚だ怪顚千萬な譯である。要するに同教の今日あらしめた

ちやん、●●●牛若丸等が當り役である。東京オペラ座の明星として乃公が引張り廻したのも、彼女の非凡なる妙技を認めたからである。彼女は昨年來、パプテスマのヨハネの如く十七で死ぬ事を豫言して居た。●●●牛若丸に扮し乍ら、眞劍に舞臺で泣いて居た家庭に淋しく育つた彼女は舞臺でも本當に淋しい子供だつた。マンドリンを上手に彈いた。死ぬ五日前、堺千代子の許へ『身體を大切になさい』と報りした。その時、彼女は死ぬ事を覺悟して、ひそかに友達と別れを惜んだのであつたらう。（ゆめ坊）

○金龍館の幕内主任の石田一郎といふ人は、大の勢力家で資本家でとても凄い男色家。コーラスボーイに入りたてに顔でも綺麗だと、女でも口説くやうな調子でやつてくる大低の奴は今時織田信長に森蘭丸もきめこんではいられはしない。然し北村武夫といふ男はすつかり身を任したおかげで、此頃はいゝ役につくし、金側時計はブラ下げるし、流行服は着せてくれるしすつかりいゝ出世をしたもんだ。言ひよられてすげなく斷つたコーラスボーイの一人、北村の出世を眺めて口がふさがらないとは無理もない話さ。

◉婦人病の新奇藥　婦人病の内月經閉止、不順、不通、困難はあらゆる婦人病を引起す基因となり殊に子宮病及血の道症を續發するを以て多くの婦女は此月經閉止症の爲め常に煩悶苦惱しつゝある處なるが今回東京北品川町百五拾四番地日新館製劑部にて創製せし月やく下し通經劑は有名なる婦人專門病院長の新處方に基き多年實驗の上完成せるものにて如何程長き月經閉止も忽ち安全に快通流下し且つ月經不通月經不順月經困難より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血惡血毒血及血塊を一掃するに極めて峻烈顯著なる特效ある最新奇藥なるを以て近時婦人患者の需用頗る劇増し且つ全治謝禮狀寄送者夥しと云ふ。

は、一に時代の然らしめたものとは言へ、曩に同教が孤々の聲を揚げて盛んに喧傳に熱中して居た當時の、京都府警察部の取締りに手拔かりのあつたことは、同地方民一般の輿論である。

▽聖代の蓮華往生？△

大本教が婦人の貞操を片ッ端から弄で遊ぶと云ふことが、事實であるとすれば、頗る面白い由々しい問題であらう。天理教が屋敷を拂つて田賣り給へと云ふ嘲言と同一であつて隨分興味あることである。曩に本誌が紹介した如く、美人の稱ある淺野文學士の令姉を、御大出口氏が岩屋に連れて行つて、鎭魂したが其際妙なことがあつたとか無いとかで、一時兩氏の間柄が圓滿に行かなかつたと云ふ噂も、今となつては強ち無形なことでもないとも思はれる。昔延命院に蓮華往生と云ふものがあつたことは衆知の筈であらう。無理解な迷信から蓮華の中で合掌したまゝ、肛門から槍を突き通されて慘殺されたことは未だに人の口の端に殘る傳說である。從つて大本教も又婦女を姦し、揚句の果てが身も世もあらずに逆せて居る彼等から、金錢財貨を卷き揚げること位ゐは、遣らうと思へばやれぬことでもあるまいと思ふ併し若し夫れが事實であらば、大それた重罪であらう。殊に此の頃仄聞する處によれば、同教は押收された印刷物中の教祖豫言に、大正十一年には戰亂が起つて、其の結果統治權は全然大本教に歸して終ふなど、、思ひ切つて途方もない宣傳をしたが夫れは全く我が皇位を無視し、重ねて皇室に對し極度の不敬な文言であるから、近く教主出口氏、淺野修齋會長等を、不敬罪として告發の手續をするさうで、目下種々なる確證を搜索中であると云ふ。尙ほ警保局に於いては、根本的に大嚴査を開始することゝなり、其の本部を剿滅させる爲めに、之又近く大鐵槌を降す筈であるとも傳へられて居るが、さうなれば大本教の命脈も、全く旦夕に迫つて居る譯である。然し當局が如何なる手段方法に訴へて之に臨む

か此處許お役人樣と長髮連の勝負でハツケヨイ。(完)

■片假名のルビ

横濱日々新聞に寄稿して居る某氏が、其原稿に、片假名でルビを振るべき處を、平假名に直されると、嫌味になつていけないからと、わざわざ片假名のルビを原稿に振つて置いて、其上片假名を平假名に直さぬやうにと、いくら注意まで書添へて置いても、それが印刷される時には、矢張平假名に直されて居るので、折角の注意を無にしたことを詰ると、新聞當局者の返答に曰く「小新聞のことですから、片假名ルビの活字が乏しいので、仕方がありません」まさか日本一の大政黨政友會の横濱市に於ける機關紙ともあらうものが、片假名のルビの活字がないことがあるものか。冗談も大抵にして置け。

■葵館と電氣館の喧嘩

赤坂葵館のプログラム新聞のアオイと淺草電氣館の同くデンキカン、ニュースが、近頃は犬と猿だ。これは日活新輸入の外國映畫の最初の封切館は、從來電氣館と相場が極つて居た處を、近頃どう云ふ風の吹廻しか、赤坂の葵館に時々封切の株を取られるので、電氣館側の妬みから、自然と葵館に對して攻擊の矢を放ち始めたらしいが、餘り賞めたことではない。淺草帝國館の第一新聞が、一時他派攻擊をやつたが、それは他社に對してのだから、まだしも罪は輕いが、今度のは、同じ日活系、殊に電氣ゝ葵も直營館だから、兄弟喧嘩同樣で、見つともない。殊に葵館と來たら、外國人の見物も多く、高級常設館と目されて居るのに、何の必要があつて、電氣館と喧嘩するのか、其了見がわからない。却つて品を下げるやうなものだ。それも讀者の盲蟲共なら兎に角、記者までが其仲間入して居る氣が知れない。それよりも活動いぢめの方面に抵抗した方が活界の爲どんなによいかわからない。反省せよ。

■電氣館マーベル

淺草電氣館の名物女給、電氣館マーベル事輪井田とり子さん、此頃はマーベルよりも、常盤座に出て居る石井薫ソツクリの顔になつて來たが石井よりも容貌がよいだけに得だ。

■贋松之助

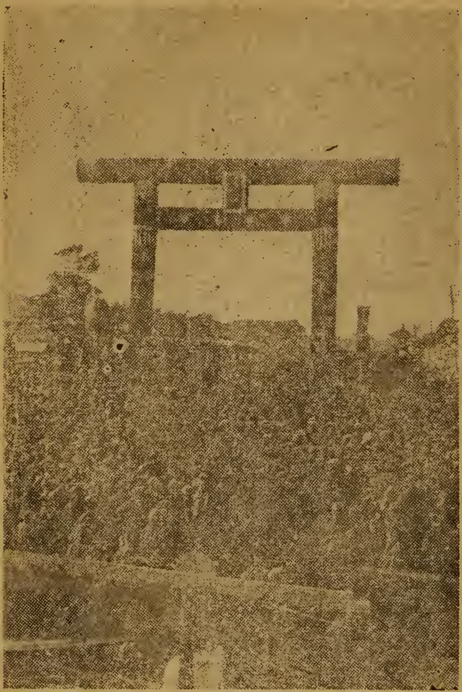
目玉松之助、相變らず「日活を辭し、目玉と改め……」云々の口上看板を掲げて、地方巡業をして居るが矢張それを日活京都派の松之助其人と思つて居る目明き盲がまだ〱地方にはあるやうだ。併し此男何處迄惡運の強い男だらう。人の名を騙り世人を瞞著して、それで別に大した制裁も受けないとは、餘程よい月日の下に生れて來たに相違ないが、それが何時迄續いて行けることやら、「相馬大作」「忍術太郎」「佐野鹿十郎」の三ツより外に出し物がない、尾上松之助の猿眞似ばかりして、それで何時迄も柳の下に鰌が居るものか。やがて化の皮が剝がれて、世間から葬られる時は目前に迫つて居ることに氣が付かぬか。

■困つた警官

先日淀橋へ用があつて行つた時、煙草專賣局の少し先、水道の役所の前の交番に寄つて、道を聞かうとしたが、立番して居る一人の警官は、荷馬車の馬方と何やら話をして居るから、其邪魔をするのも氣の毒と思つて、モウ一人交番の内に居る警官に聞かうと思つて、聲をかけると、其警官は辨當箱を小風呂敷に包んで居ながら、見向きもせず、「外へ行つて聞くがよい」とツンケンした返事に、自分もムカツとしたので、其儘立去つてしまつたが、こんな警官があるので、其筋と人民との間が圓滑に行きかれることが多いのだ。人民に對して深切にするやうにと、いくら警視總監や署長の訓示があつても下にこんな人間があつては、切角の訓示も何の役にも立たぬわけだ。

■橫着な愛活家

明治神宮鎮座祭拝観者雑観



十一月一日明治神宮鎮座祭青山六丁目の表參道一帶はいつの間にか人間の黒波になつて青山には共同便所が一つもないのでそこらの横丁といふ横丁は早速共同便所の代用に供されて、文句を言ふべき青山署の巡査は一人殘らず表通りで聲を嗄らしてゐる仕末だつた。十一時頃九條勅使を先頭に金ピカの文武百官連が退けて、一時半から入れ初めた、淺野侯の蛇池をうめたあとに大穴があくやら、警官の押へてゐる綱など十萬位づつ固まつてゐる群衆はへもなく押入つてしまうやら。此日一番御苦勞樣だつたのは青山署の巡査で、參道前に一列にならんで突切る人を警戒してゐたが非番巡査も出てゐる位だから交替もなく晝飯抜きでやつてゐた。も一人は、火防といふ肩章をつけた巡査樣の人がメガホンをもつて、電車の運轉手臺に飛乘り『あぶないあぶない』とやりながら參道前を過ぎると反對の電車にのつては『あぶない、あぶない』やつてゐたが夕方頃は『オーオー』としか聞きとれなかつた。夕方雨が降り出し一本四十五錢の傘が大勉強一圓也は驚いた。二日は一般人は午後から。やつぱり火防先生のメガホンがアー〳〵やつてゐたが午後には電車がとまり、巡査は降參の印でもあるまいに白旗を振つては一固りづゝ入れてゐたが、昨日より益々人間がふえるのでイルミネーションを消して了つた。

活動寫眞の連續物の紋切型となつて居る覆面の怪人物が誰であるかを知らせてくれと、地方で其寫眞が興行される時、其地方の愛活家から、東京の活動寫直雜誌宛で、質問をして來ることが珍らしくない。それも唯知りたいと云ふだけならば、まだ罪が輕いが、中には其疑問の人の何たるかを懸賞で見物に解釋を求めて見物の好奇心を惹かうとして居るのに應じて、我こそ其受賞者とならうとして、自分が考へて、それで中てると云ふのなら、正直でよいが、そんな骨折をせずして、知つて居る人から聞いて、それを受賣して、甘い汁を吸はうと云ふづるい了見の人があつて、質問を出すのには、雜誌當事者も困る。底を割つては興味が殺がれるし、第一そんな不正手段で勝利を得ようとする人々に力を添へてやるやうなわけだから、それは出來かねる。さうかと云つて、返答しなければ、中には矢の催促で、答へを請求して來るから、始末に了へぬこんな横著な自稱愛活家は、宜しく

相當の制裁を與へてやられればならぬわけだ。

淺草名題三馬鹿

無疵な人間に言はせればヤレ低能の拔作の腑ぬけの足りないのと、めちやくちやに揉んでしまはれる白痴と言ふやつ無ささうに見えて是ほどしこたまあるものはないだらう。市内でも少し繁華な町になると必ず一町内に一人くらゐは、その飛切り上等の者でないまでも夫れに準ずる程度のものがあるから面白い、その馬鹿者をびろひ出して筆にかける僕なんぞも、當節の利發の人に言はせれば『手前からが既にもう馬鹿ぢやれえか』と言ふかも知れない。その馬鹿の中の淺草製飛切の上等品を二つ三つ茲に馬鹿らしい大聲を上げて東ウ西イ〱と御紹介に及ばう。

彌あちやん

▼もう餘程の老爺だが、此土地では最も古顔の方で、それだけに有名な男である。毎日奥山邊りの露店商人の車を曳いてやつたり。荷の積み卸しなどを手傳つて、幾何かの賃金を貰ひ、それで惜しくもない露の命を繋ぎ止めてゐるのだが、是でも元を糺せば相當の家の息子であつた。親の代からの簾職で、今こそ餘り振はない商賣だが、腦味噌さへ確かなら是でも優に妻子位は養ひるのであつたが、彌あちやんが御目出たく産れたばかりに、此人の代になつて簾編む時の重しの分銅と一所に身代まで棒に振つてしまつて、住みなれた親の讓りの家屋敷も、そこはそれ至極涼しく出來上つた人間だけに、何の惜し氣もなく、人手に渡して自分は天蓋無住、萍のやうに今日千住に泊るかと思へば、翌日は下谷の萬年町と木賃泊りの蝸牛生活、けれども中學大學を卒業させて貰つても未だ獨りで喰へず、百本杭のダボ鯊もどきに親の向ふ脛へ喰ひ付いて離れぬそんじよそこらの理巧息子より、手前で働らいて喰ふだけも馬鹿どころかたいしたものである。

由ちやん

▼是も一寸八分の觀音さまと共に淺草名物の一人で何時も紺絣の着物を着て、活動寫眞の畫ビラや廣告を澤山抱へ込んで『屑うい〱と』屑屋の眞似をしさうかと思ふと又『ワン〱〱〱』と四ツ這ひになつて犬の眞似をしたりして六區邊りを歩いてゐるが其人氣はたいしたもの、それで年はと言へば右正に二十五歳と云ふのだから驚かざるを得ない。此由ちやんは斯うして乞食同様な生活をしながらも小ざつぱりした服裝をしてゐるので、段々調べて見ると家は千束町にあつて相當な身分の者なのであつた。そればかりか一般の白痴とちがつて文字を相當に解する事だ、活動其他の興行物の看板やビラをすら〱と讀んで時に、傍人をアツと言はせる事もあれば、子供のやうに往來へ白墨で惡戯書きをする事なども屢々見受ることがある。是でも由ちやん相當身分ある家の子で且つ産れながらの馬鹿でない事が證據立てられる、が困つた事には時々由ちやんの由ちやんたる處、馬鹿の馬鹿さ加減を發揮する。遂先頃も夜半に『火事だ〱』と大聲で千束町附近を驅け廻つた事がある。スワとばかりに何れも刎れ起きて屋根に上つたり、物干へ上つたり、交番へ驅け付ける、消防署へ電話をかけて問ひ合はす、大騒ぎをやつてるが、サア火事のありかゞ分らない。何處だらう〱とあつちこつち見てゐる處へ又驅けて來た由ちやん『やあ面ちれえな嘘吐いたんだぜ』と町内中の利口者を笑つて歩いた。是ぢやどつちが馬鹿だか分らない。腹も立つが何しろ由ちやんの業ぢや喧嘩にもならなきや、訴へも出來ないので何れも堅くした拳骨を抱へて又冷たくなつた床へもぐり込んで終つた。

大工だあよ

▼名前が分らないので、大工だあよで通つてゐる女がある、此女は四十にもならうか子供を一人連れて、淺草邊を『中村雜吉だあよ、大工だあよ、丁半したゞあよ、赤い着物着てるだあよと』のべつに口吟みながら歩いてゐる。それでゐて物貰ひでもなきや狂人でもない處を見ると、確

かにやつぱり前兩名の御同役にちがひなし、彼女が口にする、だあよから推察するに彼女は何處かの田舍大工の女房で夫は性來の白痴に愛想をつかし外に好いのを拵らへて、子までなしたを置き去りに何處かへドロンじて終つたのを、何でも東京にちがひなしととんだ今樣日高川、何うやら水は渡つたが、ふところの方がすつかり止つて終つたので、蛇にはならぬが俄の貰ひ人となつて、戀しい亭主を尋ねながら、鐘に縁のある淺草界隈を『大工だあよ、中村兼吉だあよ』と廻つて歩く樣になつたらしい。そいつを見て流石は江戸つ子お與太さんと來ては、兼に怨みはあるかも知れねえが、定めし金に困るだらうと一錢二錢の手の中を遣る者があるので、何うやら命をつないでだあよの亭主を尋ねてゐるらしい、けれどもだあよの亭主が見付るか何うだか、まことに覺束ない話しだあよ、

▼何はともあれ、この三馬鹿に曾我の家五九郎、オペラに八木節、水族館の海ちやんなどは、十二階や仲見世の紅梅燒、花屋敷に活動などが明治の時代に生れた淺草名物ならば、大正時代の淺草名物丈に特筆大書する價がたしかにあるだらうと思ふ。（柏家頼智坊）

■活動辯士の奮慨

ツイ近頃、大阪の某大新聞の論説に、辯士の出放題な説明が、映畫の趣味を損ふことを攻撃したやうな意味の文句が並べてある。辯士必ずしも出放題のヨタを飛ばすとは限つて居ない。忠實に寫眞の筋を説明したくても、其筋の檢閲と干渉の爲に、餘儀なく、時として正邪や順逆を轉倒したり、或は夫婦の關係を兄妹の關係としたりして、識者からは間違つて居ると云はれるのを覺悟の前で涙を呑んで説明して居る位のことは、、、モウとつくの昔からわかつて居るだらうと思ひきや、氣の利いた化物はモウ引込む時分の今日此頃に、そんな攻撃を麗々しく書き立てゝ居る迂

門司の料理屋に起つた不思議な鼈の祟

門司の料理屋で××屋と云ふ家がある。其の上品にして繁昌して居ることは、門司に於ける三大料理屋の隨一と稱されて、殊に主人自ら採る庖丁の冴えは、關門若倉間の粹客に舌皷を打たせて居る。殊に關門名物海豚の味は下の關に讓るとしても、スツポンの料理振りは確かに此の××屋の右に出るものはないとさへ云はれて居る。脛一本腕一つから料理屋を開業して現在では巨萬の富を持つて居るが未だ長年伴れ添ふ女房の腹から、兒と云ふものが生れなかつた。處が二三年前月滿ちて女房の腹から漸く男兒を擧げて直ぐ死亡したが不思議なことには其の兒の脚腕は、膝頭も腕にも肱もなく、恰度龜の形と同じであつたので、夫婦の驚きは勿論、せめては生絶他人の眼に觸れずに死んだことを喜んだ位ゐであつた。然るに其の翌年再び女房が姙娠して、生んだ兒が前同樣なのに愈よ呆れ返り、これもスツポンの祟りであらうと云ふ今に子がない。

潤さ、イヤハヤ沙汰の限りだ。同紙の兄弟分たる東京の某紙が、明治四十五年一月元旦、今の淺草公園の御園座が未だ福寶堂の直營活動寫眞常設館で、福和館と云つて居た時分、映畫室からフイルムに火が移つて發火し、大事にならずして消留めたが映寫技師二名は大火傷をしたのを、燒死んだと思つて、其事件が生じてから一ケ月後の紙上に、矢張燒死したと書いた時は、心ある人からは、其迂濶を笑はれたものだが、今度大阪の某紙の辯士大攻擊などは、それに上越したウツソリで、流石兄弟關係があるだけに、迂濶な點迄ソツクリなのは、ハテ爭はれぬものであるわい。ウハヽヽヽヽヽア。これでは活動界に同情がないのは當り前だ

■東海道江尻の裁縫私塾の師匠

茲に書くのは、家のために自分から進んで娼妓を志願して、末には裁縫に熟達して、今は立派なお針の師匠として金看板を揚げてると云ふ先づ女の立志傳であるが、そんじょのお轉婆娘の藥にもならうと思ふから自分の知つてる丈けを記して見よう東海道靜岡に明治三十年頃迄は奉公人の五六人も使つて居た米屋があつたが、ふとした事から店は人手に渡る迄に傾いて、主人始め家庭の現住所靜岡市在有度村に引き移つたのは三十二年の春であつた。此主人とは本願の主人公望田はる子が父の寅次郎である其時はる子は六ッであつた夫れから暫くは何のこともなく僅に殘る店仕舞の金で食つて居たが、はる子が十歳の時、母は或る病のために床に就いて、毎日醫藥を樂しむ人となつたので、只さへ困る家計とて父母は涙ながらにはる子に奉公を頼んだ。此時のはる子の胸はどんなだつたらう。三ッ五ツの時迄は奉公人の手車に乘つて遊んだ者が、六ッの年には又今はと幼な乍らも此先如何なる不遇の人となる可きかを案じて人知れず涙したであらうが、今は言はるゝ儘に、同村小學校長の家に子守として養はれた。そして毎月得た少し計りの金を母の醫藥の代に換へて居たが、母は其翌年次女さき子を産んで間もなく死んだので、サキ子の養育に父もはる子も母の生前以上の苦しみであつた。

はる子が十六の春、程遠からぬ父の家に一寸歸つて見ると、以前と變つた父の元氣ない姿にハツとして尋ねて見ると、父は先年貧困の餘り某高利貸より金を借りて近日返さなければ家も屋敷も人の手に歸すので、元より自分が承知で借りたのだから仕方がないとは言ふものゝ、今此家を取られては幼ない子供と立働きもした事のない此身は何うして何所で日が送れよう、生きて行かれよう、言ふも愚痴な話だが、此村の人にも隨分靜岡で米屋をして居た當時は金も貸してやつて戻らないのも澤山あるが、夫れとて今は知らぬ顏して物一口も言はない、あゝ死んだ母が戀しいと男泣きに泣いた。是を聞いたはる子は子供ながらもグツと腹に徹して何か言はんとしたが、其時は其儘床に入つたが仲々眠られず一夜考へ徹して翌朝になると、主人の家へは行かず、靜岡へ行つた。そして雇人口入所の世話で東海道線岩淵驛前の谷屋と言ふ旅館に女中として雇はる樣になつたので、其足で急ぐ谷屋に至り、若干の金を前借して自分の決心と金とをこま〴〵手紙にして父に送つた。斯うした殊勝氣のはる子の決心も、高利貸から借りた元金に迄で及ぼす丈けの金ではなかつたので種々と考へた末、愈々娼妓になる可く決して、谷屋旅館を出たのは彼女が十九の春であつた。夫れから間もなく中泉町遊廓三浦樓より源氏名を九重と言つて出たが、他の娼妓の樣に惡擦れはして居なかつた。聞けば身の代金で借金も返し、殘金で父も小商内をして今では別に苦もなく妹と二人で家に居るとの事である。

二三年茲に居て後掛川の鈴本樓に鞍替したが、此土地の富豪山崎某なる老人に思はれ、身請話も出たが、自身が決心してなつた商賣だから自分で借金は返す、他人にお世話になるのは後が恐ろしいからと言つたが

人に人が入つて二十三の春落籍されて足を洗つたが、勤め中讀書を好むでしたゝめ、學校は尋常卒業でも高等小學校卒業位の腕前はあつた。

落籍されてから四五ケ月の後、老人は死んだので親族から數百金を貰つて一度家に歸つた。

此金で靜岡裁縫女學校に入學し、一年半にて正規の課程も卒へ、後東京青山渡邊裁縫女學校の二ケ年の修業も半苦學的にて卒へ、今は東海道江尻に立派な金看板の裁縫私塾を開いて居る。未だ獨身である。

夫れは勤め中相思の青年が目下滿洲で活動中であるとの事、此青年の成功の曉に何年振りで芽出度夫婦になる事であらう、同人のため自愛を祈つて筆を置く。(香花園主人)

通夜物語

或家の通夜に行つた、本來ならば通夜と云ふのだから打ち濕つてゐなきやならないのだが、當節の通夜と云ふやつ恰ら昔の祭りのやう、初めの中は『まことに何うも飛んだ事を致しました』なんて白ばつくれてゐるが、線香一本上げて了ふと『まあ一つ』と云ふんで酒が出る、來る奴も〳〵此傳であつちにも此方にも通夜の夜たけに鮹入道が出來上つて『サアー一つ賑やかに』とか何とか、初めの中は殊勝らしく南無阿彌陀佛々々々々々々とやつてゐるか、終ひには脫線して都々逸なんかうなり出す、又何處の通夜にも一枚や二枚は三枚目役者の來てゐるもので、是は又夫れを得意としてゐる、僕の行つた通夜にも其麼のが一二枚來てゐて、木魚ポク〳〵の大うかれ、それがすむとヨタの飛ばし放題、通夜僧と捕まへて『和尙さまお前さんのあたまは何うしてさうまろいんです、臺灣でげすか』とやらかす、すると合棒が『臺灣に坊さんがあるもんかな、禪宗の初まりは南京の方よ』とやらかす。今度は『時に今度出來た自動車の女車掌と云ふやつ彼れは不都合だな、兩方女なら好いが片ッ方は野郞と來てゐるから、若し客のゐれえ時には何をするか解られえ、好い話しの最中に乘つた客は災難よ、惡い時に來やがつたから置いてき堀なしてやれなんて、片足乘せた處をピユーと出されて停留所へ尻餅なんてのもあるだらう、第一彼奴驅落でもされたら追かけるのに大變よ』と云へば『其時や仕方がれへ飛行機よ』

今度は御臺場の話しになつて『今でこそ彼麼ものは何でもないが、昔は黑船が來た時彼奴を見て驚ろいたさうだぜ、第一浦賀邊りぢや寺々の釣鐘借りて來て、向ふむきに竝べたさうだ、すると日本にも斯麼でつかな大砲があるかてんで、寄り付かなかつたさうだぜ』と云ふと『夫れはあたりめえよ昔から唐人に釣鐘と云ふ事さへあつてよりつけれえものになつてらな』で一同ドツと來る、今度は

『又五郞が死んださうだが、まだ死ぬのは早過ぎるな』と云ふと『あれや公園の小さな小屋へ行つて體を安く使ひ過ぎたせいよ』と云ふ『成程そんな事もあるかも知れねえ』と云へば『第一公園矢の如しと云ふ事もあらあな』

『電車の同盟罷業はとんだ大事になつちまやがつたぢやれえか』と云へば『とんだ大事になるはずよ同盟罷業(飛行)てんだもの……』

又坊主の話しになる、第一此節の坊主は御布施次第で亡者を大切にし粗末にも取扱ふてへぢやれえか』と云へば『知れた事よ壇家の娘に御手附けさへする坊主があらあ』『それぢやまるで百人一首の話し見ていだな』『百人で一朱包みや御經が上つたていなそりや昔の話しよ、今ぢや赤線香一本に樒一つゐでも二分包まなきや好い顏はしれえや』『とんだ欲張つただいこくだな』だから彼奴等福々よ』

新作 地口集

常は見向きも仕ないが、ぽんぽんがふくらんだ時だけ、ヤレ御鹽が頂きたいの、おまくらを拜借したいのと、日本の女が唯一の賴みとする御產の神樣、鹽竈神社は奧州仙臺が本元だが、奧州まではちと詣り惡いと

南無阿彌陀佛の神山仙子

チヤボ事一條久子の死を悼んだついでに夫れよりも先に亡つた神山仙子に哀悼の意を表してやらう。

仙△子△女△史△の南無阿彌陀佛になつた事は永遠に忘れられない悲しき事實ですナ。あの淫蕩的の光り美くしき我がお仙△ちやんの死は、確に一篇の詩ですナ。あんまり男を弄したからだなんて罵倒する奴もあるが、そんな奴等は屹度仙△子△にこつぴどくフラレタ奴等さ。然り、彼女は現代歌劇女優中での第△一△等△の△思△想△的△頭△腦△の△所△有△者△であり△ました。武田正憲、川瀬蘇北、近藤飴ン坊の諸君よ、乞ふ彼女の爲めに一夕を追憶し給へ

アーメン………ちやなかつた南無マイダ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵あゝくたびれた。

言ふ、東京の者のために、芝は愛宕下の伊達の邸内に分社を建てた、その伊達家は今は他へ移つたが、鹽竈神社だけは、仙臺屋敷と稱されてゐる元の地に依然と殘つてゐる、その神社の境内に居候か内々は好い仲にでもなつてるのか、一つの御稲荷様がある、遂此間の話し此鹽竈様の氏子総代なにがし、ぽつれんとして鼻糞をまるめてゐるやつがれの柴の門を叩いて言ふやう、近日稲荷の祭禮をするから何か新らしい地口を作つてくれと、何うせ屁を放つても可笑しくもない獨り者の、退屈しのぎには持つて來いの仕事と、早速持参の紙へのたくつて渡したが、滿更御笑ひ草にならない事もないと思つたので、その草稿を茲へ寫す事にした。

墨汁の手習（六十の手習）
鹽豆旦那嚙み（鹽竈産の神）
咲いた藤にくす餅（開いた口に牡丹餅）
酒にするめは兵隊さんの御宴（竹に雀は仙臺さんの御紋）
芋とおすもじにや二本でたへる（いろと仕事師や二番に限る）
次男こまりもん、芝の御成門、
旦那の慾張り（團子の横喰ひ）
屁は南京米（給は神明前）
お枕三度借り（鎌倉三代記）
頭のはげ見せう（愛宕の化銀杏）
娼家〳〵は小新道（十日〳〵は御縁日）
ひとりもんの食心坊（日影町のつるしんぼう）
母や御婆は午盛り（嵯峨や御室の花盛り）
さかなはぜいたくで（高輪泉岳寺）
金歯で輜重輪卒 新橋停車場
牛のきも八萬丈（西久保八幡町）
死んだ因果同士、銀座煉瓦通り
露探にから銃（牡丹に唐獅子）
洋服のはだし（兩國の花火）

縞のシャツ眞黒（芝の薩摩ッ原）
明いた戸に破つた戸（抱いた子に負つた子）
支那へ大用心（稻荷大明神）
―（奇文大鑑）―

■はたの屋のお照さん

お照さんはほんとに下町娘らしい人です。上野驛の前通りをずつと三の輪行の電車を横切つて、宿屋の澤山並んだ左側です。上車坂町の一番地位でせう。はたのやといふ煙草屋の家附きの娘さんです。すぐ裏の下谷小學校を出て、今年は二十です。眼と口元に可愛らしい微笑をたゝへ朝日一つのお客にも氣持よく應待してゐます。女としてはまあ小柄の方ですけれど、年と生粋の下谷ッ兒ですから何となく艶ッぽい人です。よく朝日一つを口實に長々と店先きで話をしてゐる角刈頭の人がゐます。『あの人？』と意味のあるやうなないやうなことを言ふと『別になんでもないのよ』と口元に小皺を寄せて笑ひながらあつさりと打消してしまひます。近所の鼻下長先生やそこ等の宿屋や仙臺ホテルのボーイ連は、機會御參なれとばかりに狙つてゐます。お照さんの胸に秘められた主は何誰だか知りませんが、もしその人がゐたとしたら幸福此上なしの人でせう。お祖母さんにやさしく仕へてお店を毎日手傳つてゐます。オペラも金龍館へたまには見に行くのでせうが、田谷力三にお百度を踏んだりするやうな馬鹿げた眞似はしません

下谷
中成田
桃太郎

あなたは大へんに好かれる性分です、一年毎に幸福が續いて居るでせう。然し今年は少しお寶に不自由をします、風邪も注意しなければいけません、けれども「うきよ」を毎月缺かさず讀めば病氣になりません、そしてお客樣にも勸めれば尚ほ豪くなります。

■十六體の佛像

越後の國は直江津町字安國寺の五智街道といふ處に、茶の湯といふ湯屋があつた。

主人の平兵衛といふのは、性來の御幣擔ぎて、毎朝、目が覺めると、ありとあらゆる神佛を信心するが例であつた。處が湯屋も漸次儲かつた處から、大正の初めに、新築し、數寄を凝らした普請をしたが、新築以來家人の通用口に宛てた、四分の戸が妙に光澤を出し初めた。主人は大變な喜びで終日間さへあれば、下女下男に命じて、拭き磨かせてゐると、不思議にも、節目は次第に佛像を描き、袈裟、裸體合して都合十六體の佛像が、ありくと現出した。

かうなると、主人は全然有頂天で、本職の湯屋は休業し、毎日、家族を扉の前に並べて、禮拜怠りなく、爲に、市中の有難屋連中、われもくと押しかけて門前市を爲すの狀態遂に警察の御厄介となる。

うきよ風呂

若き友よ來れ！

此の「うきよ風呂」は記者と讀者諸君、讀者諸君同士の談話室であります。語りお互に批評したり希望したり氣焰を擧げたり乃至彌次つたり・利用することです。葉書又は原稿紙に明瞭に書いて下さい。匿名は勝手

●記者は◎讀者は■

◎神戸の森徳君住所不明の爲め手紙が戻つて來ました至急住所御通知下さい（柳はる吉）

■未だ十一月だけど新年號への投稿だからお目出度う、美津子孃、あの人とは何事であろ、其說明を聞きたい、其上で一矢を報いよう、青山のあい子とやらお尻云々の意味が解らない、男が甘くなかつたら君達婦人は困るだらう甘いことはとりも直さず婦人救世軍の男士に外ならない、男が甘くない時代があつたと假定して考へてからものを云ひ給へ、又不景氣どころか上景氣なり、尙ほ鏡臺は立派なのがある、けれどもニキビは既う無くなつて居るから安心してくれ給へ、それより君が鏡を見ちや暇に任せておでこひつこめ鼻高くなれと叩いてつまんで居るんぢやないかね、影ながら心配して居る、隆鼻術など聞きたければ教示してやらうか（本郷に名高いキヤラメル）

■どうです美津ちやんに久美ちやんにあいちやんミンナ綺麗な御名ですね、そんなにキヤラメル君とばかりで話して居ないで僕の方も向き給へな、僕は美男子ですよ雁次郎と幸四郎と、伊井を合せた樣なれ、田谷力三は僕の弟だよ――さうらこつちを向いたどうだい好男子だらうおや〳〵三人共思の他お多福なんだねどうだい其の格構は……こて〳〵お白粉ばかり塗り散らかしても素が惡いんだ柄駄目だよ。美男子の交際を願ふ愛らしい乙女だの美貌男子は申込謝絶のつて云ふ柄最少し美人かと思つたよ（僕のには追着くまいと思つたがね）退却〳〵その顔では面と向つて男も出來まいよ處で好男子揃のうきよ風呂へ入り込んで物色するとは智慧があるね併しこゝは男子物色所ぢやないよ駄目だよそんなにちやら〳〵しても僕には立派なのがあるんだ柄ね最少し美人になつて來給へ、いゝ處を話してやらぬ物でもないよ。どうです諸君此の婦人に同情して一つ寫眞でも取り寄せて見給へ一日見て頭がいたくなる程醜婦揃だ柄ねだが同情するよ僕は善人だ柄……そんなにまづい顏をして美男子がほしいた澤々しいアラをかしアツハツハアツハツハそんなに美男子が戀しくばお面を替へて來やあがれこりあをかしアツハツハアツハツハピ――（橫濱今業平の濱の字）

■記者樣私は昨年來御誌の愛讀者であります號を重ねる從ひて其發展振が日に立は偏に記者樣の御努力と感謝してをります然しイツモ〳〵不滿に思ふのは口繪寫眞中に現はれたる人物の態度であります全部が全部と云ふ譯ではありませんが批評して云へば寫實的でない事です例へば十一月號（ピストルと短刀）の繪で最初の毆打中の男の目付は撮影者の方を見つめてゐる又哀願の處に置ける男の目付も撮影者の方を見つめてをつて何となくいやな氣持になります今少し寫實的にしてほしいものですな（神奈川忠實生）

◎御意見ごもつとも大いに注意いたす樣寫眞係に申します（記者）

■うきよ黨の皆樣よ私も十一月號からの愛讀者になりましたから以後御交際を何がさて皆さんの氣焰振で溫泉場氣分を味合ふ事の出來たのを深く感謝致しますどうか皆樣も此欄を御利用遊ばして益々御自慢の氣焰を上げられんことを記者樣にかはりて大提灯を持つた次第で有ます終りにはんのり化粧遊ばした日本橋久美子樣私がついて上げますから心おきなく御氣焰を振るはれんことを、皆樣その內に左樣なら（本所金坊）

■月日は水の流るゝ樣に茲に霜月を迎へることになりました記者先生竝に愛讀者諸兄姉御健全ですか、僕は本誌創刊以來愛讀して居るのですが本欄は今だ一度も顏を出さず御無沙汰致しましたが以後は折々出しやげりますから宜しくね、おゝ旺なるかな我がうきよ雜誌記者先生は日夜心血を注いで本誌の發展に盡瘁せられる數萬の讀者亦言々是汗と淚の結晶を投じて堂々誌上に覇を爭ふ先生の熱烈燃ゆる如く讀者の意氣天を衝く、本誌の前途正に洋々たり嗚呼何と壯快否痛快ではないか御米の御飯は毎日食べてもあきがこないと同じて本誌はいつ見てもよい味を保もつて居る眞の樂それは金でも贅奢な生活でもない自己ゝ奮闘の過程である自己の腕自己の汗によつて出た滿足が最大の樂しみである此頃勞働がいやになつたと云ふ男女が頻りに出て來た彼等は自己を愛せず不幸の境地に走る者である身は貧くとも自己の勤勞によつて出たる一盃の冷酒の妙味を忘るゝ勿れ十一月號本欄隔美津子さんの御說の通り本欄は今まで面白くありません諸兄姉は御奮發を僕が男子の方に訓練する愛讀者諸兄姉御文通を若い前號のハイカラの美女子の方に御願をする美津子さん初音さん御住所くはしく御通知を（神戸市兵庫田路勝俊）

■以前因緣だの怨顏だのつて辣々するやうな記事に滿ちた御誌が漸く陽氣なうき〳〵した眞に浮き世染みた記事になつて來た何處かホツとした樣に面白かつたのが又もピストルだの短刀だのつて引つゞき年末號も殺すの死んだのと慘憎たる光景ばかり見せつけられチヤアつく〳〵嫌やになつちまうワ、如何に社會の裏面の眞相だつて實話だつて、出す者だか見る者も見る者も見る者だナシて家の蠻殼がふふンダ、斯んなに憂き世にして化舞はなくつてもよさソウなもんだに、コハイ見たさに御無心腰で覗き込むやうに見せるより、シツクり抱き付いて讀むやうにする工風はあるまいかしらなんて例に依つて

THE LIBRARY
BRIGHAM YOUNG UNIVERSITY
PROVO, UTAH

理屈れ口知件（府下鹽殻の子）

■先生何うでげす、近頃の景氣は米が兩に五十錢の時代とは違ひやす、今まで番卷不景な顔をして居ても急に兩に三十錢菜と言ふ安値に下ッて一時に喰ひつめて食傷してドクトルのやつかいになるとは、イヤハヤ此んな事も有勝でげす、昔より食つて死んだ人は多いが食はずに死んだ人は少いやうでげす、その道理をきゝわけて、チヨイ〱一寸氣を付けないといけやせん、念ッため先生御一同に訓示するんでげす、先生かう見えても姿は實の所前途有望なる活辯でげす金のなささうな飯の食ひさうな顔付をして居やすが其の實中々そんなことではありません、一錢二錢は何時でもおりやす、百や二百の金は何時でも御用立てるでげす、御ゑんりよなく申込んで來てよからうぞ、アイヤ先生之にて御免、御縁があらば又逢ふでござらう、之没書にしますか、天道さまきこえませぬわいなあ（鹽原大原天華）

■ヤア〱其れに見えたるは本郷キツテのおてんばの猛者美津子孃と見たるはヒガ目か此く言ふ拙者は中國に於いて然る者ありと知られたる滿次の先陣を承る自惚冠者とは我が事なりイザ尋常に勝負〱……汝等の娘子軍城下の誓ひをなすとは神妙の至り急々我が君の許しを得ば我が臣下に加へ嘘八百石を與へん能く忠義を盡せよさは然りながら「うきよ風呂」に於いて汝の申せし小賢しき一言我等自惚美男子の名折なれ共此の度は神妙の行爲に對し特に寛大に忘れ得さす若し此の誼に背く時は打首、輕くて流罪に致ゝべし能ゝ心得よ（廣島自稱美男子）

■記者様本誌が毎號發展して行くのは非常に嬉しきことであります。次にどうです今少し蜜の如き甘い男女の囁きを漫畫的に御書になつては如何。本誌に漫畫の無きを遺憾とします次に十一月號の欄の本郷弓町美津子様貴孃に御願ひです。僕の如き内氣なる男は貴孃が如き快活なる人に訓練して貰つたら外氣に成ると思ひます御交際を。愛する美津子様住所氏名をくはしく紙上に發表あれ（金鯱輝く中京にて—倉知鯱南生）

■ゝう眞半御面れ、己らは姉めてはひろ浮世風呂だ兄いや姉ご等何分頼みやすぜのう記者兄い己らも之からぼつ〱とあびやすが没むな生れ付

（本誌愛讀[illegible]の瀬野二郎君の[illegible]寫眞でござい）

大禁物だ、きしやは海女のまれも出來めえ此こだ氣を付ろのは本鄕弓町美津子姉子へ大した意氣込みでへゝゝゝ其れぢや御望みの色男も手が出來ますめえぜ、たまにや己らのやうな鬼殺兄も味はへねえ見たぢけぢや知れめえ、だが一ばしで驚くなよ姉ごの口ぢやア消化れれや、消化劑でも用意して掛かりれよ、大きに御邪魔を致しやした。本鄕千駄木町一○三影山方どくろ）

■記者先生初め皆々様御變りは御座いませんか、私は北九州の一角勝城下に住む一愛讀者で御座います[illegible]どうぞ御見知り置き下さいませ[illegible]の美津子さま同名で御なつかしいわ貴女の様なお姉様がいらしやるかと思ふとほんとに私心強う御座いますお姉上様末永く御導き下さいね、私も及ばずながら九州女子の本分を發揮して奮ひませうそして我々娘子軍の城郞を擴めませうよ大阪の[illegible]隊御心を大きくお持ち遊ばして御[illegible]ひ遊ばせ（小倉市美津子）

■雑誌を買ふと先づ此のうきよ風呂を見ます、そして順に丁寧に讀んでいつて讀み終ると今度は本文、隅から隅まで讀んで、それから此のうきよ風呂の手紙を書きます、神田の眞なんとか云ふ讀者の寫眞が特に目を惹きます鳥渡好男子れ、だけど姿こんなニヤけた男嫌ひよ、もつとキリツとした男らしいんでなくちやいや青山のあい子様あなたも吾黨れ大いに振ひませうね、田端の大工小僧さん其歴フラチな親方は追ひ出してしまひなさい、信州の歌二様あなたの名前は須敵にいゝ名ね、それでほの字よなんて言葉を使はなければ尚ほいゝんだけと、交際はいゝけど美男子だと仰せられるなら是非寫眞を見たいものね、今度の號へ揭示して下さいな、キヤラメルと云ふ男の男子の殿方よ、お母さん證明つきの美男子やつばり寫眞を誌上へ揭けてもらいたいものね、姿は東髮は嫌ひ、日本髮か女優卷ですよ、それから、ミスですことも言明しておきます、手紙は返事をくれなければ上げてもいゝことよ、返事はおつかさんに目つかるといけないからいや、夕方大横丁を步いてる美しい女を見たら姿だと思へば間違ひありませんよ、大阪の半七とやら男だてらに此風呂に入る

娘子に眉つくとはケシが辛い抑も男たる者は家にありて妻君の御機嫌を伺ひ外よりはお土産を買つてくるやう心がける者なり、おとなしく戀愛論でも伺はうとすればいゝんです、さうすれば女に嫌はれる虞れはない、今度は此位ゐにして許して居るが、此次此んな眞似をすると承知するぞ、但し妾は美しい顔の所有者也優しく交際してくれと云へば交際してやらない事もない、あゝくたびれた、記者様ちやんと原稿紙へ此通り明瞭に書きましたよ、これで没になる筈はないでせう又次號で（本郷美津子）

◎結構です、字も女らしい美しい字であることも記者から廣告しておきます、又次號で（一記者）

■十一月號うきよ風呂にて拜見した東京美津子氏の説實に贊成です、今時の娘子君は戀！愛！と影で言ふばかりで男子の前たらまだしも青年諸氏の幹とも云ふべきうきよに大いに奮鬪して攻落とされん事を待つ實行出來ね娘さんはうきよなはなれた方がいゝだらうと思ふ、又男子軍の諸兄益々努力あれ、横濱扇壽樣、白石初江子様、東京保水様、横濱蕉鳳様祝文厚く御禮申します（大阪府北河内郡大和田村字横地田中方松原綫雪）

■秋は陰氣なぞと何奴の寢言だ實際人間の活動出來得るは此頃の樣な自然に人身の引締る時だ記者足下投書家諸兄姉健在なりや僕は病氣の爲め十一月號文藝投吟は休まざるを得なかつたが諸兄は相變ず奮鬪努力傑作揃ひし本欄の如く御べッカ的語や決まり切つた御族投な止して記者諸君の發奮と投書家相互の努力な層一層强からしむべく大に氣焰を吐かう

ぢや無いか僕ら秋冷の肌寒きを浮世風呂に入つて熱を上げよう同意同感の諸君心在らば書信の交換を希望す終りに鏡霧君度々御玉章有難う病氣の爲めに御無音多謝々々（岐阜市金園町六松本松角）

■朝夕は凉しいぢやない大分寒くなりました記者樣初め諸兄姉樣御變りはありませんか？本誌は紙數があまりに少ないもう少し紙數を增加したらどうだ、いくら物價騰貴の折柄でもあまりと言へばあまりだ然し內容のキビ〱した所に眞價があるかナさて當欄を見渡した處男子は活氣がないと見える、僅一婦人の爲に活氣がないといはれ、訓練してあげるナンテ言はれて引込んでゐろのは、どうした譯ぢや、ハヽア解つた、キヤラメルの如な男が多いからだナ人の説を一々もつとも〱とペコ〱頭を下げてケツカルから、女にナメられるんだ、何ツキヤラメルが怒ツタ甘いのは當然だとフヽン成程菓子か？道理で甘い野郎だと思つた。初風呂早々御八釜數ッ失敬（大阪茶目坊）

■ミナサンワタクシモ『うきよ』ノアイドクシヤトナリマシタ、ナニトゾヨロシクタノミマス、ワタクシモコレカラ、タクサントウシヨイタシタイトオモツテヲリマス、ソノセツハヨロシクオタノミイタシマス。（府下大島町二丁目六七四高野方伊奈加毛野）

■皆さん御變りなくつて、如何ですか隨分さむく成りましたのね、此の頃のうき世風呂隨分發てんいたしますわかげながら、本誌を愛讀いたして喜こんで居ります、本鄉の美津子樣もつと〱氣焔を上げて下さいでないと、おてんば連が弱男子にまけますから、私も之れからどし〱申上げますよ、洲崎の初音さん、私も貴女樣と同じ運命の元に生きて居りますの、本當に自分の身を思ふと悲しくなりますが、何日もうき世を愛讀いたして、何よりの友といたして居りますわ、此後、誌上を持つて御交際を願ひます、皆さん御身大切に遊ばせ（信州の山中紅葉子）

■本日十一月號俳句當選賞金有難く頂戴しました、十二月號ではやはり佇泣子君は御奮勵ですね—。いつもながら感心してゐます。なんしろ鳴潮社の御大ださうですからね—本誌に先般小唄欄を設ける事を力説なさつた樣ですが、君は小唄もなが〱作られた方だらうと思つてゐます。若し異つたら御許下さい、何日か他の雜誌で「阿房の惣太」の民謠の一編神戸の田中顯治氏とありしは君の本名、田中明治より推して兄の御作と恩ふ。如何にや。盲言多罪（神戸市秋嚝）

■アラ大阪の半七ッアンてば眞ッ黑ケの髭モクシヤよ。屹度そうよ。美津子さんに針の先で、もツツけなんてソリヤ無理な要求よ、ナンぼ美津子さんが、エライツて痛いわ、屹度血が出るワ、ツツくのは針の尻でせう。私美津子さんが大好きよ、大に加勢するワ、私一ト人でも三十人や五十人は引受けるワ。（東京喜美子）

■貴社御一同及び諸兄姉明けましてお目出度うございます、今年度も相變りませず御交際下さい、十二號の風呂にて大分けしからぬ爭ひをなせし男女生いくら「うきよ式」とは云ひながら餘りの事と思ひますれ天下の青年淑女たるもの、言ふべき言葉でせうか貴方々ばかりの愛讀する雜誌でもありますまい、物堅い諸兄姉もおいでの事なれば今少し詰らぬ事はぬきに眞實よりの社會主義的の素ツ破ぬきを入浴させやうではありませんか前に戻つて十二月號の風呂はまるでけしからぬ方々にて他の兄姉の文が全然隱居に過ぎましたれ、記者樣及び滿天下の諸兄姉如何ですか何しろ雜誌上に於いて此餘り外聞がよくありませんからの樣な事を言ふて怒るものあれば、れ末筆ながら文藝欄上の首將諸兄姉相變らず御指導の程願ひます（橫濱市末吉町醉狂人）

■私はうきよ誌の一端を拜借して愛讀者諸兄姉の御意見を御伺ひ申上ます各文藝物を半紙にてそれ〱同封して投稿するやうにしたいと思ひます皆樣は如何ですか御意見御伺ひ申します、されば各々方の御發展を祈る（大阪松原殘雪）

■萬天下の諸兄姉樣私は此の月から當地書店でうきよを買ひ愛讀してゐます者ですが何度諸兄姉樣之御敎導にあづかりりいうきよを活動したいと思つてをります鐵腕一本袂百買で愛する農業し務めつゝうきよの便りを唯一の樂しみにして生活して居ります、筆の男はまづいが之でも腹の底は面白いくですぜ。僕の顔立は先鼻の餘り高くない目じりの下がつた男です、ハヽア何度天下の美人は房州の二本棒て借へレタイ送られん事なきはうし言やまぬ次第なり（房州豐田小戸野蜂雪生）

■記者樣初め諸兄姉暫く御無沙汰致しました其の後おかはりはおりませんか、私は幸ひ無事に居りますから號一號に發展して行く本誌に何か一つ物足らない感じがします讀者樣諸兄姉何でしよう？大和櫻井町の山添さださん何ともみ便り下さら[illegible]ネあまり氣兼かではありませ[illegible]

[illegible]岡縣小倉市の石橋染津子樣九月廿九日に下さつたお手紙確かに頂戴致しまして直ぐにお返事致しました所二週間の後不明の故を以て戻つてきました御住所を判然と至急お知らせ下さい奈何か貴女がおつしやつたやうに貴女がうきよ雜誌を拾さられない限り永久に〱御交際下さい終りに本欄に投書せられる方の內に「私は何時からの本誌愛讀者で——」と書かれるのを度々見受けますがかりにも本誌に投ぜられる方は愛讀者に限つて居る事ですからさう言ふ言葉を入れない樣にしませう、それの方がいやみがなくて良い樣に思はれます皆樣如何でしよう御高志の程を、では皆樣小夜奈良（奈良縣磯城郡城島村大字赤尾森岡春海）

■私は讀書が好氣です私は前愛媛縣松山市に住んで居ましたが此の十月より穎と云處に轉任になりました私は「うきよ」雜誌がだい好きなのです私は大正三年の七月頃より愛讀致し居り此の二年前まで休讀して今又愛讀し初たのです私が愛讀し居た時よりまるきり改正せられ又頁數の御發展日增して居る樣に私は思ひます先輩の諸兄姉樣並に諸記者さま今後何卒よろしく御願ひます[illegible]しく御交際を申します住所は處の顆町[illegible]內別作山雪子）

■十一月號[illegible]金昨朝正に[illegible]有候く受納仕候駄作に意外にも入選と[illegible]榮に浴仕[illegible]て汗顔の至りに存上尚誠意專念研究仕るべく候間付來馬も御見捨てなく御教示の程只管願[illegible]候封入の[illegible]ハカキ二種……小生の[illegible]氣た扮裝に有之候、素…の時の[illegible]として茶番二〇加を其盛[illegible]

Asian Collection
Japanese
098.105
Uk5n
v.9,#1